

し じ

齒音にして單子音の一つ。

しの濁音。

し使(名)

〔一〕官廳の名。……勸解由使、檢非違使の類。●つかさ。〔二〕特に檢非違使。〔三〕官名。朝命を奉じて使する意味の役。……造寺使、修理宮城使、監察使の類。●奉行。官廳の名。省に屬して寮の次に立するもの。●つかさ。

し司(名)

〔一〕歴史。〔二〕史官。〔三〕神祇官、太政官の書記官。左大史、右大史、左少史、右少史、の四等あり。檢非違使、左、右衛門府のさくわん。……さくわんを見よ。

し志(名)

歴史、地理、博物などの記録。

し誌(志)(名)

〔一〕漢語にて綴りたる歌。句法には五言、七言、六言、句數には經句、律、古風等の種類あり。〔二〕西洋語にて綴りたる歌。〔三〕西洋風に摸して作りたる日本語の歌。〔四〕支那經書の名。詩經の略。

し氏(名)

〔一〕「うち」。〔二〕男子の尊稱。○「スペンサー氏」

し市(名)

いち。●町。

し師(名)

〔一〕師匠。〔二〕製造人の稱へ。○「印刷師」

し士(名)

〔一〕さむらひ。〔二〕士族。

し子(名)

〔一〕子爵。〔二〕男子の尊稱。

し死(名)

死ぬる事。

し資(名)

資産。●財産。

し(代)

汝。○落蓬「あなわかく」しの晝寝や。しが身の程知らぬこそいさ心うけれ

し四(數)

よつ。

し(助動)

きの變化。○「月をぞ見し」ありし昔

し(助辭)

意味なく詞の間に置きて口調を強むる詞。

じ時(名)

○古今「ほのくも明石の浦の朝霧に島かくれゆく船をしぞ思ふ」同「植ふし植ふば秋なき時や咲かざらん花こそ散らめ根さへ枯れめや」

じ(三時)

〔一〕時間。〔二〕時間を數ふる詞。○「幾時」

じ字(名)

〔一〕言語を目に見るべく表はす記號。〔二〕

文章。

じ (助動)

推量を打消す詞。●まじ。●まい。○「言はじや聞かじ」人をば恨みじ」

しる

四位(名)

第四番目の位階。

しひい

椎(名)

木の名。葉も實も樫に似て少し細長きもの。古は葉を取りて紫色の染草に用ひたり。

じい

侍醫(名)

天皇の御病氣を診察し奉る醫官。

しいか

詩歌(名)

詩と和歌。

しひいたけ

椎茸(名)

菌の一種。椎の木の下に生ふるもの。干して食用とす。

しひいなせ

糍(名)

糍穀。(和名抄)

しひん

子音(名)

語學上の詞。母音の助を借りて發音するもの。……卷首を見よ。

しゐん

四韻(名)

漢詩の一種。律詩。(源氏)

じゐん

寺院(名)

寺。

じゐん

次韻(名)

他人と同じ韻字を用ひて漢詩を作る事。△(動)一次韻す。

しひいこい

強言。誣言(名)

「一」無理に強ひて言ふ言。●牽強。「二」他人を誣ひて告ぐる言。●讒言。

しひいへ

(他動)

強ひ言への略。(土佐)

しひいて

強ひて(副)

無理に。●押し付けて。

しいし

簾(名)

布絹を乾す時横に渡して張るための小たき竹。

しいじ

四時(名)

春夏秋冬。

しひいしば

椎柴(名)

椎の木の柴。

しひいしばのそで

椎柴袖(名)

裏服の異名。◎古へ椎の葉を黒色の染草に用ひたれば云へり。

しいす

弑(他動サ變)

君、親を殺す。

しろ

城(名)

岩の最も堅固なるものにて堀あり櫓あり天守あり戦に臨みて總大將の守り居る處。●城郭。

しろ

白(名)

色の名。雪の如き色。

しろいもの

代(名)

「一」材料。「二」代用。●名代。「三」代金。「四」古代の面積を量る稱へ。方六尺を一歩とし七十二歩を十代とす。

しろぬの

白物(名)

白粉。(雅)

しろがね

白布(名)

白色の布。

しろがね

白魚。(和名抄)

銀(名)。「一」金屬の名。白色の光あり金に次ぎて貴重なるもの。「二」銀にて作りたる貨

帯。「三」色の名。ぎん色。

白髪(名) しろが。(萬葉)

しろがみ 白頭(名) 能裝束の一種。老體の鬼神などの被る白髪の毛。

の被る白髪の毛。

しろたへ 白妙。白袴(名)。「一」白色の織物。「二」白色。

しろたへの 白妙の(枕) 衣、袖、袂、褌、頭巾、紐、帯などの枕詞。

の枕詞。

しろねぐさ 白根草(名) 芹の異名。

しろん 史論(名) 歴史上の論說。

しろむ 白む(自動四段) 白くなる。

しろむ 白(他動下二段) 白くする。

じろん 時論(名) 時事の論說。

しろむく 白無垢(名) 總體純白なる衣。

しろむ 四郎(名) 四番目の男の子。◎四男。

しろむ (他動四段) 互に物を爲し合ふ意に用ふ。○「ひしろふ」引きじろふ「つきじろふ」

じらう 次郎(名) 二番目の男の子。◎次男。

しろづき 素人(名) 「一」其藝に未だ熟練せざるもの。「二」其藝を職業とせざるもの。

しろづき 瓜(名) 瓜の一種。色白く味に甘みあるもの。

しろづき 瓜(名) 瓜の一種。色白く味に甘みあるもの。

しろらるひ (名) 白痴の事ならん。件信友の説。(徒然)

然)

しろらるやう 白薄様(名) 古代の歌曲の名。五節などに歌ひたるもの。

に歌ひたるもの。

しろくぶん 西六文(名) 漢文の一鉢。四言六言にて句を爲し多く對句などを用ふるもの。……嵐陰欲暮。契松柏之後。朔。秋景早移。嘲芝蘭之先。敗。の類。

を爲し多く對句などを用ふるもの。……嵐陰欲暮。契松柏之後。朔。秋景早移。嘲芝蘭之先。敗。の類。

蘭之先。敗。の類。

しろこ 白子(名) 生れながら皮膚毛髮の純白なる人。

しろあな 白襖(名) 染色の名。水色に同じ。◎襖は青の借字。

青の借字。

しろあしげ 白廬毛(名) 馬の毛色の名。全身白くして鬣と尾とのみ黒きもの。

鬣と尾とのみ黒きもの。

しろざけ 白酒(名) 味醂と糯米にて造りたる甘味の酒。

酒。

しろぎ 白酒(名) くらきを見よ。

しろぎく 白菊(名) しろぎくに同じ。(榮花)

しろきもの 白物(名) しろいものに同じ。

しろめ 白眼(名) 眼球中白色のまごころ。

しろみ 白身(名) 「一」肉の白き部分。「二」卵の白き部分。

分。

しろみそ

白味噌(名) 色の白き味噌。

しろみづ

白水(名) 米の洗ひ水。

しろみぎさ

白實草(名) 里芋の異名。

しろし

白(形。形状言ク活) 「一」雪の如き色の有様。「二」いちじろし。●明るし。

しろしめす

知食(他動四段) 「一」知り給ふ。「二」治め給ふ。●領し給ふ。

しろもち

城持(名) 城を所有して居る大名。

しろもの

代物(名) 賣買上の品物。

しろす

知(他動四段) しろしめすに同じ。

しば

芝(名) 草の名。葉は小さくして細長く根の蔓ひ廣がりて忽に地上を縁にするもの。

しば

柴(名) 「一」枝を折りて薪料にすべき木の總名。「二」葉の附きたるまゝ折り取りたる木の枝。

しば

(副) 暫し。●暫らく。○「しばせ給へ」雅(形) しばく。●度々。●幾度も。○「しば鳴く

しば

千鳥」(歌詞)

しばい

支配(名) 指圖。●統御。●管理。△(動)―支配す。

しばる

芝居(名) 「一」芝の上に座する事。「二」演劇。

しばるさかもり

●歌舞伎。芝居酒盛(名) 芝の上に居て酒盛する事。(曾我)

しばるもの

芝居者(名) 芝居の役者。

しばどり

鷹鳥(名) 明方にしばく鳴く雛。○山家集「物思ひはまた夕暮のまゝなるに明けぬと告ぐるしばざりの聲」

しばりくび

縛首(名) 刑罰の名。●絞首に同じ。

しばる

縛(他動四段) 緒繩などにて強く括る。●搦める。

しばら

芝原(名) 芝生の原。

しばかり

柴刈(名) 山野へ柴を刈りに行く事。又は其人。

しばがき

柴垣(名) 柴にて結ひたる垣。

しばたたく

屢叩(他動四段) 瞬をする。

しばたつ

屢立(自動四段) しばく立つ。○萬葉「音しば立ちぬ」金葉「しば立つ波」

しばなく

屢鳴(自動四段) しばく鳴く。○堀川「夜や寒き友や戀しき寐て聞けば佐保の川原に千鳥しばなく」

しばら

暫(副) 「一」僅の時間。●ちよつと。●さんじ。

〔二〕轉じて久しく。

しばん 幟半(名) 軍旗の一種。(圖)

しばん 師範(名) 〔一〕手本。●模範。〔二〕

師匠。

しばんぶん

四半分(名) 半分の又二つ。四分の一。

しばふ

芝生(名) 芝の生えたる土地。

しばうち

芝打(名) 馬の鞆の房長く地に垂れて芝を打つ。ほごなるもの、稱へ。

芝移(名) 芝生より芝生に移る事。○山家集「片岡に芝うつりして鳴くきつ立つ羽音とて高むらぬは」

しばのいほり

柴庵(名) 柴にて葺き圍ひたる庵。

しばのど

柴戸(名) 柴を編みて作れる戸。

しばぐり

柴栗(名) 栗の一種。さ、栗に同じ。

しばぐるま

柴車(名) 柴を束れて山より落す車。

しばくさ

芝草(名) 芝に同じ。

しばや

柴屋(名) 刈りたる柴を貯へ置くところ。●柴小屋。

しばぢま

柴山(名) 柴刈に行くべき山。

しばふるむね

(名) しわふるむねを見よ。

しばおね

柴舟(名) 柴積む舟。

しばごや

柴小屋(名) 柴屋の假なるもの。

しばゆばり

屢屨(名) 疥癩の古名。

しばしば

屢(副) 度々。●幾度もく。

しばしばど

(副) しきりに。○枕「しばくさ追ひ來る」

しばずりごも

柴摺衣(名) 柴にて摺りたる衣。

しに

死(名) 死ぬる事。●死。

しに

死入(自動四段) 全く死ぬる。

しに

死恥(名) 死際に遺す耻辱。

しに

死別(名) 死にて再び逢はれぬやうになる事。

しにかばね

死屍(名) 死體。●死骸。

しにかほ

死顔(名) 死人の顔。

しにかへ

死返(自動四段) 死ぬるほど苦しむの意。……物に強言ふ時の形容。○源氏「死にへり思ふ心は知り給へりや」落窪「若き人は死にへり笑ふ」

しにがみ

死神(名) 人を死に導くといふ神。

しにん

死人(名) 死にたる人。

しにのおほき

死玉(名) 死を恐れて云ふ詞。(佛足跡歌)

しにきはり 死際(名) 死ぬる時。●臨終。●最期。

しにめ 死目(名) 死際。●臨終。

しにみつ 死水(名) 人の死際に手向くる水。●末期の水。

しにす 死(自動サ變) 死ぬる。●死する。○狭衣「誠に物思にしにするものさば」

しほ 試補(名) 本官に任ずるまでの見習の役。○「司法官試補」

しほ 字母(名) 母音。

しほち 新發意(名) しんぼちに同じ。

しほり 絞(名) 絞り染の略。

しほりぞめ 絞染(名) 布絹のあちこちを絲にて括り其部分のみ残るやうにして染めたるもの。

しほる 絞(他動四段) 「一」締め付けて水氣を去る。「二」括り寄する。

しほん 四品(名) 親王位階の名。第四番に位するもの。

しほむ 萎。湖(自動四段) 花、葉などが衰へて生氣を失ふ。

しほう 四方(名) 東、西、南、北。

しばう 脂肪(名) 動物のあぶら。

しばう 死亡(名) 死ぬる事。△(動)―死亡す。

しほふり 實法(名) まじめ。(雅)

しほうばい 四方拜(名) 正月元旦の曉に天皇御親ら天地四方を拜して年災を拂ひ寶祚の隆盛を祈らせ給ふ御式。

しほうちく 四方竹(名) 竹の一種。莖の四角なるもの。

しほうごし 四方輿(名) 板輿を見よ。

しほさつ 西菩薩(名) 四體の菩薩。即ち勢至、觀世音、普賢、文殊。

しへ 藥(名) 「一」花の心。●すぬ。……雄藥、雌藥の二つあり。「二」藥の心。

しへつ 死別(名) 死に別れ。

しへん 詩篇(名) 「一」詩。「二」詩集。「三」特には舊約全書の中にある詩篇の稱へ。(基督教)

しど 緇徒(名) 僧の異名。

しど 使徒(名) 耶穌基督の高弟十二人を云ふ。

しど 小便。○榮花「御しどなどにぬれてもうれしげにぞ思されたる」

しどろ 亂れたる有様。●亂雜なる有様。(形)―しどろなる。(副)―しどろに。○千載「ふみしだき朝ゆく鹿や過ぎぬらんしどろに見ゆる野路の刈萱」

しごろもろくに

(副) しごろに同じ。○狭衣「我心しごろもろこになりけり袖より外に涙も

るまで」

しごろ

鴉(名) 鳥の名。目の周圍には白き輪あり翼には黒き斑紋ありて大きき雀ほどのもの。

しごら

(副) びっしり濡れたる有様。(又)―しごらに。

しごらめ

鴉目(名) 紐を通す穴に付くる輪形の金具。形鴉の目に似たり。

しごり

倭文(名) 上古織物の名。倭文に同じ。

しごね

禪。茵(名) 敷蒲團。座蒲團。古へ大學寮の四學科。即ち紀傳、明經、明法、算道。

しごう

兒童(名) 小供。童面(名) 童子の顔に

しごう

意童(名) 作れるもの(圖)

したうづ

鞆(名) 下沓の音便。○束帶禮服の時沓の下に履くもの。禮服の時は顯文紗、束帯の時は練貫にて作る。(圖)

じごく

侍讀(名) 主君の御前に出て、讀



しごやか

書を教授する役。又け其人。進退舉動の靜かに上品なる有様。(形)―しごやかなる。(副)―しごやかに。

しごけなし

(形)形状言ク活) しだらもない。じだらくな。(副)亂りがはし。

しごき

黍(名) 神前に供ふる餅の名。米の粉を煉りて作れるもの。

しごみ

蓆(名) 〔一〕寢殿造などの家にて棹子の外に立て。上に釣り上げ又は押し上げて日光雨雪などを覆ふやうに作れる戸。格子に似て細かく作れるもの。〔二〕蓆のある窓。

しごじや

(副) 露汗などに濡れたる有様。(又)―しごじや。

しごし

使徒書(名) 使徒が教會等に贈りし信仰の勧めの書簡。(基督教)

しち

質(名) 違約の時の償ひとして金錢借入の抵當に預け置く物品。又は之を預け置く事。

しち

四智(名) 一に大圓鏡智。鏡に諸の色像の移るが如く明かに語り得るを云ふ。二に平等性智。萬物すべて是非の相を立てず平等一理と觀じ悟るを云ふ。三に妙觀察智。無碍自在に

萬物を濟度利益するを云ふ。四に成所作智。其成すべき事を終に成就圓滿するを云ふ。

(佛教)

死地(名) 生きて還らるゝ見込なき場所。

七(數) ないつ。

榻(名) 牛車の牛をばづ

したる時其轆を載

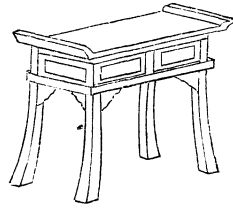
せ置く臺。(圖)

じつに同じ。

●本物。●實

物。△(形)―じち

の。(副)―じちに。(雅)



しちだ_下う

七堂(名) 寺に備はるべき七つの建物。即ち山門、佛殿、法堂、方丈、食堂、浴室、東司。

しちだ_下う

七道(名) 昔の我國政事地理の大區劃。すなはち東海、東山、山陰、山陽、南海、西海、北

陸。……今は北海道知はりて八道となれり。

しちだ_下う

七德(名) 雅樂の曲名。秦土破陣樂の一名。

しちだ_下う

七重寶樹(名) 佛の世界にある樹木の名。人界のものより七重倍も八重倍も高く聳えたりさての名。觀經に「一々樹の

しちで_下う

高き事八千由旬」さもあり。(佛教)
七條(名) 袈裟の一種。七布にて作れるもの。

(圖)

しちりん

(名) こんろに同じ。

じち_下

兒女(名) 女子供。侍女(名) 貴人の側に召使はるゝ女。

じち_下

輻重(名) 軍隊の荷物。支廳(名) 官廳の出張所。

しち_下う

使廳(名) 檢非違使の廳。紙帳(名) 紙にて作りたる蚊帳。

しち_下えう

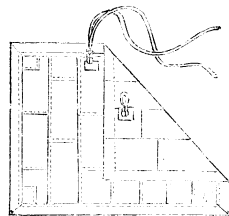
七曜(名) 〔一〕陰陽家にて祭る七つの星。即ち日、月、火、水、木、金、土。〔二〕一週七日間の稱へ。

じち_下う

次長(名) 官廳の次官。仕丁(名) 〔一〕主殿寮に屬して禁中の上下

じち_下う

洒掃等の事を掌る下男。白張に白張烏帽子を着る。〔二〕貴族の家、神社などにて同じやうに仕ふるものをも云ふ。



して^マうのわかれ

四鳥の別(句) 昔し支那の恒山に鳥

あり四子を生めりしが羽翼既に成りて四海に飛び分れんとするを親鳥の悲しみたりと云ふ故事。白氏文集にも四鳥分飛の句あり。

しちだいじ

七大寺(名) 大和の奈良にある七つの大なる寺。即ち東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、薬師寺、西大寺、法隆寺。

しちたらじ

七多羅樹(名) 七重の高さある貝多羅樹。……七重寶樹を参考せよ。(佛教)

しちなん

七難(名) 一に火難、二に水難、三に羅刹難、四に刀杖難、五に鬼難、六に枷鎖難、七に冤

贓難。(佛教)

しちらい

失禮(名) しつれい。(辨内侍日記)

しちのはしがき

榻の端書(名) 昔し深草の少将が小野小町に戀慕して百夜を期として通ひし時その敷を車の榻の端に書き付けて敷取にせしと云ふ故事。されど少将は遂に得達はずして九十九夜目に没せりと云ふ。(歌詞)

しちぐ

絲竹(名) いさだけ。管絃。音樂。

しちぐづ

七月(名) 年の第七番目の月。

しちち

質屋(名) 質物を取りて金貸す事を業とする

家。

しちち

七姿(名) 小兒生れて七日目の祝ひ。

しちぶつ

七佛(天) 釋迦以前に世に出でたる七體の佛。一に毗婆尸佛、二に尸棄佛、三に毗舍浮佛、四に拘留孫佛、五に俱那含牟尼佛、六に迦葉佛、七に釋迦牟尼佛。

しちふくじん

七福神(名) 人間に幸福を興ふるさいふ七體の神仙。即ち大黒、恵比壽、毘沙門、辨財天、福祿壽、壽老人、布袋和尚。

しちごん

七言(名) 漢詩の一體。七字にて一句を爲すもの。

しちごさん

七五三(名) 注連。◎藁の足を七本五本三本と配りて繩ふ故の名。

しちめんてちゅう

七面鳥(名) 鳥の名。形雞に似てよく面色を變ずるもの。尾を廣ぐる時は團扇なごのやうにて殊に美し。

しちしゃしゅう

七星(名) 七曜に同じ。

しちじゃしゅう

七情(名) すべての動物に通有せる七種の情。即ち喜、怒、哀、樂、愛、惡、欲。

しちしゃ

七社(名) 近江の日枝神社(山王)に祭りたる七つの社。又は其祭神。即ち大宮、二宮、聖眞

しちし。 子、八王子、客人、十禪師、三宮。
七衆(名) 一に比丘、二に比丘尼、三に沙彌、四に沙彌尼、五に式叉摩那、六に優婆塞、七に優婆夷。(佛教)

優婆夷。(佛教)

しちじしゅうふり 七十(數) 七つの十倍。●なくそら。

しちもつ 質物(名) 質とする物品。

しちせき 七夕(名) 七月七日の夜。●たなばた。

しり 尻(名) 「一」背の下部。●大便を分泌するところ。○「瓜の尻」

「二」すべて之に似たるところ。○「瓜の尻」
「金の尻」

しり 後(名) 「一」うしろ。●あき。「二」末。●終り。

「三」下襲の裾。●きよ。

しり 私利(名) 一箇人の利益。

しりろ 尻居(名) 尻を地に附けて倒るゝ事。

しりばな 尻端(名) 尻の先。(宇治)

しりぼね 尻骨(名) 尻の骨。●尾骶骨。

しりを 尻尾(名) 尻の尾。●しっぽ。

しりがい 鞞(名) しりがきの音便。◎馬

具の名。鞍の左右より尻まで懸くる緒。之に總を下げて飾とするもあり。(圖)



しりからげ (名) 着物の裾をかいて、尻まで表はす事。

しりがき 鞞(名) しりがいを見よ。

しりゑ 思慮(名) 思ひ慮る事。●考へ。△(動)―思慮す。

しりやりょう 死靈(名) 「一」死人の靈魂。「二」特に他人に崇をなす死人の靈魂。

しりやりょう 思量(名) 思ひはかる事。△(動)―思量す。

しりやくう 寺領(名) 寺の所有地。

しりやく 視力(界) 眼にて物を視る力。

しりよく 資力(名) 資産の力。

しりよく 死力(名) 死ぬる決心をなしたる方。

しりぞく 退(自動四段) 後へ寄る。●ひく。●のく。

しりぞく 退(他動下二段) 退かしむる。

しりつ 私立(名) 政府の補助を受けずして構成する事。

じりつ 自立(名) 他人の世話を受けずして成立つ事。

じりつ 獨立。△(動)―自立す。

しりうど 知人(名) 知りたる人。●知人。(雅)

しりうま 尻馬(名) 人の乗りたる馬のうしろに重なりて乗る事。

しりうま 後言(名) 其人の知らぬところにて云ふ評

しりうま

判。●陰口。

しりくべなほ (名) 尻くめ繩に同じ。

しりくめなほ (名) (一)他人の侵入を防ぐ區劃に引き張る繩。(二)注連繩。しめなほ

しりまひ 尻舞(名) 尻を振りて舞ふ一種の舞。○盛衰記「大場の尻舞いと珍らし」

しりむ 尻込(自動四段) 恐れて漸々に退く。●あま

しりへ 後方(名) うしろの方。

しりへで 後手(名) うしろへ廻したる手。

しりあふ 知合(他動四段) 双方相知る。

しりあし 後足(名) 四足獸のあこあし。

しりちち 酒壺子(名) 杯の壺。(和名抄)

しりちち 尻鞘(名) 太刀の鞘を被ふ毛皮の袋。(圖)

しりちち 後先(名) あこさき。

しりちち 自力(名) (一)己れ一人の方。(二)他方の反對にて佛の力を頼まぬ事。……他方を参考せよ。

しりきれ 尻切(名) しきれを見よ。

しりめ 後目(名) 横目さいふに同じ。見ぬ振をしなが



ら目玉のみにて盗み見る事。

じりじり (副) 座を摺りて漸々に進む有様。(又)じりくこと。

しりび 尻火(名) 火の燃えて行く反對の方に燃え移る火。

しりびど 知人(名) 知りたる人。●知人。ちじん

しりびく 後引(他動四段) 舟を山にて作り軸に綱を附け上に控へ居りて艦を下にし遂に引きおろすをいふ。○萬葉東歌「あしがりのあきかなの山に引く舟のしりびいしもよこはこがたに」

しりもち 尻餅(名) 後へ倒るゝ折に餅を搗く如く尻にて地を打つ事。

しめ 篠(名) 篠の古言。

しめ 死(自動ナ變) 命が絶ゆる。●死する。

しめに (副) しげく。○萬葉「心もしめに古へ思ほゆ」

しめのめ (枕) しのゝめの古言。

しめぐ 凌(他動四段) しのくの古言。

しめぶ 忍(他動四段) しのぶの古言。

しめびこと 誅(名) しのびこと古言。

しめびで 短手(名) しのびでの古言。

しる 汁(名) 「(一)動物草木其他物の間なきより流れ出づる水。(二)流動體の飲食物。●吸物。●味噌汁。(三)酒。

しる 知識(他動四段) 「(一)物事の理を悟る。(二)其物を見覚ゆる。(三)領する。

しる 箱(自動下二段) 馬鹿になる。

しる 導(名) 道の案内。

しる 汁粉(名) 小豆砂糖などを入れ甘くしたる汁に餅を入れたるもの。●せんざい。

しる 印。標。驗(名) 「(一)其物の證となるべきもの。●一目して其物を見知らるゝためのもの。(二)前兆。(三)功驗。●きいめ。●首級。してある。●いちじるし。

しる 著(形。形状言ク活) 知れ切て居る。●はつきりしてある。●いちじるし。

しる 標竿(名) 雪國にて雪の深淺を測りて道行く人に便せしむるために立つる竿。○夫木「初雪のしるしの竿は立てし、とそこも見えす越の白山」

しる 標杉(名) 古今集に「我庵は三輪の山もさ戀しくばさぶらひ來ませ杉立てる門」こあるより出でたる三輪の杉の故事。目印と

して尋れ行くべき杉の意。……轉じて他の處にても杉ある場所ならば和歌によむ事となれり。

しる 記。誌(他動四段) 書く。●記録する。

しる 兆(他動四段) 前兆を示す。○萬葉「新らしき年の始に鹽の年しるすまならし雪の降れるは」

しほ 汐。潮(名) 「(一)海の水。(二)月と太陽との引力によりて海水に生ずる動搖。

しほ 鹽(名) 「(一)海水より製して食物の味を付くるに用ふるもの。(二)食物に加へたる鹽の多少。●鹽加減。

しほ (名) 時節。●機會。○逢ふべきしほ「月のでしほ」稻の刈りしほ」

しほ 鹽漬(名) 鹽釜のある海邊。

しほ 鹹(形。形状言ク活) 鹽辛き味のする。鹹死(名) 草の名。しをんに同じ。(雅)

しほ (自動下二段) 汐氣に濕ひたる如くなる。●すに濡れになる。●びっしよりになる。(雅)

しほ 汐時(名) 汐の満干する時刻。

しほ 汐路(名) 「(一)汐の満干する路。(二)舟の通ふ

路。

しをり

枝折。乘(名) 「一」木の枝を折りて路の目印に

立て置く事。又は其物。「二」書物の読みま

しの所に挟み置くもの。「三」案内。●手引。

しをりばき

枝折萩(名) 足利時代謡物の名。

しをりど

枝折戸(名) 木の枝など折り掛けて作りたる

風流の戸。

しをる

萎(自動下二段) 「一」しなびる。●凋む。「二」よ

わる。●氣力が無くなる。●くじかりこな

る。

しをる

(他動四段) 「一」萎るゝやうにする。●たわま

す。○風雅「岡の邊や靡かぬ松は聲をなし

て下草しをる山おろしの風」「二」責むる。●

呵る。○伊勢「此女のいさこの御息所をん

なをまがでさせて殿の倉にこめてしをり給

うければ倉にこもりて泣く」「三」泣く。「四」

道しるる。●案内する。

鹽海(名) しほうみに同じ。(山家集)

鹽貝(名) 鹽漬にしたる貝の内。

沙間(名) 沙の干たる間。(催馬樂)

沙涸(名) 沙干。(萬葉)

しほがわた

しほがひ

しほがひ

しほがひ

しほがひ

しほがひ

しほがひ

しほがひ

しほがひ

しほがからし

鹽辛(形。形状言ク活) 鹽の味のよくき

たる有様。

しほがま

鹽竈(名) 「一」鹽を製する爲めに海水を煮る

釜又は其釜を置くところ。「二」古代等の名。

しほがせ

沙風(名) 沙の上を吹く風。

しほがたぢ

鹽斷(名) 神佛に祈念する時鹽氣の入りたる

食物を斷つ事。

しほがたる

沙垂(自動下二段) 「一」衣などより沙の滴の

垂る。●沙風に衣を濡らす。○干載「沙た

る。伊勢の海士や我ならんさらば見るめ

を刈るよしもがな」「二」沙を波む。○拾遺

「仁和の御屏風に海士の沙たる。處に鶴な

く」「三」愁傷する。●悲しみ泣く。●泣く。○

源氏「いさあはれにてうちしほたれさせ給

はれ」

しほがたれごも

沙垂衣(名) 沙にのれたる海士の衣。

(新後撰)

しほがなわ

沙沫(名) 沙の沫。

しほがなれごも

沙馴衣(名) 沙になれたる海士の衣。

しほがらし

(形。形状言シク活) 殊勝に愛すべき處のあ

る。●かはゆらしい。●ふびんな。

しをん

紫苑(名) 草の名。花も葉も嫁菜に似て遙に大
きく秋の頃咲くもの。

しおん

四恩(名) 天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生
の恩。(佛教)

しおん

師恩(名) 師の恩。

しわう

雌黄(名) 「一」繪具の名。礦物にて黄色を彩る
に用ふるもの。「二」詩文の加筆。◎朱の如
くに雌黄を用ふる故の名。

しほ、うみ

鹽海(名) 水海に對して海を云ふ。

しほのさどみ

汐の止(名) 汐の満ちばてたる時。●汐
のたへ。(雅)

しほぐもり

沙曇(名) 沙氣のため海上の曇りて見ゆる
事。

しほや

鹽屋(名) 鹽焼く小屋。

しほぢま

鹽焼(名) 「一」食鹽を焼きて製する事。又は
其製造人。「二」魚肉に鹽を付けて焼く事。
又は其肉。

しほぢまごも

鹽焼衣(名) 鹽を焼く海士の着る衣。

しほま

沙間(名) 沙の干たる間。(亦染衛門集)

しほけ

沙氣(名) 海より立つ水蒸氣。

しほけ

鹽氣(名) 食物に含みたる鹽の味。

しほけむり

鹽煙(名) 鹽焼く煙。

しほふろ

沙風呂(名) 沙水を沸かしたる風呂。

しほぶね

沙舟、鹽舟(名) 「一」沙先を漕ぐ舟。「二」汐時
を待ち居る舟。「三」沙を汲み入るゝ舟。「四」
食鹽を積みたる舟。

しほごも

沙衣(名) 沙に濡れたる衣。◎海士の着る
衣。

しほこしのひ

沙越櫃(名) 海水を汲み越すための櫃。
◎散木「煤たれるまやのあれより降る雪や
見し沙越の櫃にも降らん」

しほで

四方向(名) 馬具の名。馬の蹄泥
をつくるため鞍の四方へ出た
したる輪(圖)

しほあひ

沙合(名) 多くの沙の集まりて
出合ふところ。

しほあみ

沙浴(名) 海水浴。

しほあし

沙蘆(名) 潮の差し引きする所に生えたる
蘆。

しほさる

(名) 沙の差す時に浪の荒く騒ぐ事。又は其
時刻。(魚養)

しほさかな

鹽魚(名) 鹽漬の魚。



しほがさき 沙先(名) 鹽の差し來る處。

しほがき 沙木(名) 鹽焼く薪料の木。

しほがゆ 沙湯。鹽湯(名) 〔一〕沙風呂。〔二〕湯に食鹽を入れたるもの。

しほがゆあみ 沙湯浴(名) 鹽湯をあびる事。

しほがみつ 沙水。鹽水(名) 〔一〕海水。〔二〕鹽分を含みたる水。

しほがみつに 潮満瓊(名) しほみつたまに同じ。

しほがみつたま 潮満珠(名) 潮を自在に満ちさする功力のある珠。神代の昔し産火火出見尊の海神の宮より得給ひしさいふもの。(記)

しほがじり 鹽尻(名) 〔一〕海水を汲み掛けて鹽を焼くため濱邊の砂を盛りて小山の如くに作れるもの。〔二〕神に供ふるため土器に盛り上げたる鹽。

しほをしな (副) 羨れたる有様。(又)しなくさ。

しほをしむ 鹽染(自動四段) 〔一〕沙が衣などにしみこむ。〔二〕世間馴る。●苦勞する。(雅)

しほがひ 沙干(名) 沙の引き去る事。●沙の引き去りたる時。

しほがひるに 潮干瓊(名) しほひるたまに同じ。

しほがひるたま 潮干珠(名) 沙を自在に干さする功力のある珠。神代の昔し海神の宮より彦火々出見尊の得給ひしさいふもの。(記)

しほがひがり 潮干狩(名) 潮干潟に出で、魚貝など取り遊ぶ事。

しほがひがた 沙干潟(名) 海の沙干になりたる處。

しほがひき 鹽引(名) 鹽漬にする事。又はその魚。

しほがせ 沙瀬(名) 沙の流れ道。●潮流。

しほがせ 敷(名) 物のたるみて高く低く生じたる筋。

しわがむ 皺(自動四段) 皺になる。●皺が出来る。

しわがむ 皺(名) 吝嗇なる人。

しわがむ (自動四段) 皺の出来る。

しわがむ 爲佗(他動下二段) わぶに同じ。(雅)

しほがふるびさ 爲佗(名) 古來諸説ありて一定せず。〔其一〕柴炭人の意にて柴を刈り木の葉など掻き集むる賤の男。〔其二〕皺古人の意にて皺の寄りたる老人。〔其三〕爲佗ふる人の意にてわびしき生活をする貧民。〔其四〕咳きをする老人の意。○源氏「何さも聞き分くまじきこのもかものしほふるびさるもすいらはしくて濱風を引きありく」

しばぶかニフソ

咳(自動四段) しばぶきをする。(萬葉)

しばぶく

咳(自動四段) 咳の出づる。●咳をせく。

しばぶき

咳(名) 咳く事。●せき。

しばぶきやみ

咳病(名) 咳の出づる病。

しばざ

任業(名) 爲す業。●行ひ。

しばし

(形)形状言ク活) 音箇なる。●やぶさかなる。●けちな。

しばす

師走。極月(名) 十二月の異名。

しばすまぶり

四極山振(名) 上古雅樂寮の歌曲の名。

しか

鹿(名) 獸の名。形は馬に似て小さく全身茶色にして白き斑紋あり。牡は頭に枝ある角を有す。秋の頃鳴く聲のあはれなるを以て妻呼ぶ鹿など、稱へられしばく歌人の材料に入る。

しか

然(副) 左様。●其通り。●前の如く。

しか

(助動) 過去のきの變化。○「きのふこそ早苗まりし」人を訪ひし「ご有らぬ程なりき」

しが

(代) 其。○萬葉秋の花しか色々に見し給ひ

しか

絲鞋(名) 絲にて作りたる鞋。古へ雅樂の舞人

しか

なご着せしもの。(圖)

しかい

四海(名) 「一」四方の海。「二」四方の外國。「三」滿天下。

しかい

市街(名) 市町。

しかい

死骸(名) 死人の身體。●しかばね。

しわふ

しかい

四海波(名) 謠曲中の名稱。「四海波靜にて。國も治まる時つ風枝を鳴らさぬ御代なれや。あひに相生の。松こそ目出度かりけれ。げにや仰きても。事もおろかや。ける世に。住める民さて豊なる。君のめぐみぞ有りがたき」さいふ文句。徳川時代の幕府の謠初に觀世太夫先づ之を獨吟し民間にて婚姻の席上必ず之を謠ふさいふ由緒あるもの。

しかい

似我蜂(名) 蜂の一種。障子の紙などに推く丸き土の糞を作るもの。穴あけて中に住む。

しかい

屍(名) 死骸。

しかい

新河浦(名) 雅樂の曲名。

しかい

(副) たしかに。●きつこ。

しかい

叱。呵(名) 徳川時代判罰の名。唯言語にて呵るに止るもの。●讞責。

しかい

新河浦(名) 雅樂の曲名。

しかい

(副) たしかに。●きつこ。

しかい

叱。呵(名) 徳川時代判罰の名。唯言語にて呵るに止るもの。●讞責。

しかい

新河浦(名) 雅樂の曲名。

しかい

(副) たしかに。●きつこ。

しかい

叱。呵(名) 徳川時代判罰の名。唯言語にて呵るに止るもの。●讞責。

しかい

新河浦(名) 雅樂の曲名。

しかい

(副) たしかに。●きつこ。

しかい

叱。呵(名) 徳川時代判罰の名。唯言語にて呵るに止るもの。●讞責。

しかい

新河浦(名) 雅樂の曲名。

しかい

(副) たしかに。●きつこ。

しかい

叱。呵(名) 徳川時代判罰の名。唯言語にて呵るに止るもの。●讞責。



しかり 然(自動7變) 左様である。●其通りである。●適當である。●尤である。

しかる 叱。呵(他動四段) 言語にて罪を責むる。

しかるに 然(副) 左様であるのに。●そこそこ。

しかた 仕方(名) 手段。●方法。

しかれば 然(副) 「一」されば。●だから。●それ故に。●「二」書簡文にては意味なしに文章を起す詞に用ふ。○「前略然者兼而御約束の一條」

しかれども 然(副) けれども。●ではあるが。●まはす。●いふ。

しかな (助動) 願の詞。●たいものである。○「秋ならで妻呼ぶ鹿を聞きしかな折から聲の身にはしむむさ」

しからは 然(副) そうあらば。●さらば。

しからむ 櫛(他動四段) しからみを作る。●水を堰きこむ。

しからまが 信樂笠(名) 笠の一種。近江の國信樂名産。

しからまぎ 信樂燒(名) 陶器の一種。近江の國信樂にて製したるもの。

しがらみ 櫛(名) 水を堰き留むるもの、總名。普通は

しかむ 葦(自動四段) 眉の間に皺を寄せせる。●まじわを寄せせる。

しかも 響(聲(他動下二段) 響む顔付をする。●苦い顔をす。

じかん 時間(名) 時の間。●時の長さ。●時。

しがぶ 鹿(他動四段) 草を刈りて結び集むる。○夫木「しがぶくなりも行くかなきさす鳴く片野のみの、萩の燒原」

しかのその 鹿苑(名) 鹿苑の譯語。○鹿野苑の略にて釋迦の説法せし天竺の地名。○千載「鹿の園鶯の峰の深き御法をささるにしもあらず」

しかのこみく 然の如く(副) 左様に。●その通りに。●又「しかのここくに」

しかのみならず 加之(副) そればかりでなく。●尙其上に。●加ふるに。

しかく 四角(名) 角の四つあるもの、形。●方形。●四邊形。

しかく 四覺(名) 一に本覺。二に相似覺。三に隨分覺。四に究竟覺。(佛教)

しかく 若(副) しかの如く。●そのやうに。●左様に。

しかく 仕掛(他動下二段) 「一」爲して其物を注ぎ掛くる。 「二」着手する。

しがく 史學(名) 歴史を研究する學問。

しがく 試樂(名) 練習に行ふ舞樂。古は節會、神事、行幸等おもだちたる舞樂の行はるゝ時前以て天皇の御前などにて先づ試み演奏したるもの。

じがく 耳學(名) 聞きたるのみの學問。●きゝがく。 四角張(自動四段) 嚴格に構ふる。

しかくはる しがくつかう 私學校(名) 私立の學校。

しかけ 仕掛(名) 「一」爲しかりたる事。●着手中の事。 「二」からくり。

しかぶえ 鹿笛(名) 獵師が鹿の鳴聲を眞似て吹く笛。 鹿を呼び近づくるためのもの。

しがき 鹿垣(名) 鹿を射る時、獵人の立つ處を木の枝などにて見えぬやうに圍ひたるもの。

しかみ 嘯見(名) 能面の名。鬼神などに用ふるもの。(圖)

しがみつく (自動四段) 兩腕にて握みかゝる。

しかし (副) 併しながら。●但し。



ししかし 然然(副) 然り。●左様々々。

しかじか 云云(副) 言語を略して云ふ時に用ふる詞。 ●うんうん。●落窪「しかくなんのたまひて」(又)「しかく」。(形)「しかく」の。

しかしながら (副) それはそうながら。●然りさはいへども。●但し。

しかして (副) 左様にして。●そうして。●かくて。

しかも (副) さも。●それも。

しかしがに (副) さすがに同じ。さはいへども。○萬葉「三島野に霞たなびくしかすがにきのふもけふも雪は降りつゝ」

しよ 書(名) 「一」文字を書く事。「二」書きたる文字。「三」書物。●本。「四」手紙。●書簡。「五」支那經書の名。書經の略。

しよ 署(名) 役所の名。司よりも小さきもの。

しよ 暑(名) 「一」夏の日のあつさ。「二」夏の土用。

じよ 自餘(名) 此外。●其他。

しよ 序。叙(名) 「一」序文。「二」次第。●順序。「三」序破急を見よ。 仕業。●所業。

しよゐ 初位(名) そゐを見よ。

じよゐ 叙位(名) 「一」位に叙せらるゝ事。「二」古へ正月五日若くは六日に行はれたる百官の叙位式。

しよゐん 書院(名) 武家風の建築にて表立ちたる座敷。

しよらう 初老(名) 四十歳の齡。

しよらう 所勞(名) 病氣。

しよばん 諸般(名) 種々の事。●すべての事。

じよはき 序破急(名) 雅樂上の詞。その位の辭なるを序といひ中なるを破といひ早きを急といふ。一曲さしても或は序に屬し或は破に屬し或は急に屬する曲あり。一曲中に初は序に起り中頃は破にて末は急に終る等の事あり。

しよにち 初日(名) 最初の日。

じよにん 叙任(名) 位に叙し官に任ずる事。

しよはう 處方(名) 醫術上の詞。病氣を治する方法。●藥の調合。

しよはふり 書法(名) 筆法。

じよぼく 如木(名) 白張を着て公卿の供をする下男。◎白張のこはばりて木の知き故の名。

しよばしよば (副) 雨の少しつゝ降る有様。(又)しよばしよば。

しよごう 初冬(名) 冬の初め。陰曆の十月。

しよたろう 書道(名) 文字を書く術。

じよごうし 助動詞(名) 語學上の詞。詞の後に置きて其意味を助くる詞。

しよごく 書牘(名) 手紙。

しよごく 所得(名) 得る所の利益。

しよち 所知(名) 所領に同じ。(發心集)

しよち 處置(名) 取計らひ。●處分。△(動)―處置す。

しよち 所持(名) 身に持ちて居る事。△(動)―所持す。

しよちよ 處女(名) 未婚の少女。●をさめ。

しよちゆう 暑中(名) 夏の土用の間。

しよちゆう 書中(名) 「一」書籍の文中。「二」手紙の文中。

しよちゆう 所領(名) 「一」土地を領する事。「二」領分の土地。

しよりのれりゆう 諸陵寮(名) 官廳の名。治部省に屬して總べて御陵の事を掌るゝところ。官吏は頭、助、允屬あり。

しよりん 書林(名) 本屋。

じよじき 助力(名) 人の力を助くる事。△(動)―助力す。

しるゐ

書類(名) 諸種の書付。

しわう

諸王(名) 皇子皇孫にして親王を爲らず又姓を賜はりて臣下とも爲らざるもの。

しよか

初夏(名) 夏の初め。陰曆の四月。

しよか

書家(名) 文字を上手に書く人。

しよかん

書簡。書翰(名) 手紙。

しよかんひら

暑寒平(名) 織物の名。袴にして夏冬共に用ひらるゝもの。

しよがく

初學(名) 學問の初歩。●うひまなび。

しよよう

所用(名) (一)用ふる事。(二)用事。

しよたい

所帯(名) 家計。

しよたいふ

諸大夫(名) 五位の人の異名。

しよたな

書棚(名) 書籍を載するための棚。

じよたん

助炭(名) 火鉢の火を風に散らさぬため被ひ置くもの。

しよれい

諸禮(名) 諸種の禮儀作法。

しよぞん

書損(名) 書きそこなひ。

しよぞん

所存(名) 考へ。●意見。

しよざう

所藏(名) 所有。●所持。△(動)―所藏す。

しよぞく

所屬(名) (一)附屬して居るまゝ。 (二)附屬物。

しよねん

初念(名) 最初に思ひ込みたる心。

しよなぬか

初七日(名) 死後七日目の日。および其日の佛事。

しよう

使用(名) 用に立つる事。●使ふ事。△(動)―使用する。

しよう

稱(名) となへ。●名。

しよう

證。証(名) 證據。●しるし。●あひし。

しよ

升(名) 櫛目の名。十合。すなはち一斗の十分の一。

しよシヨウ

生(名) いのち。●生命。

しよシヨウ

笙(名) 雅樂の樂器。十七本の竹管を集めて

しよシヨウ

胴に丸く立て廻したる笛。

しよシヨウ

吹く時は管の中に舌ありて閉閉し音を出だす。

しよシヨウ

●笙の笛。(圖)

しよシヨウ

症(名) 病氣の性質。



しやんしゅう

莊(名) 中古以後皇族貴族等私有地の稱へ。地方にありて一箇村もしくは數箇村をなしたるもの。

しやしゅう

將(名) 一軍隊の長官。

しやしゅう

省(名) 中央政府の上に立ち分擔して政務を執る官廳の名。「一」大寶令以來の官制にて八省に分る。申務、式部、民部、治部、兵部、刑部、大藏、宮内、卿之に長たり。「二」明治廿九年の官制にては十一省に分る。宮内、内務、外務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、遞信、拓殖務。大臣之に長たり。……維新一時置かれて廢され若しくは合はせられたるは工部、教部の二省。

しやしゅう

商(名) 「一」あきなひ。「二」商人

しやしゅう

章(名) 文章中の小切。篇よりは短く句よりは長きもの。

しやしゅう

賞(名) 「一」賞譽。「二」褒美。

しやしゅう

聲(名) 音樂の節。

しやしゅう

正(名) 位階の順序を示す詞。從の上に立つもの。○「正一位」「正八位」

じやしゅう

正(名) 位階の詞を示す詞。「しやう」に同じ。

しえほう

枝葉(名) 「一」枝と葉と。「二」枝葉の如き末々のもの。

せしゅう

兄鸞(名) 鸞の雄鳥。(和名抄)

せしゅう

少輔(名) 古へ省の次官にして大輔の次に位せしもの。少輔の輔の字は讀まざるが如く唯シヨウのみ發音す。

せしゅう

抄、鈔(名) 「一」書物の拔書。「二」書物の註釋。

せしゅう

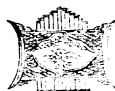
簫(名) 支那古代の樂器。多くの竹管を編み列れて作りたる管。(圖)

せしゅう

妾(名) めかけ。てかけ。

じょう

(名) 古代の官名。其役所の目附役。……役所によりて文字を異にする事左の如し。



じょう

祐……………神祇官。司。罌。

じょう

丞……………省。

じょう

允……………察。

じょう

尉……………檢非違使。左右衛門。左右

じょう

兵衛。

じょう

椽……………地方官。

じょう

此外普通にはシヨウと讀まされども其官に當たるものは左の如し。

じょう

椽……………地方官。

じょう

此外普通にはシヨウと讀まされども其官に當たるものは左の如し。

辨。……太政官。

進。……職。

忠。……臺。

判官。……使。

軍監。……鎮守府。

監。……太宰府。

將監。……近衛府。

じょう 尉(名) 「一」能面の名。老翁の顔

を寫せるもの。(圖)(二)老翁。



じやう 城(名) しろ。

じちよう 滋養(名) 飲食物にて身體の養ひ分を得る事。

又は其物。

じやん 狀(名) 「一」狀態。●景況。「二」手紙。

じやん 情(名) 「一」事に觸れて感じ動く心。憂、樂、

悲、歡の類。「二」同情。●なきげ。●親切。

じやん 上(代) 天皇を申す詞。

じやん 稱唯(名) 古へ勅語などに對して御請を申す時

一同に「な、しと稱ふる事。△(動)稱唯す。

じやん 淨衣(名) じやうえに同じ。

じやん 上意(名) 主君の命令。

じやん 攘夷(名) 夷狄を討ち攘ふ事。

じやん 讓位(名) 天皇の御位を譲り給ふ事。

じやん 松露(名) 菌の一種。夏の初の頃松の根に生ず

る丸き形のもの。食用となる。

せん 樵路(名) 樵夫の通ふ出路。

せん 上臈(名) 「一」女官二位三位典侍の

稱。「二」轉じては一般の貴女。

じやう 乘馬(名) 「一」馬に乗る事。「二」其人の乗用の

馬。

じやう 勝殿(名) 勝負に同じ。

じやん 賞杯(名) 賞譽のために與ふる杯。

じやん 賞牌(名) 賞譽のために與ふる證標。多

くは金屬製にして彫刻などしたるもの。

じやん 商賈(名) 「一」賣り買ひ。●あきなひ。

「二」職業。●營業。

じやん 淨玻璃鏡(名) 關覽大王の廳に

据ゑ置きて死人が生前に行ひたる善惡を明

に映し顯はす鏡。(佛敎)

じやん 賞罰(名) 賞する事と罰する事と。

じやん 蒸發(名) 液體が氣體に變する事。△(動)一

蒸發す。

じょうはつき 蒸發氣(名) 蒸發したる氣體。
 しやしゅうばん 相伴(名) 酒食の席にて正客の附屬となる事。●陪食。

じやしゅうばん 城番(名) 城の番人。
 じやしゅうばんこ 狀箱(名) 手紙を入れて往復する箱。

せしゅうに 小兒(名) 子供。●幼兒。

せしゅうに 少貳(名) 太宰府の次官にて大貳の次に位するもの。

しやしゅうにち 正日(名) 今日。

じやしゅうにち 上日(名) 當番にて禁中に出勤する日。

しゅうにん 證人(名) 證據に立つ人。●證據人。

しやしゅうにん 商人(名) 賣買を業とする人。●あきんど。

しやしゅうにん 上人(名) 高僧の尊稱。

せしゅうにく 小兒科(名) 醫術の科。小兒病の治療を専門とするもの。

しゅうにせき 鐘乳石(名) 鐘乳石の名。山中の岩窟などに乳の如く氷柱の如く垂れたる石。

しやしゅうほん 正本(名) 原本。●臺帳。●元帳。

じやしゅうほん 上品(名) 九品淨土の上等の階級。(佛教)

しやしゅうはふし 商法(名) 〔一〕商賣の方法。●商賣。

せしゅうばう 消防(名) 〔二〕商賣に關する法律。

せしゅうばう 燒亡(名) 火事を防ぎ消す事。

せしゅうばう 燒亡(名) 燒け亡ぶる事。△(動)―燒亡す。

せしゅうばう 消防夫(名) 消防をする人夫。●火消し。

じやしゅうぼく 上木(名) 版木に彫刻する事。△(動)―上木す。

しゅうへい 昇平(名) 太平。

しやしゅうへい 昌平(名) 太平。

せしゅうへい 哨兵(名) 陣營にて見張の番兵。

せしゅうへいせん 哨兵線(名) 哨兵を置きて守らしむる區域。

せしゅうべん 小便(名) ①はり。●小水。●小用。

せしゅうべん 少辨(名) 辨を見よ。

せしゅうべん 兄(名) 兄人の音頭。◎あに。

じやしゅうど 淨土(名) 極樂の一名。(佛教)

しゅうど 衝突(名) 双方より突き當る事。△(動)―衝突す。

しやしゅうど 正統(名) 正しき血統。

しやしゅうたう

正當(名) 正しく理に適ふ事。●適當

じやしゅうとう

なる事。△(形)―正當なる。(副)―正當に。常燈(名) 毎夜點する燈火。……佛前、往來などに。

じやしゅうとう

上等(名) 高き等級。●高等。△(形)―上等の。

じやしゅうたう

成道(名) 佛道の修行を成就する事。尉と姥(句) 「一」老人夫婦。「二」特には諺

じょうごうば

曲高砂に見へたる相生の松の精。すなはち住吉の松の神體(老翁)と高砂の松の神體(老嫗)と

しやうごう

所得(名) しよごくに同じ。△(動)―しよごとくす。○宇治「此布一むら取らせれば男思はずなるしよごとくしたりと思ひて」

せしゅうどく

消毒(名) 薬品を注ぎて傳染病毒を消す事。△(動)―消毒す。

じやうしんしやう

浄土眞宗(名) 眞宗に同じ。浄土宗(名) 佛教の一派。僧源空の創めたるもの。

しやうち

勝地(名) 名勝の地。

しやうち

承知(名) 「一」物事を聞き知る事。「二」人の依

しやしゅうちやう

頼を受け入るゝ事。△(動)―承知す。正丁(名) 中古の制。男子二十一歳

せしゅうちやう

より六十歳まで租、調庸の三税を納むべき義務のある人民の稱。輕事は兵役に服すべきもの。小腸(名) 腸の上の部分。其長と二丈

せしゅうちやう

餘ありて末の太き部分を大腸といふ。消長(名) 勢の盛なると衰ふるを。

じょうちやう

冗長(名) 益無くして長き事。……文章、演説など。△(形)―冗長なる。笙笛琴箏(名) 笙と横笛と

しやうちやくきんく

琴と箏と。○諺曲常に笙歌の花降りて。しやうちやくきんく夕日の雲に聞こえ來」

しやしゅうちやく

正直(名) 心に偽の無き事。△(形)―正直なる。(副)―正直に。

せしゅうちやく

燒酎(名) 酒の一種。最も氣の強きもの。●火酒。常住(名) 永久何時も變化せず有る

じやしゅうちやく

事。(佛敎)

しやうり

勝利(名) 勝ちて利を得る事。

せしゅうりよ 焦慮(名) 心を焦がして憂ふる事。

しやしゅうりやう 精霊(名) 〔一〕死人の靈。〔二〕特に盆に祭らるる精霊。○「精霊祭」「精霊棚」

しやしゅうりやうごぼ 精霊蜻蛉(名) 蜻蛉の一種。色赤くして盆の頃多く飛び居るもの。

しやしゅうりやうたな 精霊棚(名) 精霊祭をする爲めに設けたる棚。

しやしゅうりやうまじり 精霊祭(名) 精霊會。

しやしゅうりやうな 精霊會(名) 盆の靈祭の傳事。

しやしゅうりく 上陸(名) 船より陸に上がる事。△(動) —上陸す。

しやしゅうりく 上略(名) 初めの文句を省きて書き出す時に用ふる詞。●前略。

しよしゅうりゆう 蒸溜(名) 湯氣を冷やして再び水とし蓄ふる事。△(動) —蒸溜す。

しよしゅうりゆう 上流(名) 〔一〕河の水。〔二〕社會の

しよしゅうりゆう 生類(名) いきもの。●動物。

しよしゅうりゆう 淨瑠璃(名) 〔一〕清淨なる瑠璃を以て裝飾せる佛の國。〔二〕織田豊臣の頃小野道

が作りたる淨瑠璃の物語を扇拍子にて諺

ひたる一種の曲。後には三味線に合せて語るやうに爲れり。〔三〕すべて三味線に合せて語る對話入の歌曲。〔四〕特に竹本

義太夫の創めたる義太夫夫婦。照應(名) 文章の字句など前後互に相應する事。△(動) —照應す。

せしゅうりやう 照應樂(名) 雅樂の曲名。

せしゅうりやう 承和樂(名) 雅樂の曲名。仁明天皇の承和年間に成りたるもの。

しやしゅうりやう 商家(名) 商ひをする家。

しやしゅうりやう 唱歌(名) 〔一〕音樂に合せて語ふ歌の文句。又は之を諺ふ事。○「琴の唱歌」「梅の春の唱歌」〔二〕現今はおもに學校にて歌ふものを云ふ。

しやしゅうりやう 上下(名) 上と下と。

せしゅうりやう 樵歌(名) 樵夫の歌ふ諺。

しやしゅうりやう 生薑(名) 草の名。葉は薄荷に似て狭く根は香氣高くして味辛く食用となるもの。

しやしゅうりやう 唱歌(名) 〔一〕しやうかに同じ。〔二〕音樂の諺を歌ふ事。おもに雅樂、能樂にいふ。○

「越天樂の唱歌」「序の舞の唱歌」……△(動)

—唱歌す。

ジャシヨウカ

城下(名) 城のある町。

セシヨウカイ

紹介(名) 中間に立ちて二人の取持をする事。●引合せ。△(動)―紹介す。

ジャシヨウガイ

●境界。生涯(名) 「一」生きて居る間。「二」生活。

ジャシヨウガイ

●境界。生害(名) 自殺。△(動)―生害す。

ジャシヨウカイ

上界(名) 天上の世界。

セシヨウカチ

消渴(名) 病の名。小便の通じなく類に渴を覺ゆるもの。●かちのやまひ。

ジャシヨウカン

傷寒(名) 病の名。熱の爲めに精神の知覺を失ひて死に至るもの。

セシヨウカン

小寒(名) 氣節の名。二十四氣の一つ。

ジャシヨウカン

上瀚(名) 上旬。

ジャシヨウカク

正覺(名) 眞正の悟りを得る事。●成佛する事。

セシヨウガク

小學(名) 「一」小兒の學問。「二」小學校。

ジャシヨウガク

常類(名) 常に定まりたる類。

ジャシヨウガク

獎學院(名) 中古の私學校の名。在原行平の創設せしもの。

ジャシヨウガク

正覺坊(名) 海に住む大龜。最も

多量の酒を飲むものと云ふ。

セシヨウガク

小學校(名) 小兒の滿六歳より八年間教育を受くる學校。

シヨウヨ

稱譽(名) ほめたゝふる事。●稱美。●賞讃。△(動)―稱譽す。

ジヨウヨ

乘輿(名) 天皇乘御の輿。

シヨウヤウ

稱揚(名) 稱美。△(動)―稱揚す。

セシヨウヤウ

小用(名) 小便。

セシヨウエウ

逍遙(名) 「一」あちこちぶら／＼と歩く事。●散步。「二」船にてぶら／＼と乗り歩く事。●舟遊。……△(動)―逍遙す。

セシヨウヤウ

昭陽舍(名) 禁中六舎の一つ。●梨壺。

ジャシヨウヤク

情慾(名) 「一」情と慾と。「二」特に色欲。

ジャシヨウタイ

正體(名) 「一」幻影にあらざる其物の本體。「二」正氣。

ジャシヨウダイ

請待(名) 馳走などする爲め客を案内する事。△(動)―請待す。

セシヨウダイ

招待(名) 客を招きてもてなす事。△(動)―招待す。

ジャシヨウタイ

状態(名) 有様。●模樣。●景況。

ジャシヨウうたい

上代(名) 大昔の世。

ジャシヨウうたいりり

上代流(名) 書風の一派。貫之道風などの如き古代のもの。

シャシヨウうたつ

上達(名) 上手になる事。●熟達。●進歩。△(動)―上達す。

ジャシヨウうたん

上段(名) 「一」上の階段。「二」座敷に一段高く作りたる床。貴人の座とするもの。

ジ。シヨウうたん

常談(名) 「一」通常の談話。「二」滑稽話。●ふざけ話。●戯言。(俗)

しやうたく

承諾(名) 承知しうけがふ事。△(動)―承諾す。

シャシヨウうれい

獎勵(名) すゝめはげます事。△(動)―獎勵す。

ジャシヨウうれい

常例(名) 習慣上の規則。●しきたり。

しっシヨウうれいごく

傷冷毒(名) 病の名。儂麻質の類。

シャシヨウうれん

青蓮(名) 青色の蓮華。……藏王権現などの眼の形容に用ふ。「青蓮のまなじり」は青蓮の花びらを横に置きたるが如き形を云ふ。(佛教)

シャシヨウうざう

將曹(名) 近衛府のさくわん。

せシ「うざう

少壯(名) 若盛りの時。又は其人。

セシヨウざう

肖像(名) 似顔に作りたる像。●像。

ジャシヨウそう

上奏(名) 天皇に申上ぐる事。△(動)―上奏す。

センシヨウそく

消息(名) 「一」おさづね。●文通。●音信。「二」手紙の文。「三」特に雅文體の消息文。

シャシヨウぞく

装束(名) さうぞくを見よ。

シャシヨウぞく

裝束能(名) 裝束を着けて演ずる能樂。

セシヨウそこ

消息(名) せうそくに同じ。(雅)

センシヨウそがる

(自動下二段) 様子を開きたく思ふ。●文をやりたく思ふ。○源氏「聞きついで田舎人ごも心がけせうそがるいと多かり」

セシヨウづ

小豆(名) あづき。

シャシヨウづか

(名) 三途川の轉。此川には老婆ありて死人の衣を奪ふといふところ。

シャシヨウつぎ

祥月(名) 人の忌辰に當る月。又は其日。

しっシヨウうね

性根(名) 精神。●根性。

セシ「うねつ

焦熱(名) 地獄の一つ。火に焼かれて眼、耳、鼻、口、毛孔などより猛焰を流出するの苦を受くる世界。(佛教)

シヤシヨウ うれん

生年(名) 生きて居たる間の年齢。●没

セシヨウ うれん

少年(名) 年若。又は年若の人。十四五前後。

シヤシヨウ うれんぶつ

常念佛(名) 絶えず念佛する事。

セシヨウ うれん

少納言(名) 太政官の次官にて中納言の次に位するもの。●すなわちのまうすつかさ。

シヤシヨウ うれい

將來(名) 將に來らんとする月日。●未來。●後日。

シヤシヨウ うれん

上覽(名) じやうらんと同じ。

セシヨウ うれん

照覽(名) 神佛の目にて見る事。△(動)―照覽す。

シヤシヨウ うれん

上覽(名) 「一」天皇の御覽になる事。「二」轉じては將軍などにも云ふ。

シヤシヨウ うれんろう

翔鸞樓(名) 禁中の高樓の名。古へ歴天門の西にありしもの。

シヤシヨウ うれん

上落(名) じやうらくと同じ。

シヤシヨウ うれん

上落(名) 京都に上る事。△(動)―上落す。

シヤシヨウ うれん

樟腦(名) 楠の木より製したる薬品。

シヤシヨウ うれんぶつ

句が極めてよきを以て衣類書籍の虫防ぎなどに用ひらるゝもの。

シヤシヨウ うれん

笙笛(名) 笙に同じ。

シヤシヨウ うれん

箏琴(名) さうのこに同じ。

シヤシヨウ うれん

章句(名) 文章の句切り。

シヤシヨウ うれん

上求菩提(句) 上にしては菩提の道を求むるの意。(佛教)

シヤシヨウ うれん

消化(名) 食物の胃に入りてこなるゝ事。

シヤシヨウ うれん

△(動)―消化す。

シヤシヨウ うれん

照會(名) 手紙にて問合はす事。△(動)―照會す。

シヤシヨウ うれん

正月(名) しゃうぐわつに同じ。(雅)

シヤシヨウ うれん

正月(名) 一月の舊名。

シヤシヨウ うれん

商館(名) 大なる商家。

シヤシヨウ うれん

將官(名) 現今武官の最上級。大将、中將、少將。

シヤシヨウ うれん

莊官(名) 莊園の役員。莊司。●莊屋。

シヤシヨウ うれん

賞翫(名) 賞美珍重する事。△(動)―

セシヨウクワン

徵説す。
召喚(名) 官廳などに呼び寄する事。△
(動)―召喚す。

ジャシヨウクワン

政治家(名) 太政治家の略。

ジャシヨウクワンおん

聖観音(名) 六観音の一つ。右手

には

大悲

施無

畏の

印を

結び

左手

には



未敷蓮華を持ちて一切衆妙蓮華の未だ開か

ざるを開かしめんとするの形。(佛教)(圖)

ジャシヨウクワン

城郭(名) 城。

ジャシヨウクワン

將軍(名) (一)一軍隊の長官。(二)一萬

人以上の出征軍の長官。(三)征夷府の長官。

(四)鎮守府の長官。(五)近古以來幕府の全

權者。

ジャシヨウヤ

庄屋(名) 徳川時代領主よりの命によりて

ジャシヨウヤゴ

一村の事を處理する役。今の村長。●名主。

ジャシヨウマイ

常宿(名) 常に止宿する宿屋。

ジャシヨウゲ

正米(名) 實物にて賣買する米。

ジャシヨウゲ

障礙(名) さまたげ。●邪覓。

ジャシヨウゲ

上下(名) (一)上と下。 (二)上りと下り

と。●上等と下等。 (三)武家時代士人の

ジャシヨウゲ

禮服。●ツカしにも同じ。

ジャシヨウゲ

上卿(名) 禁中にて公事の日臨時に指定

せられて其事を奉行する役の人。

ジャシヨウゲ

象形文字(名) 物の形を畫にかき

て作りたる文字。……三日月の形を書きて

つきと讀ませ弓の形を書きてゆみの字とし

たるの類。

狼麩(名) 猛く勢よく狂ひまばる事。△

(形)―狼麩なる。

ジャシヨウゲ

謹券(名) 證據の手形。

ジャシヨウゲ

將監(名) 近衛府のじょう。

ジャシヨウゲ

上件(名) 前に書きたる事柄。

ジャシヨウゲ

上弦(名) 三日月の頃弓を張りたる形に

見ゆる月を云ふ。

ジャシヨウゲ

上元(名) 正月十五日の稱へ。……七月

十五日を中元といひ十月十五日を下元といふに對して。

生紙(名) 糊を乾かしたる粉。紙など張るに用ふるもの。

せしゅうふ

樵夫(名) きこり。

しょうぶ

勝負(名) 「一」勝つ事と負くる事と。●ちまき。●勝敗。「二」競争。●争闘。

しやしゅうふ

菖蒲(名) 「一」水草の名。杜若に似て花なく葉は香氣高く五月節句に用ひらるゝもの。●あやめ。「二」又一種。杜若に似たる花咲くもの。●花菖蒲。

じやしゅうふ

上布(名) 織物の名。麻布の上等なるもの。

しやしゅうふかは

菖蒲革(名) 菖蒲の形に似たる模様を染め出したる鹿の革。武具などに多く用ふるは勝武と音の同じきを喜びてなり。(圖)



しやしゅうふがたな

菖蒲刀(名) 五月五日

に贈りて祝ひなごする玩具の刀。菖蒲にて巻き又は飾りたるもの。

しやしゅうふがたびら

菖蒲帷子(名) 五月五日に着る帷子。

しやしゅうふだ

正札(名) 價を記して商品に付くる札。

しやしゅうふだつき

正札附(名) 正札の付きたる商品。

しやしゅうぶつ

正物(名) 偽りならぬ物。●眞物。

じやしゅうぶつ

成佛(名) 「一」死後佛と成る事。●心残り。●心残りして死ぬる事。「二」轉じては死ぬる事。……△(動)成佛す。

しやしゅうぶん

性分(名) 性質。

じやしゅうぶん

上聞(名) 主君の御聞に入るゝ事。

しやしゅうぶうち

菖蒲打(名) 元祿頃の俗。五月五日の菖蒲にて太き三つ打の繩を作り往來の子供にしやがめくさいひて若し下座せざれば之をもて打ちたる童子の遊戯。

せしゅうぶく

妾腹(名) 妾の腹より生るゝ事。又は其子。

じやしゅうぶくろ

状袋(名) 手紙を封じ入るゝ袋。

じやしゅうぶきやう

常不輕(名) 法華經の不輕品(卷の名)を常に誦讀する事。又は之を誦讀しつゝ勤め歩く僧。……「常不輕をつくゝ」は常不輕を行ふ事。(源氏)

じやしゅうぶみ

状文(名) 手紙。

しょうご

證據(名) 疑はしき事を明らかにするための物

品。又は事實。●證。

しやうこ 稱呼(名) ちなへ名。

しやしよこ 鉦鼓(名) 雅樂の樂器。太鼓の如く蓋に釣り下げて拍子に打つ鉦。

しやしよこ 正午(名) 一日の真中。●午の刻。

しやしよこ 上古(名) 〔一〕歷史上孝徳天皇の大化革新以前の時代。〔二〕大昔。

しやしよこ 漏斗(名) 上は茶碗の如くして底に細き管を通じたる金厨器。其管を口の細き入物に差入れて酒、油などをつぎ込むもの。

しやしよこ 上戸(名) 多く酒を飲む人。

せしよこなし (形。形状言ク活) しかたなし。●せんかたなし。●止むを得ず。(俗)

せしよこなし 招魂(名) 〔一〕死人の靈魂を招き祭る事。

せしよこなし 莊嚴(名) 〔一〕いかめしく立派なる事。

しやしよこなし 莊嚴(名) 〔一〕佛前などの裝束。○榮花「堂の莊嚴例のいさめでたし」

せしよこなし 招魂祭(名) 〔一〕招魂の爲めにする祭。〔二〕鎮魂祭。

しやしよこなし 招魂祭(名) 〔一〕招魂の爲めにする祭。〔二〕鎮魂祭。

しやしよこなし 招魂祭(名) 〔一〕招魂の爲めにする祭。〔二〕鎮魂祭。

しやしよこなし 招魂祭(名) 〔一〕招魂の爲めにする祭。〔二〕鎮魂祭。

しやしよこなし 招魂祭(名) 〔一〕招魂の爲めにする祭。〔二〕鎮魂祭。

しやしよこなし 招魂祭(名) 〔一〕招魂の爲めにする祭。〔二〕鎮魂祭。

しやしよこなし 招魂祭(名) 〔一〕招魂の爲めにする祭。〔二〕鎮魂祭。

しやしよこなし 招魂祭(名) 〔一〕招魂の爲めにする祭。〔二〕鎮魂祭。

せしよこんしゃ 招魂社(名) 死人の靈魂を招き祭る神社。

しやうかう 昇降(名) 昇るを降るを。●階子段などの上がり下り。

しやしよかう 將校(名) 士官以上武官の總稱。

せしよかう 小巧(名) 陰曆五月の異名。

せしよかう 燒香(名) 香を焚きて佛を拜む事。△(動)―燒香す

しやしよかう 常香(名) 絶間なく香を焚きて佛に向くる事。

しやしよかう 猩紅熱(名) 病の名。烈しき熱のため身體の赤くなるもの。

しやしよかう 相國(名) 太政大臣の異名。

しやしよかう 生國(名) わが生れたる國。

しやしよかう 上國(名) 〔一〕古代の制。諸國を大、上、中、下に分ちたる其第一に位する國。五位の人の國主に任すべきもの。〔二〕京都近傍の國。●上方地方。

しやしよかう 上告(名) 〔一〕上に申し出づる事。〔二〕特に裁判所にて失敗したる事件を更に大審院に訴ふる事。……△(動)―上告す。

しやしよかう 上告(名) 〔一〕上に申し出づる事。〔二〕特に裁判所にて失敗したる事件を更に大審院に訴ふる事。……△(動)―上告す。

しやしよかう 上告(名) 〔一〕上に申し出づる事。〔二〕特に裁判所にて失敗したる事件を更に大審院に訴ふる事。……△(動)―上告す。

しやしよかう 上告(名) 〔一〕上に申し出づる事。〔二〕特に裁判所にて失敗したる事件を更に大審院に訴ふる事。……△(動)―上告す。

しやしよかう 上告(名) 〔一〕上に申し出づる事。〔二〕特に裁判所にて失敗したる事件を更に大審院に訴ふる事。……△(動)―上告す。

しやしよかう 上告(名) 〔一〕上に申し出づる事。〔二〕特に裁判所にて失敗したる事件を更に大審院に訴ふる事。……△(動)―上告す。

しやしよかう 上告(名) 〔一〕上に申し出づる事。〔二〕特に裁判所にて失敗したる事件を更に大審院に訴ふる事。……△(動)―上告す。

しやしよかう 上告(名) 〔一〕上に申し出づる事。〔二〕特に裁判所にて失敗したる事件を更に大審院に訴ふる事。……△(動)―上告す。

しやしよかう 上告(名) 〔一〕上に申し出づる事。〔二〕特に裁判所にて失敗したる事件を更に大審院に訴ふる事。……△(動)―上告す。

しやしよかう 上告(名) 〔一〕上に申し出づる事。〔二〕特に裁判所にて失敗したる事件を更に大審院に訴ふる事。……△(動)―上告す。

ジャシヨウゴク

上刻(名) 刻を見よ。

ジャシヨウエ

淨衣(名) 白色の

狩衣。布又は生絹

にて作り神祭神拜

などする人の用ひ

たるもの。(圖)

ジャシヨウモン

莊園(名) 莊の

〔一〕に同じ。

ジャシヨウエンジ

生臘脂(名) 綿に浸したるものを絞り

出だして用ふる紅色の繪具。

シヨウテン

昇天(名) 〔一〕天上に昇る事。〔二〕死者復活

して神の處に至る事。(基督教)……△(動)

―昇天す。

シヨウデン

昇殿(名) 古代の制。朝官の殿上に昇る事を

許さるゝ事。●殿上人になる事。△(動)―

昇殿す。

ジャシヨウデン

聖天(名) 天部の神の名。本名は大聖觀

喜天。(佛教)

ジャシヨウアイ

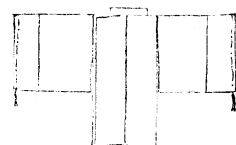
情愛(名) 深く愛する心。

ジャシヨウウキ

上座(名) 上の座席。●上席。

ジャシヨウウミ

詳細(名) 詳しく細かなる事。△(形)―



ジャシヨウウミ

詳細なる。(副)―詳細に。

ジャシヨウウイ

上裁(名) 天皇親ら下し給ふ裁決。

ジャシヨウウイ

淨財(名) 佛事のためにする寄附金。(佛

教)

シヨウモン

稱讚(名) 褒め稱ふる事。△(動)―稱讚す。

ジャシヨウモン

賞讚(名) 賞めたゝふる事。△(動)―賞

シヨウモン

讚す。

ジャシヨウウキ

乗算(名) 掛け算。

シヨウウキ

上作(名) 〔一〕詩、歌、文章などの上等の

ジャシヨウウキ

出來。〔二〕田畑の作物の好き出來。

シヨウウキ

正氣(名) 精神の酔ひもせず狂ひもせずに

ジャシヨウウキ

ある事。●本氣。●本心。

ジャシヨウウキ

將棋(名) 遊戯の名。縦横九行の線を引き

ジャシヨウウキ

たる盤面に各位置により王將、金將、銀將、

ジャシヨウウキ

桂馬、香車、飛車、角行、歩兵などいふ駒を排

ジャシヨウウキ

列して互に戦はする勝負事。

ジャシヨウウキ

床几(名) 〔一〕棒を×形に組み合はせ其上

ジャシヨウウキ

に皮を張りたる腰懸。武家時代おもに用ひ

ジャシヨウウキ

しもの。〔二〕休茶屋などに出だしてある腰

ジャシヨウウキ

懸。

シヤシヨウギ 商議(名) 相談。△(動)―商議す。

じょうき 蒸氣(名) 「一」蒸發したる湯氣。「二」蒸氣船。

じやうき 上氣(名) 逆上。●のぼせ。

シヤシヨウゲギョウ 商業(名) 商ひの營業。

シヤシヨウゲギョウ 聖教(名) 佛教に同じ。〔佛教〕

じやうきやきョウ 土京(名) 地方より都に上る事。△

(動)―上京す。

シヤシヨウギだふし 將棋倒(名) 立て並べたる將棋を端の一枚うしろむきに倒して他の駒を順次

同じ方向に押し倒す事。

正金(名) 紙幣に非ざる正物の金銀貨。

シヤシヨウギん 償金(名) 先方に掛けたる損失を償ふた

めの金銭。

シヤシヨウギん 正客(名) 上席に就く客。

蒸氣車(名) 蒸氣の力によりて鐵道を行く

じょうきしゃ 様に造りたる車。●瀛車。

蒸氣船(名) 蒸氣の力によりて水上を行く

じょうきせん 様に造りたる船。●瀛船。

醬油(名) 大麥大豆と鹽水とにて製した

シヤシヨウユ る食物の味を調ふるに用ふる辛味の汁。

少輔(名) せうの後世の稱へ。

せうぶ

じょうめ 乘馬(名) 人の乗用としたる馬。

じやうめい 上馬(名) よき馬。●駿馬。

しょうめい 松明(名) 「一」たいまつ。「二」脂燭。

せじょうめつ 消滅(名) 消え滅ぶる事。●無くなる事。△

(動)―消滅す。

シヤシヨウめつじつ 生滅滅已(句) 生れて死し死して

已むの意。〔佛教〕

シヤシヨウめん 正面(名) 眞直に向く事。●まむき。●

まごも。

シヤシヨウみ 正味(名) 物の最も重要な部分。

じやうみ 上巳(名) じやうしに同じ。

しょうみやみョウ 稱名(名) 佛の名を稱ふる事。●念佛。△

(動)―稱名す。

シヤシヨウみやミョウ 聲明(名) あやをなして讀む佛經の

節。〔佛教〕

シヤシヨウみやミョウ 唱名(名) 佛名を唱ふる事。●念佛。

(佛教)

シヤシヨウし 賞賜(名) 褒美の物品。

シヤシヨウし 賞詞(名) 褒美の言葉。

せじョウし 小祀(名) 古代官祭三等の一つ。一日間潔齋

して行ふもの。中祀より輕し。大忌、風神、

鎮花、三枝、相嘗、鎮魂、鎮火、道饗、圍幃、尾、平野、春日、大原野、梅宮、神今食、大神の諸祭之に屬す。

セシヨウシ

笑止(名) 「一」をかしく思ふ事。●かたはらいたく思ふ事。「二」困却。●難澁。○謠曲「あら笑止や風が變つて候」同「あら笑止や日の暮れて候」

小子(代) 手紙の詞。私。●野生。●僕。

障子(名) 「一」古は襖さ明り障子この總名。「二」今は明り障子のみを云ふ。

掌侍(名) 女官の名。内侍のじょう。

尙侍(名) 女官の名。ないしのかみ。

莊司(名) 莊園の事を司ごる長官。

精進(名) しゃうじんに同じ。(雅)

生死(名) 生さ死さ。●いきしに。

少時(名) 「一」年若き時。●少年。「二」少しの時間。

小事(名) 僅かの事。●些細の事。

城址(名) 城のあと。

上使(名) 將軍家よりの使。

上巳(名) 五節句の一つ。三月三日の稱へ。

せつし

じやせきうし 上梓(名) 版木に彫刻する事。△(動)―上梓す。

じやせきうし 情死(名) 心中しんちゆう。

じやせきうし 情事(名) 男女の情慾に關する事。●色事。

じやせきうし 證書(名) 證據の書付。

じやせきうし 詔書(名) みことのりの文面。又は其紙。

せきうし 小暑(名) 氣節の名。二十四氣の一つ。

せきうし 少將(名) 「一」古へ近衛府の武官にて中將の次に位するもの。「二」今日陸海軍の武官。

せきうし 少少(副) 少しばかり。△(形)―少々。

せきうし 亟相(名) 左右大臣の異名。

せきうし 猩猩(名) 「一」想像動物の名。形人に似て全身赤く髪長く酒を好みて多量に飲むもの。「二」能面の名。猩々の顔に擬したるもの。(圖)

しゃせきうし 清淨(名) 清くて汚れの無き事。△(形)―清淨なる。(副)―清淨に。

しゃせきうし 霄櫻(名) 天さ地さ。

じやせきうし 繩床(名) 藁を敷きたる床。僧家にて



座する時に用ふるもの。

ジャシヨウシヤシヨウ

上聲(名) 韻を見よ。

ジャシヨウシヤシヨウ

上生(名) 人死して後九品淨土の最上等の場所に往生する事。(佛教)

ジャシヨウシヤシヨウ

上乘(名) 此上なき事。●最上等。

ジャシヨウシヤシヨウ

清上樂(名) 雅樂の曲名。

セシヨウシツ

焼失(名) 焼け失する事。△(動)―焼失す。

ジャシヨウシツ

常日(名) 通常の日。

ジャシヨウシツ

上日(名) ジャウにちに同じ。

ジャシヨウシツ

情實(名) 事情事實。●事の譯。●次第から。

ジャシヨウシツ

成實宗(名) 佛教の一派。成實論を主として教を立つるもの。我國には僧道昭唐より歸りて傳へたり。

ジャシヨウシツ

昇身(名) 官位の高くなる事。△(動)―昇身す。

しょうしん

衝心(名) 脚の病が心臓に及ぶ事。△(動)―衝心す。

しょうしん

精進(名) 「一」食事に肉類を用ひずして身を潔齋する事。「二」精進料理。

しょうしん

正身(名) 本體。…方便のために姿を變

しょうしん

じて現はれたるものならぬをいふ。○「正身の彌陀如來」(佛教)

しょうしん

正眞(名) 偽の無き事。●偽物ならざる事。△(形)―正眞の。

しょうしん

少年(名) 少年の人。

しょうしん

小人(名) 不道德の人。

しょうしん

上申(名) 上へ申し立つる事。△(動)―上申す。

しょうしん

情人(名) 戀人。

しょうしん

精進料理(名) 肉類を突へざる食物の料理。

しょうしん

精進落(名) 精進すべき期限の終りたる時その境目の印に魚肉を食する事。

障子板(名) 頭の骨を射らるまじき爲め綿嚙の處に附くるもの。薄き鐵板を半月狀に作り染革にて包む。

向齒會(名) 老年の人のみ集まりて詩歌など作り遊ぶ會。

精舍(名) 寺。

生者必滅(名) 生れたるものは

必ず滅び死するの意。(佛教)

しゃしゅうじやひつする 盛者必衰(名) 盛りなるものは必ず衰ふの意。(佛教)

屠蘇を入れたる酒。

せしゅうしゆ 屠蘇(名) 屠蘇を入れたる酒。

菩薩(名) 菩薩。(佛教)

しゃしゅうじゆ 聖衆(名) 菩薩。(佛教)

城主(名) 「一」一城の主。「二」域持の大

じやしゅうしゆ 城主(名) 「一」一城の主。「二」域持の大

城守(名) 城を預かり守る人。

じやしゅうしゆ 城守(名) 城を預かり守る人。

上酒(名) 上等の酒。

じやしゅうしゆ 上酒(名) 上等の酒。

成就(名) 出来上がる事。●しおほする

じやしゅうしゆ 成就(名) 出来上がる事。●しおほする

事。△(動)―成就す。

じやしゅうしゆ 事。△(動)―成就す。

上旬(名) 月の上の十日。

じやしゅうしゆ 上旬(名) 月の上の十日。

承秋樂(名) 雅樂の曲名。

じやしゅうしゆ 承秋樂(名) 雅樂の曲名。

上首藏人(名) 藏人頭に同

じやしゅうしゆ 上首藏人(名) 藏人頭に同

しょうへいしゅう 證標(名) 證據のしるし。

しゃしゅううへいしゅう 商標(名) 商品の目印に付くる賣主の

記號。

じやしゅううひん 上品(名) 「一」上等の品。「二」品のよき

事。●卑しからぬ事。……△(形)―上品の。

しゃしゅうもち 莊物(名) しゃうもつに同じ。(雅)

抄物(名) 抄物(名) せうもつに同じ。(雅)

せしゅうもち 莊物(名) 莊園より領主へ納むる作物貢

來。抄物(名) 抄物(名) せうもつに同じ。(雅)

せしゅうもつ 抄物(名) 抄物(名) せうもつに同じ。(雅)

來。抄物(名) 抄物(名) せうもつに同じ。(雅)

しょうもん 證文(名) 證書。

しゃしゅうもん 聲聞(名) 十界の一つ。佛菩薩の次に位

する資格の社會。◎佛の聲を聞き得る故の

名。(佛教)

せしゅうまろう 焼亡(名) せうばうに同じ。△(動)―焼

亡す。

しょうせい 鐘聲(名) 鐘の鳴る音。

せしゅうせい 小生代 手紙の詞。小子。●野生。●私。

せしゅうせい 小成(名) 小さき仕上げ。●少しの成功。

しゃしゅうせい 正税(名) 正丁より出たす租税。

じやしゅうせい 正税(名) 正丁より出たす租税。

せしやうせつ

小説(名) 作者の想像によりて作りなしたる物語。●戯作。

しようせつ

勝絶(名) 十二律の一つ。

じようせん

乗船(名) 船に乗る事。△(動)―乗船す。

しようす

稱(他動サ變) 「一」こなる。 「二」褒むる。 證(他動サ變) 證據を示す。

しやしよ

賞(他動サ變) ほむる。

しやしよ

生(自動サ變) うまる。●出来る。●起る。●はじまる。

しやしよ

生(他動サ變) うむ。●出来させる。●起す。●はじむる。

しやしよ

請(他動サ變) 招く。●請待する。●案内する。

じやしよ

上衆(名) 貴人。(雅)

じやしよ

上手(名) 藝術のよく出来る事。●手際の巧なる事。

じようず

乗(他動サ變) 「一」勢に乗る。●つけ入る。 「二」掛け算を行ふ。

せしよ

憔悴(名) 瘦せ衰ふる事。△(動)―憔悴す。(空穂)

しやしよ

祥瑞(名) めでたきしるし。

じやしよ

上水(名) 飲料にする上等の水。

じやしよ

淨水(名) 清浄なる水。

せしよ

小数(名) 「一」數學上にて單位以下の數。……錢に對する厘、毛。舛に對する合、勺。寸に對する厘、毛の類。●コンマ以下の數。 「二」小數の計へ方を教ふる算術。

せしよ

少數(名) 少しの數。●僅少。

じよ

序舞(名) 能樂の舞曲の名。靜に落ち着きたるもの。

しよ

私欲(名) おのれ一人の利を食ふ心。

しよ

初句(名) 「一」最初の文句。 「二」特には和歌最初の五文字の句。

しよ

卓(名) 椅子と共に用ふる机。

しよ

食(名) 「一」食ふ事。 「二」食物。

しよ

職(名) 「一」官の役目。●役。 「二」生活する爲の仕事。●職業。

しよ

燭(名) 蠟燭の火。

しよ

即位(名) 天皇の御位に即き給ふ事。●そくゐ。

しよ

(雅)

しよ

職員(名) 官員。●役員。

しよ

職人(名) 製造人。●職工。

しよ

職工

しょくだう 食道(名) 飲食物の喉より胃に通ずる管。

しょくだう 食堂(名) 集まりて食事をする室。

じよぐち 所知(名) 友人。●知己。

しよぐちよ 織女(名) 織りひめ。

しよくりやう 食糧(名) 食用とする糧。

しよぐれりやう 食料(名) 「一」食物の材料。「二」食事の代價。

しよぐわ 書譜(名) 文字と繪畫と。

しよぐわでちよふ 書譜帖(名) 多くの書譜を集めて造りたる折本。

しよぐわん 所願(名) 願ひ事。

しよぐわん 諸願(名) 多くの願ひ。●すべての願ひ。

しよぐわん 食客(名) 人の家に養はれて居る人。●居候。

しよぐわん 食用(名) 食物の用に供する事。

しよぐわん 食欲(名) 物を食ひたし願ふ心。●食氣。

しよぐわん 燭臺(名) 蠟燭を立つる臺。

しよぐわん 食卓(名) 衆人共に食事するための机。

しよぐわん 職務(名) 職として必ず爲すべき事柄。●職掌。

しよぐわん 食言(名) 約束の言葉を實行せぬ事。●うそをつく事。△(動)―食言す。

しよぐぶつ 植物(名) 草木類の總名。

しよぐぶつがく 植物學(名) 植物に關する事を研究する學科。

しよぐぶん 職分(名) 職務。●職掌。

しよぐこう 職工(名) 職人。

しよぐこうがた 蜀紅形(名) 蜀紅の錦に擬したる模様の名。

しよぐこうのにしき 蜀紅錦(名) 古へ支那蜀紅の地に産したる最上等の錦。……蜀紅形を參考せよ。

しよぐゑん 觸穢(名) 死人、出産、月經等の穢に觸るゝ事。

しよぐゑん 食鹽(名) 食物の調味に用ふる鹽。

しよぐざい 贖罪(名) 金錢物品などを以て罪を贖ふ事。△(動)―贖罪す。

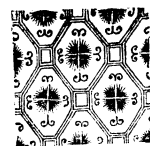
しよぐき 食氣(名) 食欲。

しよぐげふり 職業(名) 生活の爲めに務むる仕事。

しよぐみん 殖民(名) 他國に人民の移住する事。又は其移住民。

しよぐし 食指(名) ひささしゆび。

しよぐじ 食事(名) 飯を食ふ事。△(動)―食事す。



しよくしやシヨウ 職掌(名) 職務。●役柄。

しよくしやシヨウ 食傷(名) 食物を食ひ過して腹を痛む

る事。△(動)―食傷す。

しよくもつ 食物(名) 食ふべきもの。

しよくせい 職制(名) 官職の制度。

しよくす 食(他動サ變) くふ。●たべる。

しよや 初夜(名) 「一」戌の刻。すなはち夜の八時頃。「二」

初夜に行ふ寺の勤め。

しよや 除夜(名) 年の最後の夜。●大晦日。

しよまく 序幕(名) 芝居の最初の幕。

しよけ 所化(名) 佛の弟子。●僧。

しよけい 書契(名) 支那太古の文字。

しよげつ 如月(名) 二月の異名。●きさらぎ。

しよげん 書見(名) 書物を見る事。●讀書。△(動)―書

見す。

しよげん 所見(名) 「一」目にて見るまゝのもの。「二」

意見。

しよぶん 處分(名) 「一」取り計らひ。●處置。「二」刑罰

に處する事。……△(動)―處分す。

しよぶん 序文(名) 書物の初めに書き添ふる文。●はし

がき。●序。

しよふう 書風(名) 文字の書き振り。●書體。

しよごば 序詞(名) 或る句の上に冠らせて云ふ裝飾の

言葉。物によそへていふもあり。芦鴨の羽

風になびく浮草の(如くの意。以上序)定

めなき世を誰いたのまん」の類。殊更に設

けて言ひ掛けにするもあり。梓弓押して春

(張るま言ひ掛く。以上序)雨けふ降りぬ明

日さへ降らば若菜つみてん」の類。同音の

詞を重ねるもあり。青柳の糸に玉ぬく白露

の知ら(しらの音を重ぬ。以上序)す淺世の

春か経るらん」の類。

しよごん 如今(副) 今。●只今。●目下。

しよごん 助言(名) 人の言葉の足らぬ所を補ふ事。口添

へする事。△(動)―助言す。

しよごう 諸侯(名) 大名。

しよかう 初更(名) 戌の刻。すなはち午後八時頃。

しよえん 初縁(名) 初度の縁組。

しよえん 所縁(名) ゆかり。●たより。

しよてい 初手(名) 最初。●最初。

しよてい 書體(名) 文字の體裁。●書き方。●書風。

しよてい 初天邊(名) 眞最初。

しよてん

諸天(名) 佛教にて云ふ天上界の總名。十二天

十三天などの類。

しよざ

所作(名) 「一」しわざ。●所行。「二」芝居などに

て役者の演ずる舉動。

しよざい

書齋(名) 讀書する室。

しよざい

所在(名) 物のある處。●人の住む處。

しよざい

書冊(名) 書籍。

しよき

書記(名) 「一」文字を書き記す事。△(動)―書記

す。「二」文字を書く役。

しよき

暑氣(名) 夏の日の暑さ。

しよき

所行(名) 行ひ。●行狀。●品行。

しよき

諸行無常(句) 世の中は總へ

しよめん

書面(名) 「一」手紙の文面。「二」手紙。

しよし

庶子(名) 妾腹の子。

しよし

處士(名) 官途に就かざる人。

しよし

書肆(名) 本屋。

しよし

助辭(名) 語學上の詞。●やすめことば。●たす

しよし

敘事(名) 感情的の語を交へずして唯事實を記述

する事。

しよしちち

初七日(名) しよなぬか。

しよじよ

徐徐(副) そろり／＼。●しづかに。(又)―徐々。

しよじよ

書狀(名) 手紙。

しよじよ

叙情詩(名) 英語リリックの譯。◎詩

しよじよ

の一體、我感情を歌ふところのもの。

しよじよ

所司代(名) 「一」足利時代。侍所の所司の代

しよじよ

理を勤めたる役。「二」徳川時代。京都にあり

しよじよ

て皇室に關る一切の事を掌りたる役。

しよじん

書信(名) 手紙の音信。

しよじん

初心(名) 「一」まだ經驗の無き時の心。「二」初

しよじん

學。

しよじん

叙爵(名) 「一」古は始めて從五位下に叙せら

しよじん

る事。「二」今は爵位を賜はる事。

しよじん

書式(名) 一定したる文體および其文字の配置

しよじん

方。……公文書、短冊など。

しよじん

諸式(名) 諸品。

しよじん

庶出(名) 妾腹の生れ。

しよじん

初春(名) 春の初め。陰曆の正月。

しよじん

初旬(名) 月の初の十日。●上旬。

しよじん

初秋(名) 秋の初め。陰曆の七月。

じよじし 叙事詩(名) 英語エヒックの譯。◎詩の一體。

しよもつ 書物(名) 本。●書籍。●書冊。

しよまろう 所望(名) 望み。●願ひ。●希望。△(動)― 所望す。

しよせい 書生(名) 學問修業中の身。●學生。

しよせん 所詮(副) 到底。●つまり。

しよす 書(他動サ變) 文字を書く。

しよす 處(他動サ變) 處分する。●處置する。

じよす 序。叙(他動サ變) 「一」順序の位置に置く。「二」序文を書く。「三」位階を授く。

じよす 恕(他動サ變) 情を察して罪を許す。

した 舌(名) 「一」口中にありてべろくしたる軟き肉。物を味ひ言語の助を爲す機關。「二」笙の管に仕組みたる金屬製の瓣膜の如きもの。吹く時振動して音を立つる道具。「三」竽篋の管に挿し込み口に入れて吹く笏形のもの。蘆にて作る。「四」鈴ゆりかの中に垂れたる金。振る時縁に觸れて音を立つるもの。

した 下(名) 「一」上ならぬ處。●低き處。●卑しき處。●表ならぬ處。「二」仕上ぐべき物の假こし

した 齒朶(名) ちらへ。○「下見」「下讀」「下書」「下しらへ」したるもの。うらじろの類。

した (名) 鳥あなゆむ駒の惜しげくもなし」時。○萬葉東歌「人の子の悲しけしだは濱洲

じた 自他(名) 我方さ他の方さ。●自分と他人と。

じた 耳朶(名) 耳たぶ。

じた 死體。屍體(名) 死骸。

した い 四種(名) 四種の因果の法。即ち一に集、二に苦、三に道、四に滅。(佛教)

した い 四體(名) 四肢に同じ。

した い 逆退(名) しんたい。(源氏)

した い 次第(名) 「一」順序。「二」能樂にてシテ又はロキなどの出で來りし時。又は舞曲の始などに謠ふ一種の節。又は其文句。七五七五の句にて成りたるもの。

した い 四大(名) 地、水、火、風。(佛教)

した い 字體(名) 文字の體裁。●書風。●書體。

した い 辭退(名) 卑下して人の請に應ぜぬ事。△(動)― 辭退す。

じた い 時代(名) 時世。●年代。

しだいいかい

四大海(名) 須彌山の四方をめぐれる海。

(佛敎)

しだいし

次第司(名) 加茂祭の次第を司りて行列な

ごを定むる役。

じだいもの

時代物(名) (一)多くの年代を経たるも

の。(二)古代の社會の出來事を仕組みたる

芝居小説。

したば

下葉(名) 木草の下の方にある葉。

したばかま

下袴(名) 差貫の下着に用ふる袴。綾又は

平絹にて大口の如く作りたるもの。十五歳

以下は濃き紅。十六歳以後は紅。長年の後

は白。

したばら

下腹(名) 腹の下の方。

したばふり

下道(自動四段) 下に這ふ。

したごに

舌利(副) 早口に。(雅)

したち

下地(名) (一)其下となるべき地。●假り。●

準備。●下。●地。(二)醬油。

したりを

(名) 長く垂れ下がりにたる鳥の尾。

したりがほ

(名) 得意なる顔付。

したりちなぎ

枝垂柳(名) 枝の垂るゝ柳。

したりんぼ

枝垂櫻(名) 櫻の一種。柳の如く枝の垂

るゝもの。

しだる

(自動四段又下二段) 低く下に垂るゝ。

したるし

(形。形狀言ク活) (一)じごくしたる。○夫

木「賤の女も大路井筒に夕すゞみしたるき

麻の衣すゝきて」(二)でれくしたる有様。

したを

前夫(名) 前の夫。●先夫。(和名抄)

したをれ

下折れ(名) 下の枝の折るゝ事。

したおひ

下帯(名) 禪。

したおもひ

下思(名) 顔色に表はさずして心中に秘め

したはし

居る物思ひ。 幕(形。形狀言シク活) 幕はるゝ有様。●なつ

かし。●戀し。

したがひ

下交(名) 衣の下前。(雅)

したかた

下方(名) 芝居にて長唄などの囃子方の稱。

したがた

下形(名) (一)下地と同じ。○源氏「大將も

さる世の重しなかり給ふべき下形なれば」

(二)下繪。

したがって

從。隨(副) それにつきて。●其故に。

したがふり

從。隨(自動四段) (一)人の後に附きて行

く。(二)他の儘にまかする。●人の言ふ通

になる。(三)服する。●降參する。(四)準す

したかエふッ
したかエがッね

●習ふ。
從。隨(他動下二段)
下襲(名) 東帶

從はしむる。

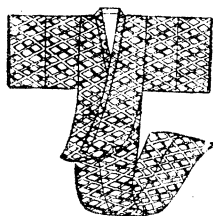
の時袍の下に着る服。背部の下

長く引くやうに

作る。之を下襲

の褌しほと稱ふ。

(圖)



したかキ

下書(名) 假に書く事。●げし。●草稿。

したかゼ

下風(名) 其物の下を吹く風。

したかヨみ

下讀(名) 下調べに讀む事。●下見。

したかリ

滴(名) しづく。

したかル

滴(自動四段) 流動物が下に垂る。●雫が

落つる。

したか

(副) 多く。●烈しく。●甚しく。●いかめ

しく。●非常に。(又)——したかカに。○空

穗「御ほかしの緒をしたかカに結び垂れ」。

(形)——したかカなる。

したかム

認(他動下二段) 「一」取り纏むる。●準備す

る。●所置する。●差圖する。(二)食事す

したかク

下焚(自動四段) 下に燃ゆる。○糞千載「假に

だに上にな立てそ昔の屋の下たく烟おもひ

きゆさム」

したかミ

細螺(名) 貝の名。螺の形して極めて小さく

海邊の石などに多く付き居るもの。

枝垂柳(名)

したり柳に同じ。

したかザくら

下染(名) 染物をする初めにそれんの薄色

もて先づ染むる事。

したかツ

爲立(他動下二段) 「一」仕込む。●教育する。

「二」拵へて立たす。●製造する。●仕

上ぐる。●裁縫する。

したかツかさ

下司(名) 其官の下役。

したかツつみ

舌鼓(名) 舌を鼓の様に打ち鳴らす事。●

美味を飲食する時など。●舌打。

したかツくゑ

下机(名) 物の臺にする机。

したかツつき

舌付(名) 物言ひぶり。

したかツゆ

下露(名) 木の下などに落つる露。

したかネ

下根(名) 「一」草木の根の方。「二」地下に埋も

れたる根。

したならし 下馴(名) 下稽古。

したなき 下泣(名) うそ泣。●泣き真似。

したなめつり (名) 舌にて唇を嘗めまはす事。(今昔)

したなみ 下波(名) 表面は穏かに見えて底にのみ立つ波。

しだら (名) 體裁。●行儀。(俗)

じだらく 自墮落(名) 身持の不規則なる事。●不取締。●不行儀。

したん 紫檀(名) 熱帶産の木の名。質最も固く紫色にして器具裝飾品などに作らるゝもの。

したむ 穢(他動四段) 「一」汁を絞る。「二」特には酒を粕より絞り出す。

しだん 師團(名) 現今軍隊の制。旅團の上に立つ一團隊。

しだん 師檀(名) 其寺の僧き檀家と。

しだん 震旦(名) 支那の異名。

じだん 示談(名) 和睦の相談。

したふ_フ 墓(他動四段) 戀しく思ふ。●なつかしく思ふ。

したうち 舌打(名) 舌鼓に同じ。

したのおひ 下帯(名) 装束を着る時其下に締めたる帯を云ふ。

したく 支度(名) 「一」準備。●用意。「二」食事。……

したく (他動四段) 踏み亂す。●踏み付くる。

したぐち 下口(名) 横笛の下端の切口。

したぐるし 下苦(形。形状言シク活) 心中にて苦しと思ふ。

したぐつ 襪(名) したうつに同じ。……しこうづを見よ。

したぐら 下鞍(名) 藁にて作り馬の鞍の下に敷くもの。

したくさ 下草(名) 木の陰又は他の草の下に生むたる草。

したくみ (名) 工夫。●工面。●準備。(雅)

したやど 下宿(名) げしゆく。

したやかた 下館(名) 本邸に離れて造りたる屋敷。●別荘。

したやしき したやかた 下屋敷(名) したやかた 下箱に同じ。

したまつ 下待(自動四段) 心待をする。

したまへ 下前(名) 衣の前の下に重なる方。

したぶ

(自動四段)

しなぶに同じ。●しなやかである。○萬葉「秋山のしたへる妹」

したぶり

舌振(名)

物の言ひぶり。

したぶし

下臥(名)

其物の下に寐る事。○「松の下ぶし」「花の下ぶし」

したごひし

(形。形状言シク活)

心中にて戀しく思ふ。

したごろも

下衣(名)

下着。

したかぶうて

從。隨(副)

それにつきて。●其故に。

したごころ

下心(名)

表面に表はれざる心。●心の奥底。

したごしらへ

下拵(名)

假作り。●假ごしらへ。

したま

下繪(名)

「一」清書の前に書き試みたる繪。「二」繪様。●圖案。

したまむ

下笑(自動四段)

心中にて笑む。

したて

仕立(名)

「一」仕込。●教育。「二」製造。●仕上。●裁縫。

したでる

下照(自動四段)

其下が赤くなるほゞ照る。(雅)

したぎ

下着(名)

表着の下に着る衣。

したみ

籬(名)

笹の類。上部丸く底四角なるもの。(和名抄)

したみ

下見(名)

下調べ。●下讀。

したみつ

下水(名)

物の下を流るゝ水。

したし

親(形。形状言シク活)

縁の近き。●中よき。●心やすき。●懇意なる。

したしたご

(副)

びたゞごと。●ぐにゃくごと。○字治「今の練精のやうにしたゞごとなりたるものな」

したしむ

親(自動四段)

親しくする。●懇に交はる。

したしんず

親(他動サ變)

したしんずの音便。○親しき交りを結ぶ。

したしうす

親(他動サ變)

したしんずに同じ。

したひ

下種(名)

「一」土の中に埋みたる種。「二」草葉又は落葉などの下になりたる筧。「三」筆の圃の空虚になりたる處。

したび

下火(名)

家の焼くる時燃は落ちたる後の火。

したひも

下紐(名)

衣の裾を結び合はする紐。……人

下裳(名)

衣の下に着る裳。●腰巻。●ゆもじ。くよし和歌によむ事常なり。

下前(自動下二段)

草が下の方にやうく萌

したすだれ

之初むる。

下簾(名) 御所車

の簾の下に懸けて

轆の處に二筋垂ら

し置く布。(圖)

しれい

指令(名) 官より下す

指圖。△(動)一指

令す。

じれい

辭令(名) 官の命令。●官職任免の命。

しれいくん

司令官(名) 一軍の指揮をする人。

しれはむ

(自動四段) 馬鹿らしくある。(榮花)

しれわらひ

痴笑(名) 馬鹿らしき笑ひ方。(義經記)

しれがまし

(形。形狀言シク活) 馬鹿らし。

しれじれ

(形。形狀言シク活) 馬鹿らし。●馬鹿々々

しれもの

痴者(名) 馬鹿物。●愚人。

しそ

紫蘇(名) 草の名。葉は鋸齒にて皺を有し紫色の

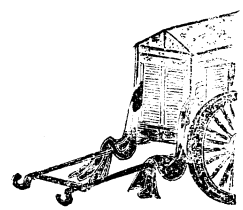
と綠色のとの二種あり。綠色のを青紫蘇と

いふ。食物の薬味となし又は梅干と共に鹽

漬にして食用す。

しそ

緇素(名) 僧の着る黒き衣と俗の着る白き衣と。



じそ

自訴(名) 自ら罪状を訴へ出づる事。△(動) 自

訴す。

じそ

辭書(名) 辭表。○榮花「かゝるほごに大貳のじ

そ度々奉り給へば」

しそつ

士卒(名) 兵卒。

しそん

至尊(名) 上なく尊き事。●天皇陛下。

じそん

子孫(名) 「一」子と孫と。「二」後裔。

じそん

兒孫(名) 子と孫と。

じそん

慈尊(名) 彌勒佛。(佛教)

しそんず

仕損(他動サ變) しそ、こなふ。●やりそこな

しざう

思想(名) 考へ。●心。

しぞう

祇承(名) 地方にありて勅使を待遇饗應する

しぞう

役。○江家次第「會坂の關を出づ。近江の

しぞう

國の祇承勢多驛に到る」伊勢「しぞうの官

しざう

四藏(名) 一に經藏、二に律藏、三に論藏、四に

しぞく

呪藏。(佛教)

しそく

于息(名) むすこ。

しそく

脂燭。紙燭(名) 「一」松の木の小さき棒に油を

付け室内にて火を燈し歩くに用ふるもの。
其手に持つ處に紙を卷
きたる故紙燭とも書く。

〔圖〕〔二〕後世小説家などは手燭の意に用
ふ。

士族(名) 維新後制定せられたる身分の階級。

華族の下、平民の上に位するもの。

氏族(名) 其氏の一族。●一門。

親族(名) しんそくの畧。(雅)

退(自動四段) しりそくの略。

(他動サ變) 爲すするの意を強めていふ詞。…

…いひそすを参考せよ。(雅)

室(名) 〔一〕部屋。〔二〕妻の尊稱。

質(名) 性質。

倭文(名) 上古織物の名。横筋を青糸などにて織

りたるもの。後世の縞の類。●しごり。

賤(名) 賤しき事。又は賤しき人。○「賤の男」賤

が屋

垂(他動下二段) 下げ垂らす。○記「下枝には青

和幣白和幣を取りして、」

實(名) ままこと。●事實。●實際。

じつろく 實録(名) 實の儘の記録。

じつぱた 倭文機(名) 倭文の織物。

じつぱたおび 倭文機帯(名) 倭文機織の帯。

じつに 實に(副) 誠に。●本當に。

じつぽ 尻尾(名) しりなの轉。(俗)

じつぼ 實母(名) 實の母。

じつぼり (副) 〔一〕滴る程濡るる有様。〔二〕しつかに。

……(又)しつぽりと。

じつぱう 失望(名) 望を失ふ事。●當てが違ひて弱る

事。△(動)失望す。

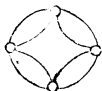
じつぱう 七寶(名) 〔一〕七種の珍寶。經文によりて其

名同じからず。大よそ金、銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、瑪瑙、琥珀、珊瑚などの類。(佛教)

〔二〕模様の名。一種の想像的

珍寶を畫きたるもの。(圖)

〔三〕七寶燒。



じつぱう 十方(名) 十の方角。即ち上、下、四方、四隅。

(佛教)

じつぱふッ 實法(名) じほふに同じ。(盛衰)

じつぱうやま 七寶燒(名) 陶器の一種。七寶の模様を

燒き出たせるもの。

じっぽうせかい

十方世界(名) 天、地、東、西、南、北、東

南、東北、西南、西北の各に一つづゝある世界。皆諸佛の住むところ。(佛敎)

じっぽく

實朴。質樸(名) 飾り氣の無き事。△(形)―質

朴なる。(副)―質朴に。

じっぽく

卓袱(名) 支那料理にて用ふる食卓。

疾病(名) 病氣。

じっぽく

竹笠(名) 「一」禪家にて勸戒のために人を打つ

竹製の杖。「二」指にて人を強く打つ事。

じゅう

嫉妬(名) 「一」れたみそれむ事。「二」りんき。●

やきもち。……△(動)―嫉妬す。

じゅう

十徳(名) 「一」武家の装束。素袍の如くにて腹

を縫ひふさぎたるもの。侍より中間、小者、與昇の類までに着

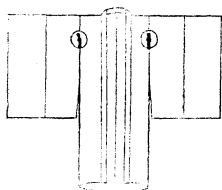
す。侍のは胸に紐あ

り中間以下のは紐な

し。袴の上にも着し

袴なしにも着す。

〔圖〕「二」徳川時代醫師の禮服。僧の衣に似たるもの。



しつち

濕地(名) 濕氣を帯びたる地。

じつち

實地(名) 實際の場合。

しつり

(名) 木に積れる雪の落つる事。

しつを

賤男(名) しつのを同じ。(萬葉)

しつおり

倭文織(名) 倭文の織物。しじりは此詞の約音。

音。

しつか

膝下(名) 膝の下。●ひざもと。

じつか

實家(名) 生れたる家。養家などに對して云ふ。

しつかい

悉皆(副) こゝろなく皆。●残らず。

じつかい

十誠(名) 摩西がシナイ山にて神より授かりたるさいふ十個條の敎訓。(基督教)

じつかい

十戒(名) 一に不殺、二に不盜、三に不姦、四に

じつかい

不妄語、五に不酤酒、六に不說過罪、七に不

じつかい

自讚毀他、八に不慳、九に不瞋、十に不謗三

じつかい

寶。(佛敎)

じっかい

十界(名) 十の想像世界。即ち佛、菩薩、聲聞、緣

じっかん

覺、天、人、修羅、畜生、餓鬼、地獄。(佛敎)

じっかん

十干(名) 年月日又は其他番號の代りに用ふる

じっかん

十種の名稱。甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、

じっかん

癸。

じっかん

賤屋(名) 賤の家。●農家。

じっかん

賤の家。●農家。

しつたん

悉曇(名)。「一」梵語の母音。「二」梵字又は梵語。

しつだまき

倭文手纏(枕) 敷にもあらぬ賤しなごの枕
詞。

しつれ

(名) しつりに同じ。

しつれい

失禮(名) 失敬に同じ。△(形)―失禮なる。

しつそ

質素(名) 飾りなき事。●儉約なる事。△(形)―
質素なる。(副)―質素に。

しつねん

失念(名) 忘るゝ事。△(動)―失念す。

しつらい

失禮(名) しつれいに同じ。(雅)

しつらひ

(名) しつらふ事。

しつらふ

(自動四段) 室内儀式などの裝飾する。●
整頓する。●準備する。

しつむ

沈(自動四段) 「一」水底に陥る。●低き處に下
る。「二」陰氣になる。「三」亡者が極樂に行
く能はずして地獄などへ落つる。

しつむ

沈(他動下二段) 沈ましむる。

しつうた

靜歌(名) 神樂歌の一部門。靜に歌ふもの。

しつうた

志津歌(名) 上古雅樂寮の歌曲の名。(記)

しづのを

賤男(名) 賤しき男。●農夫。

しづのめ

賤女(名) 賤しき女。●農婦。

しづく

疾苦(名) 病の苦しう。

しつゝ

仕付(他動下二段) 仕立つる。●教育する。

しつゝ

雫(名) 水のしたゝり。●露。

しつゝ

(自動四段) 水の底に沈みてある物の透き通り
て見ゆる。●水中の物の見ゆる。○「近江の
海しづく白玉」

しつゝひ

漆喰(名) 石灰など捏れ固めて屋根瓦の合は
せ目など塗るに用ふるもの。

しつゝ

失火(名) 過失にて火事を出す事。

しつゝ

倭文鞍(名) 倭文にて包み飾れる鞍。

しつち

閑屋(名) 神樂歌の曲名。

しつち

しつかに同じ。(形)―静やかなる。(副)―
静やかに。

しつち

しつまる

靜(自動四段) 「一」靜になる。「二」寐入る。

しつまる

鎮(自動四段) 神靈が安置せらるゝ。●鎮座
する。

しつめ

仕付(名) 「一」仕付くる事。「二」行儀作法の教
育。……世俗儀の字をも書く。「三」田の植
付。「四」仕付系。

しつめ

仕付(名) 仕付草の略。

しつめ

失敬(名) 敬禮を失ふ事。●失禮。

しつめ

仕付系(名) 新調の衣服の縫目を反らせぬ

しつめ

ため暫く綴ち置く糸。

仕付亭(名) 仕付糸にしたる聲。

日月(名) 「一」空の日と月と。「二」時間にい

ふ日と月と。

じつげん 実験(名) 理論の當否を證する爲めの試験。△

(動)―實驗す。

じつげん 實檢(名) 眞偽を見分くる爲めの検査。△(動)

―實檢す。

じつげし 靜(形。形狀言ク活) 靜かなる有様。

實父(名) 實の父。

實否(名) 虚實。

じつふう 疾風(名) 急に吹く風。●はやて。

じつふう 十風(名) 十日に一度大風の吹く事。農作に適

度なる氣候。

じつかう 膝行(名) 貴人の御前などにて膝を突きつゝ

座を進む事。△(動)―膝行す。

じつかう 實行(名) 實地に施行ふ事。△(動)―實行

す。

じつごう

(名) 「一」下の心。●心中。○拾遺「春は

惜し時鳥はた聞かまほし思ひわづらふしつ

こゝろかな」 「二」靜なる心。●落着きたる

心。○玉葉「櫻花にほふを見つゝ歸るには

じつこゝろなきものにぞありける」

じつて 下枝(名) 下の方の枝。

十手(名) 武家時代組子などの持ち

て罪人を召捕るに用ふる鐵の

棒。長さ一尺四五寸にて中程

に鉤を附けたるもの。(圖)

じつてつ

十哲(名) 孔子の高弟十人。すなはち顔淵、閔

子騫、冉泊牛、仲弓、宰我、子貢、冉有、季路、

子遊、子夏。

じつてんらく

十天樂(名) 雅樂の曲名。

じつざく

實際(名) 實地に臨みたる時。●實地。△(形)

―實際の。(副)―實際に。

じつざく

失策(名) やりそこなひ。●しくじり。△(動)

―失策す。

じつぎ

漆器(名) 漆塗の器具。

じつぎ

疾鬼(名) 足疾鬼に同じ。(佛敎)

じつぎ

濕氣(名) うるほひ。●濕り氣。

じつげふ

字突(名) 素讀を習ふ時其文字を指すための小

さき棒。

實業(名) 實地に行ふ殖産工商等の事



業。

じつみやミョウ

實名(名) 徳川時代男子通稱の外に附けて嚴格なる場合に用ひたる名。……通稱は太郎、藤右衛門の類にして實名は正則、高德の類。●名乗。

しづみぎ

沈木(名) 水底に沈みたる木。

じつじヤミョウ

實情(名) 偽り無き心。又は事柄。静々(副) 静かに。(又)しつゝこ。

しつぷり

執筆(名) 「一」筆を手に執りて書く事。「二」筆記者。

しづまる

鎮(自動四段) しづまる。●鎮座する。(古)

しつせい

執政(名) 「一」政權を執る事。△(動)―執政す。「二」執政の役。

じつせり

實説(名) 實際の話。(名) 機の織り餘しの糸。

じねん

自然(名) しぜんに同じ。△(形)―自然の。(副)―自然に。

じねんじヤシヨウ

自然生(名) 山の芋の一名。

しな

品(名) 「一」物品。「二」種類。「三」階級。「四」身分。●家柄。●人柄。

しな

科(名) 坂の古言。

しなひイ

竹刀(名) 割竹を合はせて刀に模造したるもの。擊劔の稽古に用ふ。

しなひイ

(名) しなふ事。麴の異名。

しなび

科戸(名) 風の吹き起る坂の上。風の神の居どころ。

しなごのかみ

科戸神(名) 風を司る神。科戸風(名) 科戸より吹く風。

しなる

(自動四段) しなふに同じ。

しながどり

(名) 「一」水鳥の名。鴨の類か。「二」神楽歌の曲名。

しなごど

(枕) 猪名(地名)安房(國名)の枕詞。(萬葉) (自動下二段) じゃらつく。●甘えてもたれさる。

しなたま

品玉(名) 玉を投げ上げては受け取り弄ぶ一種の遊技。

しなん

指南(名) 「一」教へ導く事。△(動)―指南す。「二」教師。

しなんじ

指南所(名) 藝術の道を指南するところ。(自動四段) 板、木の枝などの撓む。

しなやか

細く弱く上品なる有様。(形)―しなやかな

る。(副)しなやかに。

しなぶ (妻(自動上二段) しむるに同じ。)

しなぶ

(枕) 「一」片岡山、片足羽河、筑摩左野方などの枕詞。(紀。萬葉。「二」誤りて鳴の海の枕詞。(源氏)

しなぶ (枕) 越(國名)の枕詞。(萬葉)

しなぶ (品定(名) 物の批評。●品評。

しなぶかる

(自動下二段) しなぶに同じ。(萬葉)

しなぶため

しなめく

(品定(名) 品やうである。●上品である。

しなじな

しなじな

品々に。△(形)一品々の。

しなじなし

品品し(形。形状言シク活) ひんよし。○紫日記「人の形をしななくしくも下りてもてなす處なめる」

品物(名) 物。●物品。

しなもの

白(形) 白き。○「白糸」「白雲」

白糸(名) 白色の糸。

しらべ

しらば

鐵漿を付けぬ女の齒。

しらぼり

白張(名) 「一」白く張る事。「二」白布の狩衣。

仕丁などの着るもの。「三」白紙にて張り油を引つぬ提灯。葬式に用ふるもの。

しらぼた

白旗(名) 「一」白色の旗。「二」源氏の旗。

しらぼた

白肌(名) 一種の皮膚病。白なまづ。

しらぼた

白和幣(名) 白色の和幣。

しらぼし

白星(名) 兜に打つ銀の紙。

しらべ

調(名) 「一」音楽の調子。「二」調子を合はせ見

る事。「三」鼓、太鼓を縮むる緒。「四」調査。

しらどり

●検査。「五」罪人の吟味。

しらどり

白鳥(名) 全身白色の鳥。

しらどりの

白鳥の(枕) 鷺坂山、鳥羽山などの枕詞。

しらふほ

(萬葉) 小新田山の枕詞。……但ししらさ

はふはしらさほるの誤寫にて白蠟堀の意ならんとの説あり。○萬葉「しらさほふ小新田山の守る山のうらがれせな」まこほにも

しらち

白血(名) 病の名。白色の液の下るもの。

しらち

白茶(名) 染色の名。茶色の薄くして白みがりたるもの。

しらぬひイ 不知火(名) 筑紫の海上に顯はるゝ一種の光

り。一面に火を燈したる如く見ゆるもの。

しらぬひの 不知火の(枕) 筑紫の枕詞。

しらを 白魚(名) しらうなの略。

白髪(名) 老いて白色になりたる髪。

しらが (自動四段) 交り合ふ。●まざるゝ。○枕

「後には習ひたるにや常に見えしらがひて

ありく」

しらがさね 白重(名) 白色の重かさねを着る事。夏の服。

白粥(名) 何も入れぬ粥。

しらがゆづ 白髪附(枕) 白髪の如く附くの意にて

木綿の枕詞。櫛に白色の幣を垂れたる形容。

しらかみ 白紙(名) はくし。

白檜(名) 葉の白き檜の木。

しらかし 白(他動四段) しらげさする。

白田鶴(名) 全身白色の鶴(萬代)

しらたま 白玉(名) 白色の玉。

白玉章(名) 白紙の文。戀の文などにて

承諾せぬ時に贈るもの。

しらたへ 白妙(名) しらたへに同じ。(日本紀竟宴歌)

しらつち 白土(名) 白色の土。

しらつる 白鶴(名) しらたつに同じ。(重之集)

しらつづじ 白躑躅(名) 白色の花咲く躑躅。

しらつゆ 白露(名) 白色の露。

しらつゆの 白露の(枕) 滑なめ、きゆなどの枕詞。

白根(名) 「一」慈などの如く根の白きもの。又

は其白き部分。「二」水に洗はれて白くなり

たる水草などの根。○六帖「蘆の白根」

しらなほ、 白繩(名) 魚を捕る時魚の他へ散らぬやうに

水中に引き廻す繩。○散木「ますらをば鶴

川の瀬々に結さるさ引く白繩の絶えずもあ

るかな」

しらなみ 白波(名) 「一」白く立つ波。「二」海賊の異名。

白波の(枕) 濱いちじろく面知るなどの枕

詞。(萬葉)

しらむ 白(自動四段) 白くなる。●しらくる。

調(他動下二段) しらぶに同じ。

しらむし 白虫(名) 虱に同じ。(續古事談)

(他動四段) 互に云々し合ふの意。……いひし

らふは言ひ合ふ、つきしらふは突き合ふの

意の類。(雅)

しらうり 白瓜(名) しらうりに同じ。(小大君集)

しらうな 白魚(名) 魚の名。春の半末の頃河口に産す。白色一ニ寸の魚。食用さす。

しらうめ 白梅(名) 白き梅の花。●はくばい。

しらもの 白笹(名) 矢の一種。竹のまゝにて飾りを付けぬもの。

しらぐ 白(自動下二段) 「一」白くなる。「二」物が無味になる。●興が醒むる。

しらぐも 白雲(名) 白き雲。

しらくも 白雲の(枕) 立田絶えにしなどの枕詞。(萬葉)

しらまかす (他動四段) しらますに同じ。

しらまなご 白真砂(名) 白き真砂。(萬葉)

しらまなご 白真砂(枕) 三津(地名)の枕詞。(萬葉)

しらまゆみ 白檀。白真弓(名) 檀の白木にて造れる弓。白檀。白真弓(枕) い(射)春(張)ひ(引)なごに、ある枕詞。○萬葉「白真弓磯邊の山の」同「白真弓ひだの細江」

しらます 白(他動四段) 白むやうにする。●しらぐる。精米(名) 神佛に奉る洗米。志良宜歌(名) 上古雅樂寮の歌曲の名。

しらげうた

しらふ (記) 白班(名) 白き班點。○「白班の鷹」「白班の矢」

しらぶ 調(他動下二段) 「一」音楽の調子を合せて試むる。「二」音楽を奏する。「三」調査する。●検査する。「四」罪人を吟味する。

しらぶぢ 白藤(名) 白き花の咲く藤。

しらこしも 白腰裳(名) 紐のみ白く造りたる裳。(忠順記)

しらあを 白青(名) 染色の名。白みが、りたる青色。●淺黄。●水色。○「白青の狩衣」

しらあへ 白和(名) 料理の名。白胡麻豆腐などにて白く和へたる物。

しらき 白木(名) 木地の儘の木。色を付けず又は漆にて塗らぬもの。

しらきんご 新羅琴(名) 琴の一種。十二絃にて古へ新羅國より舶來せしもの。

しらゆふ 白木綿(名) 木綿に同じ。

しらゆき 白雪の(枕) いちじろくの枕詞。(萬葉)

しらめ 白目(名) 黒眼なくして白きまこころのみ出だしたる目付。目を廻したる時の有様。(竹取調) 調(名) しらへに同じ。

しらめ

しらみ

虱(名) 小虫の名。人體の不潔より生じて蚤と

同じく血を吸ふもの。

しらじらし

白白(形。形状言シク活) 「一」白く見ゆる

有様。「二」無味なる有様。●興が醒むる有

様。

しらびと

白人(名) 癩病の一種。皮膚の白色になるも

の。

しらびゃっぴょうし

白拍子(名) 「一」中古の末より行はれ

たる一種の歌舞。立烏帽子水干に太刀を佩

き佛經の文句、今様など歌ひて女の舞ひた

るもの。「二」之を舞ふ女。「三」轉じては歌

妓。●藝妓。

しらひげ

白髭(名) 「一」白色の髭。「二」神の名。社は

近江の國滋賀郡打下にありて猿田彦命を祭

れるもの。

しらせ

知(名) 「一」兆候。「二」報知。●合圖。

しらす

白洲(名) 「一」白砂にて成りたる洲。「二」武家

時代裁判を受くる場處。

しらすげ

白菅(名) 菅の一種。葉の縁薄くして白く見

ゆるもの。

しらすげの

白菅の(枕) 眞野知られんなどの枕詞。(萬

葉)

しむ

凍(自動四段) 氷る。●こいる。

しむ

染(自動四段) 「一」染む。●しみがつく。●にし

しむ

む。「二」皮膚又は心に深く感ずる。

しむ

染(他動下二段) しましむる。

しむ

締(他動下二段) 「一」強く結ぶ。●強く結ぶやう

しむ

にする。「二」固めを爲す。「三」纏まりを付

しむ

くる。●合計を勘定する。

しむ

占(他動下二段) 場處を取りて我物とする。●物

しむ

事を我物とする。●占有する。●占領する。

しむ

使。令(助動下二段) 人に爲すやうにさせる。○

しん

「行かしむ」「思はしむ」

しん

心(名) 「一」心臓。●こころ。「二」まんなか。●

しん

中央。●中心。「三」花の薬。

しん

眞(名) 「一」まこと。●眞實。「二」楷書。

しん

信(名) 「一」まこと。「二」信用。●信任。「三」信

しん

仰。「四」音信。

しん

新(名) 新しき物事。

しん

臣(名) みやつこ。●家來。

しん

臣(代) 君に向ひて臣下の自らを言ふ詞。

じむ

事務(名) 其事に就きて執るべき務め。●任とし

てすべき用事。

仁(名) 博く愛し憐む心。

神威(名) 神の威光。●神徳。

嗔恚(名) 怒る事。(佛教)

人爲(名) 人の仕業。●人造。

新院(名) 上皇の二人以上おはします時新し

き院を稱ふる詞。後鳥羽、土御門順徳三上皇の時順徳院を名づけ奉りし例。

辛勞(名) 苦勞。△(動)―辛勞す。

神拜(名) じんばいに同じ。△(動)―神拜す。

神拜(名) 神を拜む事。△(動)―神拜す。

神罰(名) 神の與ふる罰。

審判(名) 〔一〕正邪又は勝負などを審に判定

する事。〔二〕世の終に基督來りて死人生者を審判する事。(基督教)

心耳(名) 心と耳と。

眞如(名) 諸佛證する處の眞實無妄の徳。(佛

教)

信女(名) 戒名に用ふる女性亡者の美稱。

親任(名) 天皇御みづから官に任じ給ふ事。

△(動)―親任す。

新任(名) 新しく任ずる事。

新佛(名) 死して間の無き亡者。

新發意(名) 新に佛道に歸依したる人。

新發意(名) しんほちに同じ。

心棒(名) 心木。

辛抱(名) 苦しみを堪へ忍ぶ事。●忍耐。△

(動)―辛抱す。

人望(名) 世人よりの名望。

神寶(名) 〔一〕神社に藏する寶物。〔二〕三種

神器。

神木(名) 〔一〕神社の樹木。〔二〕特には其社

の神靈の宿れる木。

親睦(名) 親しみ睦ぶ事。△(動)―親睦す。

(形)―親睦なる。(副)―親睦に。

親兵(名) 近衛兵。

神變(名) 不思議なる變化。

信徒(名) 信者に同じ。

新島蘇(名) 雅樂の曲名。

神燈(名) 神に奉る燈明。

神道(名) 〔一〕神代のまゝの道。〔二〕神によ

しんどう 震動(名) ふるひうごく事。△(動)―震動す。

しんどう 神頭。鏝頭(名) 鏝の一種。木にて中を空慮に作り黒く塗りたるもの。

しんごく 神徳(名) 神の功力。●神威。

しんぢ 鍼治(名) 鍼にてする治療。

しんぢう 長朝(名) 卯の刻すなはち午前六時頃。

しんぢう 神勅(名) 神託に同じ。

しんぢん 新陳(名) 新しき物と古きものと。

しんぢう 眞鍮(名) 銅と亜鉛との合金。●黄銅。

しんぢう 心中(名) 「一」心の中。●内心。「二」相思ふ同士の男女の共に自殺する事。●情死。

しんぢうなごん 新中納言(名) 中納言の定員(八人もしくは十人)を超えて任ぜらるる時の稱へ。

○「新中納言知盛」

しんり 心理(名) 學科の名。人の心に付きて研究するもの。●心理學。

しんりょ 神慮(名) 神の心。

しんりやう 神領(名) 神社の所有地。

しんりよく 新緑(名) 夏の初に出づる木々の若葉。

しんりよく 盡力(名) 力を盡す事。●骨折る事。△(動)―盡力す。

じんりん 人倫(名) 人の守り行ふべき道。

しんりき 神力(名) 神の威力。

じんりき 人力(名) 「一」人間の力。「二」人力にて曳く車。●人力車。

しんるゐ 親類(名) 血統の續き合ひたるもの。又は之に準じて近き一族。

じんるゐ 人類(名) 人間の部類。

じんるゐがく 人類學(名) 學科の名。専ら人類に關する事を研究するもの。

しんか 神歌(名) 翁の時に謠ふ謠曲の名。●かみうた。

しんか 臣下(名) 臣に同じ。

じんか 人家(名) 人の住む家。●人家の集まりたる處。

しんかてう 澁河島(名) 雅樂の曲名。

しんがり 殿(名) 戰爭に引きて歸る折など最後に備へて敵の追撃を防ぐ事。

しんかたかな 眞片假(名) 片假名に同じ。◎眞に書きたる片假名の意。平假名の草體に對して云ふ。

しんかん 宸翰(名) 天皇御自筆の手紙。

しんかく 心學(名) 心を修むる一種の學問。

しんかく 神學(名) 神の事を研究する學問。(基督教)

しんかく

しんかき 眞書(名) 楷書を書くための細き筆。

しんよ 神輿(名) 神の御輿。

しんよう 信用(名) 信ずる事。△(動)―信用す。

しんた 糶(名) 漬物の名。糠味噌の類。

しんたい 新體(名) 身。●からだ。

しんたい 神體(名) 〔一〕神として祭る物體。〔二〕神靈の姿。

しんたい 新體(名) 新しき體裁。●新形。

しんたい 進退(名) 〔一〕進む事と退く事と。〔二〕身の處置。

しんたい 身代(名) 一家の財産。

しんたい 人體(名) 〔一〕人の身體。〔二〕人の外見の體裁。

しんたい 神代(名) かみよ。

しんたい 新體詩(名) 西洋風に擬し若しくは新に一體をなして作れる長篇の歌。

しんだん 震旦(名) 古へ支那の異名。

しんたく 神託(名) 神の告げ。

しんれい 浸禮(名) 洗禮の一種。受禮者を水の中へ沈めて行ふもの。

しんれい 神靈(名) 神のみたま。

しんれき 新曆(名) 明治五年以後に用ふる曆。太陽曆。……舊曆の對。

しんそ 親疎(名) 〔一〕血縁の近き親類と遠きものと。

しんそりこ 新曾利古(名) 雅樂の曲名。

しんそん 神孫(名) 〔一〕神の孫。〔二〕神の子孫。

しんそろう 深窓(名) 奥深き部屋。

しんざう 神葬(名) 神道の儀式によりて營む葬禮。

しんざう 心臓(名) 五臓の一つ。胸の中心にありて。血液の循環を掌る機器。

しんざう 新造(名) 〔一〕新しく家、舟など造る事。〔二〕新造の家。〔三〕新造の家に住む新婦。●新婦。〔四〕妻。〔五〕若き女。●むすめ。

しんざう 腎臟(名) 五臓の一つ。腰の後部にありて尿の分泌を掌る機器。

しんざう 人造(名) 人の手にて造る事。

しんそく 神速(名) 不思議なる程速くなる事。△(形)―神速なる。(副)―神速に。

しんつう 神通(名) じんづうに同じ。

しんつう 神通力(名) 神の有する靈妙なる力。

じんづうりき

じんづうのかぶらち

神通の鎧失(名) うはざしにする
鎧失。

しんねん

新年(名) 新しき事。●年始。
新内(名) 新内節の畧。

しんない

新内節(名) 俗曲の一種。
森羅萬象(名) 宇宙間にありさあ

しんらばんしや

らゆる總べてのもの。
新羅陵王(名) 雅樂の曲名。

しんらりょうわう

心柱(名) 建築の時最初中央に立つる大なる柱。

しんのはしら

親王(名) 天皇より皇子皇孫に賜はる一資格。

しんわう

秦王破陣樂(名) 雅樂の曲名。
仕向(他動下二段) 他人のために爲す。

しんわく

眞紅。深紅(名) 染色の名。紅の濃きもの。

しんく

辛苦(名) 苦しみの甚しきもの。△(動)―辛苦す。

じんく

甚句(名) 都々の種類。謡ひながら踊るもの。
神供(名) 神前に供ふる食物。

しんぐ

神火(名) 神燈。
進化(名) 漸々進み來りて善き方に變化する

しんぐわい

事。△(動)―進化す。
心外(名) 人の爲めに思ひも掛けざる迷惑を
受けたる心持。●氣の毒。△(形)―心外な
る。(副)―心外に。

しんぐん

神官(名) じんくわんに同じ。
心願(名) 心中の祈願。

じんぐん

神官(名) 神社に奉仕する人。●かんぬし。
●社人。

しんぐん

神君(名) 徳川家康の尊稱。
神宮(名) 〔一〕神社。〔二〕特には天照皇大神
を祭れる宮。〔三〕特には伊勢の大神宮。

じんぐう

神宮寺(名) 神社に屬したる寺院。
深夜(名) 深き夜。

しんや

神役(名) 神官。●社人。
新譯(名) 新しき翻譯。

しんやく

新約聖書(名) 新約全書に同じ。
しんやくせいしよ 新約全書(名) 聖書の一つ。基督の傳

しんやくぜんしよ

さ使徒の書簡等を合はせたるもの。
新米(名) 今年收めたる米。

しんまい

新米(名) 今年收めたる米。
新秣(名) 雅樂の曲名。

しんまか

神經(名) 〔一〕動物の知覺と運動とを掌る白

色の纖維。知覺神經は腦髓を樞とし運動神經は脊髓を中樞として共に全身に廣がるもの。〔二〕感覺の鋭敏なる事。

しんけいびやう
神經病(名) 〔一〕神經の諸病。〔二〕

物事を氣に掛くる一種の病癥。

新月(名) 三日月。

しんげつ
人傑(名) 智勇のすぐれたる人。

しんけん
眞劍(名) 木太刀ならぬ眞の刀にて勝負する事。

しんぷ
神符(名) 神社より出だす守札。

しんぶつ
神佛(名) 神と佛と。

しんぶつ
人物(名) 〔一〕人間。●人となり。〔二〕すぐれたる人。●豪傑。

しんぶん
新聞(名) 〔一〕新しき話。〔二〕新聞紙。

しんぶん
新聞紙(名) 日々ので來事を記載印刷して賣る紙。

しんぷく
心服(名) 心から服従する事。△(動)―心服す。

しんご
盡期(名) 物の盡くる時期。

しんごん
心魂(名) たましひ。

しんごん
新婚(名) 初めて結婚する事。

しんごん
眞言(名) 眞言宗の略。

しんごん
眞言院(名) 禁中にありて御修法なご行はれし寺院。

しんごん
神今食(名) 禁中に於て六月、十二月の十一日に天皇御みづから神饌を捧げて伊勢大神宮を祭らせ給ふ御神事。●かむいまけ。

しんごん
眞言宗(名) 佛教宗派の名。嵯峨天皇の大同年中僧空海の唐より歸朝して開きたるもの。密教の宗旨に屬す。

しんか
深更(名) ふけたる夜。

しんか
信仰(名) 神佛を信心する事。△(動)―信仰す。

しんか
神號(名) 人間より奉りたる神の御名。

しんか
人工(名) 人間の細工。

しんか
人口(名) 〔一〕人の數。〔二〕人の物言ひ。

しんか
神國(名) 我國の異名。神の開きたる國。

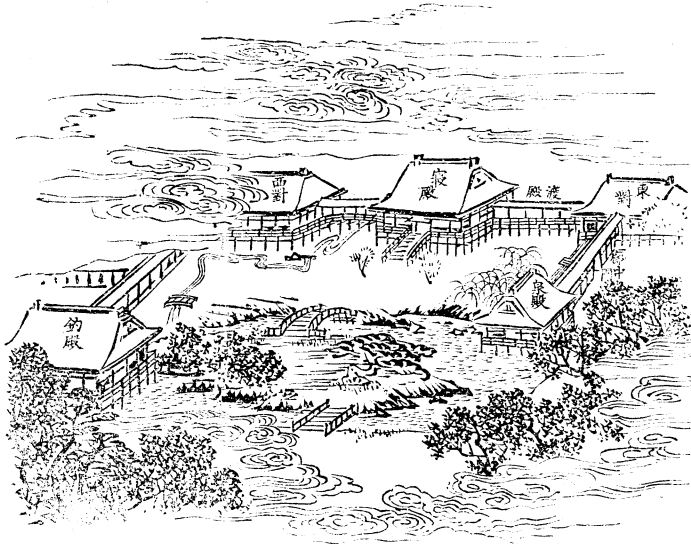
しんか
神影(名) 神の畫像。

しんか
神詠(名) 神のよみ給へる和歌。

しんか
新帝(名) 御即位の後まだ間の無き天皇。…先帝に對して云ふ。

しんか
進呈(名) 進上。△(動)―進呈す。

しんか
神典(名) 神代の歴史。●神道の書物。



しんでん

親展(名) 手紙など宛名せられたる本人自ら

開封する事。

しんでん

神殿(名) 社。

しんでん

寢殿(名) 貴族の家にて主人の住む處。通例

は七間四面に作る。……寢殿造を参考せよ。

しんでん(名)

寢殿造(名) 中古貴族の家の正式建築

法。先づ寢殿を中央にして左右と後に對の

家あり。渡殿あり。廊あり。廊に續きて中

門を作るもの。(圖)

しんあい

親愛(名) 親しみ愛する事。(△)(動) 親愛す。

(形) 親愛なる。

しんあい

仁愛(名) 恵み愛する事。

しんさつ

診察(名) 醫者が病人の容體を見る事。△

(動) 診察す。

しんさん

心算(名) 心積り。● 胸算。

しんさん

辛酸(名) 苦しき事。● 辛き目。

しんさん

新參(名) 今參り。

しんき

新規(名) あたらしき事。(△)(形) しんきの。

(副) しんきに。

しんぎ

心木(名) 物の中心に挿す木の棒。

しんぎ

信義(名) 人に對して信を失はざる事。

しんぎ 眞偽(名) 眞と偽と。●實否。

じんぎ 人氣(名) 人の氣受。●世間の評判。

じんぎ 神器(名) 〔一〕神の器。〔二〕特には三種の神器。

じんぎ 神祇(名) 〔一〕天神と地祇と。〔二〕唯神といふ意にも用ふ。〔三〕和歌の題の一種。神名な

と題にしてむもの。

しんぎろう 靈氣樓(名) 空中に宮、殿、樓閣の如きもの

、現はるゝを云ふ。光線の屈折によりて遠

處にある實物が映じたるもの。

しんぎや 神鏡(名) 〔一〕三種神器の一つ。八咫鏡。

〔二〕神の靈として神社に祭れる鏡。

しんけ 新教(名) 宗教改革(第十六世紀)以來起り

たる基督教各派の稱。

しんぎや 信經(名) 基督教の大教理を約めたる經

文。(基督教)

じんぎくわん 神祇官(名) 官廳の名。古へ百官の上に位

して神事一切の事を掌りたるもの。官吏は

伯、大副、少副、祜、史あり。

しんいゆう 親友(名) 親しき朋友。

しんめい 神馬(名) 神の乗用さいひて神社に飼ふ馬。

しんめい 神明(名) 〔一〕神。〔二〕天照大御神を祭れる

神社の名。

じんめい 人命(名) 人の命。

じんめい 人名(名) 人の名。

しんみやみゆう 身命(名) しんめいに同じ。

しんめやみゆう 神妙(名) 〔一〕靈妙。〔二〕感賞すべき事。

●殊勝。……△(形)―神妙なる。(副)―神妙

しんみん 臣民(名) 臣たり人民たる人。

じんみん 人民(名) 其國の民。

しんし 親子(名) 親と子と。

しんし 紳士(名) 社會の上流に立つ人の稱。

しんし 新司(名) 新任の國司。(後撰)

しんし 震死(名) 雷に打たれて死ぬる事。△(動)―震

死す。

しんじ 神璽(名) 三種神器の一つ。八尺瓊の曲玉。

しんじ 眞字(名) 楷書。

しんじ 進士(名) 古へ大學寮の試験に及第したる人の

稱。

しんじ 信士(名) 戒名に用ふる男性亡者の美稱。

じんじ 人事(名) 人間に關する一切の事。

じんじ 神事(名) 神の祭に關する一切の事。

しんじち 信實(名) しんじつに同じ。

しんじょ 寢所(名) 寝る所。●寢床。

しんしやシヨウ 紳商(名) 紳士風の商人。

しんしやシヨウ 身上(名) 〔一〕身の上。〔二〕財産。

しんじやシヨウ 進上(名) 目上の人に物を贈る事。●呈上。●献上。△(動)―進上す。

しんじやシヨウ 尋常(名) 〔一〕普通。●常道。〔二〕おまなしき事。●温順。……△(形)―尋常の。

しんじやシヨウ (副)―尋常に。

しんしやシヨウ 進宿徳(名) 雅樂の曲名。

しんせしヨウなこん 新少納言(名) 少納言の定員(三人)を超えて任ぜられたる時の稱へ。

しんじやシヨウなこん 新嘗會(名) 新嘗祭に同じ。

しんじやシヨウなこん 新嘗祭(名) にひなめまつり。

しんじやシヨウなこん 神嘗祭(名) 神に仕ふる職務。●神主。●輔官。

しんじやシヨウなこん 寢食(名) 寝る事と食ふ事と。

しんじやシヨウなこん 神色(名) 精神と顔色と。

しんじやシヨウなこん 寢室(名) 寝る部屋。●寢間。

しんじつ 眞實(名) まこと。●本當。

しんじつ 人日(名) 一月七日の祝日。●ないくさ。

しんしん 摺紳(名) 官位の高き人。●公卿。

しんしん 心神(名) 精神。

しんしん 身神(名) 身體と精神と。

しんしん 神人(名) 〔一〕神さ人さ。〔二〕半ばは神になりたる人。

しんじん 眞神(名) まことの神。

しんじん 信心(名) まことの心を以て神佛を尊敬する事。△(動)―信心す。

しんじん 人臣(名) 臣に同じ。

しんしん 人身(名) 〔一〕人の身體。〔二〕一箇人の身の上。上に関する事。

しんしん 人心(名) 〔一〕人の心。〔二〕世人の心。

しんしん 仁心(名) 仁の心。

しんしん 人身窮理(名) 人の身體に付きて研究する學問。●生理學。

しんじのう 神事能(名) 神の祭に興行する能樂。

しんじや 信者(名) 其宗教を信仰する人。

しんじや 仁者(名) 仁の心の深き人。

しんじや 神社(名) 神を祭りたる宮。●やしろ。

しんじやく 斟酌(名) 〔一〕思やり。●察し。〔二〕思ひやりて物事の處置を寛にする事。……△(動)

斟酌す。

しんしゆ 神酒(名) 神前に供ふる酒。●みき。

しんしゆ 新酒(名) 今年醸したる酒。

しんしゆ 進取(名) 困難な凌ぎ進みて事を行ふ事。△
(動)―進取す。

しんじゆ 眞珠(名) 鮑貝の中にある玉。丸くして極めて
美しき光りを放つもの。

しんじゆ 新樹(名) 若葉の茂りたる木。

しんじゆ 人種(名) 世界の人間を其似たる點に付きて別
ちたる其種類。

しんじゆ 眞宗(名) 佛教宗派の名。後堀川天皇の元仁
年中僧親鸞出で、其師法然の教を承け傳へ
更に念佛の法門を説き弘めて開きたるも
の。古來曾て佛門に例なかりし肉食妻帯を
免すの大果斷を行ひたるも此宗旨に屬す。

●一向宗。●門徒宗。

しんしゆ 伸縮(名) のびちぢみ。△(動)―伸縮す。

しんべい 神秘(名) 神道の秘傳。

しんべい 神妙(名) しんめうに同じ。

しんもつ 進物(名) 人への贈り物。

じんもつ 神物(名) 神室。

しんもん 審問(名) 訴訟を判決する爲めに裁判官より
質問する事。△(動)―審問す。

しんもん 神文(名) 神に誓ひを立てたる證文。

じんもん 訊問(名) 犯したる罪惡を聞き正す事。△
(動)―訊問す。

しんせ 信施(名) 慈善の目的を以て神に捧げたる金
品。(基督敎)

しんせい 晨星(名) 明方に見ゆる星。

しんせい 新製(名) 新しく製造する事。又は其物。△
(動)―新製す。

しんせい 親征(名) 天皇御みづから戦に臨み給ふ事。
△(動)―親征す。

しんせい 神聖(名) 尊くして清き事。●かうくしき
事。△(形)―神聖なる。(副)―神聖に。

じんせい 人世(名) 人間世界。●社會。

じんせい 人生(名) 人の一生。

しんせん 神饌(名) 神に供ふる食物。

しんせん 神仙(名) 「一」神さ仙人さ。「二」半は神、半は
仙人に屬したる人。「三」雜栗の調子の名。

しんせん 新鮮 新しき事。(形)―新鮮なる。

じんぜん 荏苒(名) 年月の経過し行く有様。

しんせき

親戚(名) 親類。

しんせき

眞蹟(名) 眞實の筆蹟。

じんせき

人跡(名) 人の通りたる足跡。

しんず

信(他動サ變) 信用する。●信仰する。

しんず

進(他動サ變) 進上する。●まぬらする。

しんず

薪水(名) 薪と水と。●煮焚などする事。

しんず

心酔(名) 心から惚れ込む事。△(動)一心酔す。

しんず

進水式(名) 新に造りたる船を海上に浮ぶる時の儀式。

しふ

(自動上二段) 耳、目などの働が無くなる。●盲目になる。●聾になる。

しふ

誣(他動上二段) 強ひて人に悪名を負はする。

しふ

強(他動上二段) 無理押しに事をする。●無理に勤むる。

しうち

仕打(名) 仕方。●擧動。(佛敎)

しうん

紫雲(名) 紫色の雲。

しの

篠(名) 竹の一種。草の如く叢生して莖細く脆きもの。

しの

清器(名) 便器。●おかは。●おまる。(副) しのに同じ。●しげく。

しの

しのはこ

しの

しのはこ

しのわり

篠割(名) 鎧の札の一種。(圖)

しのだけ

篠竹(名) しのに同じ。

しのつつみ

四鼓(名) 雅樂の樂器。一の鼓などの類。古へ樂拍子に打ちたるもの。

しのはぐら

(名) 「一」茂く生ひたる莠。 「二」轉じては篠の葉草の意にて篠を云ふ。……(雅)

しのをふぶき

(名) 雪交りに繁く吹く風。○夫木「武藏野のしのをふぶき寒きより妻もこもらぬ牡鹿なくなり」

しのめ

東雲(名) 夜の明方。●曉。

しのぐ

凌(他動四段) 「一」物の上を押し通す。●冒して進む。●壓倒する。 「二」堪へ忍ぶ。

しのや

篠屋(名) 篠にて葺き圍ひたる家。

しのぶ

忍(名) 忍草の略。

しのぶ

忍(他動四段。他動上二段) 「一」思ひ出たす。●思ひやる。 「二」辛抱する。●堪ふる。●こらへる。

しのぶ

忍(自動四段) 人に知られぬやうにする。●隠る。●ひそかにする。

しのぶ

忍草(名) 草の名。葉は紫菜、裏白などに似

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

しのぶ

て一つの根より多く生ずるもの。

しのぶえ 篠笛(名) 篠竹にて作りたる横笛。

しのぶもちすり (名) 信夫摺に同じ。

しのぶすり 信夫摺(名) 古へ陸奥の國信夫郡より産せし一種の織物の模様。忍草を打違へにして摺りたるもの。

しのて (名) 眞の手の略。◎楷書。○空穂「黄ばみたる色紙に書きて山吹に付けたるはしのて春の詩」

しのぎ 鎬(名) 刀の刃と脊さの中間に鋭角をなして高まりたるところ。

しのび (名) 人に隠れて行ふ事。

しのびどころ 忍處(名) 忍び人の住む處。

しのびがへし 忍返(名) 賊などの忍び入るを防ぐ爲めに垣塀などの上に設くるもの。尖りたる竹などにて矢來の如く造る。

しのびづま 忍妻(名) 忍びて通ひ行く先の女。●情婦。

しのびね 忍音(名) 「一」内々泣く聲。「二」陰曆四月に鳴く時鳥。……時鳥は陰曆五月に鳴くものなれば四月に鳴くのはまた公然たる聲ならずして忍音といふ。

しのびなき 忍泣(名) 聲を立てずに泣く事。

しのびのを 忍緒(名) 兜の緒。

しのびやか 隠れ忍ぶ有様。●ひそやか。(形)―しのびやかなる。(副)―しのびやかに。

しのびごと 誅(名) 死人生前の履歴などを述べて哀悼の意を極前靈前などに告ぐる言葉。

しのびごら 忍事(名) 密事。●隠事。

しのびごら 忍言(名) 私語。●耳語。

しのびごら 忍籠(他動下二段) 忍びて心の中に籠め置く。

しのびありき 忍歩(名) 人に知られぬやうに隠れて出て歩く事。

しのびしび 忍忍(副) ひそかに。●内々。●こそ、そ。(又)―忍び〜に。

しのびびど 忍人(名) 忍びて通ひ行く先の女。(空穂)

しのすがき 篠簞垣(名) 篠の簞にて編みたる垣。

しのすだれ 篠簾(名) 篠にて作れる簾。

しく 市區(名) 大なる市街の區分。

しく 詩句(名) 詩の句。

しく 四句(名) 偈の一名。(佛教)

しく 四苦(名) 生、老、病、死。(佛教)

しく 生、老、病、死。(佛教)

死苦(名) 「一」死ぬる時の苦。「二」死ぬる程の苦。

如。若(自動四段) 似る。●及ぶ。

敷(自動四段) 廣まる。

敷(他動四段) 「一」平らに延ばす。「二」世間に廣

むる。

(自動四段) 重なる。●頻る。○續拾遺「真柴刈

路や絶えなん山賤のいやしき降れる夜半の

白雪」

じく 字句(名) 文字と文句と。

しぐる 時雨(自動下二段) 時雨の降る。

しぐわ 齒科(名) 齒の病を治する醫術。

じくわ 耳科(名) 耳の病を治する醫術。

じくわ 自火(名) 我家より出したる火事。

しぐわつ 四月(名) 年の第四番目の月。

しぐわん 史官(名) 國の歴史を編纂する官吏。

しぐわん 士官(名) 陸海軍尉官の總稱。

しぐわん 志願(名) 心の願ひ。●志望。△(動)―志願す。

じくわん 次官(名) 長の補助として其次に位する官。

しぐわんしゃ 志願者(名) 志願する人。

じくわんしゃ 自畫賛(名) 自分のつきたる畫に自分が賛す

る事。

しぐれ 時雨(名) 秋の終より冬の初に掛けて定めなく

時々ばらばらと降る雨。○「初時雨」むらし

くれ「北しぐれ」夕しぐれ「小夜しぐれ」

しぐれつき 時雨月(名) 陰曆十月の異名。

しぐむ 仕組(他動四段) 組み立つる。

しぐう 四隅(名) 四方の隅。すなはち東南、東北、西

南、西北。

しぐふつ (自動四段) しつかりと合ふ。●うまくはまる。

(萬葉)

しぐま 熊(名) 熊の一種體大にしても毛白く性最も猛

烈なるもの。

しぐみ 仕組(名) 組立。●組織。

しぐじる (他動四段) 仕損ずる。●過つ。●失策する。

(俗)

ししく (副) 「一」かきせん。●頻りに。(又)―ししく

に。(雅)「二」聲を少し立て、泣く有様。

(又)―ししくと。

ししゃ 紗(名) 絹織物の一種。目の荒くして軽く薄きもの。

ししゃ 社(名) 「一」神社。「二」一事業を爲すに數人組み合

ひて力を協はす團體。又は其會所。

ししゃ 射(名) 弓射る術。

しゃ 杖(名) 罪人の刑罰を杖す事。これに三種あり。常杖、大杖、非常杖。

しや (感) 人を罵る時の聲。多くは名詞の上に冠らしたるやうに用ふ。○宇治「しや頭割らんぞしつるものを今昔「しや衣の領を取りて引き出たせ」

じや 麝(名) 獸の名。鹿に似て小さく色黒くして虎の如き斑あるもの。其臍より麝香を取る。

じや 蛇(名) 「一」へびの大なるものにて角あり水中に住むもの。「二」へび。

じや 邪(名) よこしまなる事。

じやいん 邪姪(名) 佛教にて云ふ五戒の一つ。女色を恣にする事。

しやろく 社祿(名) 社の知行。

しやば 車馬(名) 車と馬と。

しやばく 娑婆(名) 現世。●此世。(佛教)

しやに 沙漠(名) さばくに同じ。

しやにち 沙尼(名) 女性の沙彌。●新入の尼。

しやにん 社日(名) 春分、秋分の頃ある戌の日の稱へ。

しやじん 社人(名) 神官。

しやぼん 石鹼(名) 汚れ物を洗ひ落すに用ふるもの。油

じやはホリ 亞爾加里にて製す。●せきけん。邪法(名) 邪道に同じ。

しやべる 喋(自動四段) 續け様にべら／＼物言ふ。

しやべつ 差別(名) ちがひ。●分ち。●けじめ。●區別。

しやどう 社頭(名) 神社。

じやだう 邪道(名) 「一」道德に背きたる道。「二」人を迷はす魔術。

しち 社地(名) 「一」神社の所在地。「二」神社の所有地。

しやちほこ 鯨(名) 「一」海獸の名。體は魚類に似、顔は虎に似て極めて猛烈なるもの。「二」鱧の形に作りたる屋根瓦。●鱧瓦。

しやちやう 車軸(名) 車の輪の心棒。

しやちゆう 社中(名) 「一」社員。「二」連中。

しやり 舍利(名) 佛の骨。(佛教)

しやる (助動四段) せらるゝ。●せ給ふ。○「言はつしやる」行かつしやる

しやが 胡蝶花(名) 草の名。葉は杜若に似て廣く春の末葛蒲に似て青みを帯びたる白色の花咲くもの。

しやが 車駕(名) 天皇の御車。

じやがたらいも

馬鈴薯(名) 芋の一種。莖は二三尺にて地面を這ひ花は白く根は食用さなるもの。

しやがむ

(自動四段) 身を屈めてすわる。

しやがむ

(自動四段) 跪く。(俗)

しやく

社格(名) 神社の格式。

しやく

斜陽(名) 入日。●夕日。●落日。

しやたい

蛇體(名) 蛇の姿。

しやたん

社壇(名) 神社にて神體の安置してあるところ。●正殿。

じやく

蛇足(名) 蛇の足。餘計にて無益なる物事の喩。

しやらりん

沙羅林(名) 古樂の一名。

しやく

洒落(名) 小事を氣に掛けすさつぱりしたる事。●滑稽なさいふ事。△(形)―洒落なる。(副)洒落に。

じやのめ

蛇の目(名) 紋の名。中央に白丸を残して縁を厚く塗りたるもの。竹輪の串を貫きて丸く切りたる形。

しやく

杓(名) 柄杓の略。

しやく

勺(名) 「一」柄にて量る一合の十分の一。「二」平方積を量る一合の十分の一。

しやく

酌(名) 盃に酒をつぐ事。

しやく

笏(名) 尺の意。◎束帶の時手に持つ板。木又は象牙を長さ一尺幅二寸程に削りて作りたるも

しやく

の。木のを木笏さいび象牙のを笏さいふ。(圖)

しやく

尺(名) 尺度の名。一丈を十に割りたるもの。●一寸を十倍したるもの。

しやく

癩(名) 「一」婦人病の名。急に胸痛み全身に癩癩を起すもの。「二」肝癩。

しやく

爵(名) 「一」位。●位階。「二」現今の制。功勞ある人々に賜はる資格。すなはち公、侯、伯、子、男の五等あり。

しやく

釋(名) 「一」僧侶の姓。……釋迦氏を以て姓とするもの。「二」解釋。●註釋。

しやくば

借馬(名) 賃を出して借る馬。

しやくばち

尺八(名) 「一」雅樂の樂器。製は俗曲のものさ大方同じ。「二」俗曲の樂器。豎に持ちて吹く笛。一尺八寸の竹にて造り其上の切口を下唇に付けて音を出すもの。

しやくざり

酌取(名) 宴席にて酌をする人。



しやくごりむし

尺取虫(名) 虫の名。形糸の如く二寸程にて常に人が指にて物の寸尺を量るが如く體を屈伸して進行するもの。

しやくごろう

赤銅(名) 金と銅と安質母尼との合金。

しやくぢやぢゅう

錫杖(名) 僧

の携ふる大なる杖。身の丈よりも長く頭に數個の鐵輪を付けたるもの。(圖)



しやくりやちゅう

酌量(名) 斟酌に同じ。△(動)酌量す。

しやくる

(他動四段) 手前へ急に引き寄する。(俗)

しやくわい

社會(名) 「一」一定の秩序ありて分業法の行はるゝ人民の一團體。「二」同種類の人の一世界。

じやくかん

若干(數) いくらか。●そこばく。△(形)一若干の。

しやくそん

釋尊(名) 釋迦の尊稱。

じやくねん

若年(名) 年若き事。●年若き人。

しやくなげ

石楠花(名) 木の名。深山に生じて春の末薄紫の美しき花咲くもの。

しやくむ

(自動四段) 凸凹になる。

しやくふり

(他動四段) 汲む。(俗)

しやくくにち

赤日(名) 曆にて云ふ惡日の稱。

じやくくわくちやう

寂光(名) 寂光土に同じ。

じやくくわつなうご

寂光土(名) 佛の國。(佛教)

しやくや

借屋(名) 賃を出して借る家。

しやくやう

芍薬(名) 草の名。花は牡丹に似て春の終りに咲くもの。

しやくま

赤熊(名) 赤色に染めたる熊の毛。

じやくま

寂寞(副) せきばくに同じ。(又)一寂寞と。

しやくてん

釋奠(名) 古へ大學寮にて春秋二季(二月、八月の上丁日)に行はれたる孔子の祭式。

しやくでん

釋奠(名) しゃくてんに同じ。

しやくざい

借財(名) 借金。

しやくけ

石橋(名) 石の橋。

しやくけ

釋教(名) 釋迦の教。●佛法。

しやくけ

借金(名) 借りたる金。

じやくめつ

寂滅(名) ぼるびうせる事。

じやくめつ

寂滅爲樂(句) 寂滅して初めて眞の樂を爲すの意。(佛教)

しやくし

杓子(名) 飯・汁など盛る時用ふる器。ヒの類。

しやくじ

釋氏(名) 僧侶。●佛者。

しやくびやくほうし

笏拍子(名) 「一」雅樂の拍子

の一種。笏を二つに切りて打ち合はするもの。神樂、催馬樂などに用ふ。

「二」笏拍子に用ふる樂器。(圖)

しやくびやくほうし

赤白桃李花(名) 雅樂の曲名。

曲名。

しやくびやくれんげらく

赤白蓮華樂(名) 雅樂の曲名。

しやくもん

釋門(名) 佛門。

しやくせん

借錢(名) 借金。

しやくせんたん

赤梅檀(名) 香木の名。赤色の梅檀。佛像などに作るもの。

じやくす

寂(自動サ變) 僧の死する。

しやくけ

社家(名) 神官。

じやくけ

邪氣(名) 風邪氣。(源氏)

しやくけい

舎兄(名) 兄。

じやくけん

邪見(名) 無慈悲。△(形) 邪見なる。(副) 邪見に。

しやくこ

鷓鴣(名) 鳥の名。支那産にて牝雞の形に似るもの。

しやくこ

碑碓(名) 寶玉の名。蛤に似て更に大きく美しき綾ある貝。

じやくかう

麝香(名) 香料の名。麝より取りたるもの。

しやくてい

舎弟(名) 弟。

しやくでん

社殿(名) 神社の正殿。

しやくざい

謝罪(名) 過を詫ぶる事。△(動) 謝罪す。

じやくき

邪氣(名) 「一」悪氣。「二」風邪。●感冒。

しやくざり

(名) 狂言の終に用ふる一種の笛の吹方。

しやくきやくほう

舎兄(名) しやくけいに同じ。

しやくきん

砂金(名) まだ吹き分けぬ金塊。

しやくきん

謝金(名) 謝禮に贈る金錢。

しやくめん

赦免(名) 罪人の刑罰を赦す事。△(動) 赦免す。

しやくめんじやくしやう

赦免狀(名) 赦免の宣告書。

しやくみ

沙彌(名) 佛弟子と爲りて初めて剃髮せし僧の稱。

しやくみせん

三味線(名) さみせんに同じ。(俗)

しやくし

社司(名) 神官。

しやくし

奢侈(名) おごり。●贅澤。

しやくじ

社寺(名) 神社と寺院と。

しやくじ

寫字(名) 文字を寫す事。又は其人。

しやくしやくしやう

社掌(名) 神主。

じやくしやくしやう

邪正(名) 邪なる事と正しき事と。

しゃしよく

社稷(名) 「一」支那にて云ふ土地の神と穀物の神と。「二」國家。

しゃしん

捨身(名) 「一」俗界の身を捨て、佛門に入る事。「二」僧。

しゃしん

寫眞(名) 「一」實物を寫し取る事。「二」紙又は硝子に實物を寫し取るの術。又は其寫したる繪。

しゃじゆうつ

射術(名) 弓を射る術。

じやしゆう

邪宗(名) 「一」世を亂す宗教。「二」外教嚴禁の時代基督教の稱へ。

じやびせん

蛇皮線(名) 琉球の樂器の名。三味線の類。…我國の三味線は此蛇皮線と同語なるべしといふ。

しゃも

(名) 雞の一種。最も蹴合に強きもの。

しゃもん

沙門(名) 僧の異名。

しゃせい

寫生(名) 生物を其儘畫に寫す事。△(動)―寫生す。

しゃせつ

謝絶(名) 人の頼みを丸で斷る事。△(動)―謝絶す。

じゃせつ

邪説(名) 人を迷はす惡説。

しゃせき

積石(名) 繪具の名。代積に同じ。

しやす

謝(他動サ變) 「一」有難く思ふ。●禮を述ぶる。「二」罪を詫ぶる。●謝罪する。「三」斷る。●謝絶する。

じやすの

邪推(名) 悪しき方に推量する事。△(動)―邪推す。

しま

島(名) 「一」水に四方を取り圍まれたる地。「二」泉水、築山などある作り庭。

しま

織(名) 布に織り出したる筋。

しま

紫磨(名) 上等の精金。(佛敎) 四魔(名) 一に煩惱魔、二に五衆魔、三に天子魔、四に死魔。(佛敎)

しまい

姊妹(名) 姉と妹と。

しまひ

仕舞(名) 「一」物事の終り。「二」婦人の化粧。「三」能樂の舞の所作。後世轉じては能の内

しまり

の一部分を演ずる舞。締(名) 取締。●監督。締(自動四段) しめられてある。……しむを見よ。

しまる

締(他動四段) 物事の亂れぬやうに監理する。

しまわ

島曲(名) 島のまはり。

しまぐる

島陰(自動下二段) 島陰に隠る。

しまがくれ

島隠(名) 島の陰。

しまだ

島田(名) 女の髪の結び方の名。若き婦人の結ふ正式の髪。

しまだく

島臺(名) おもに婚禮に用ふる臺の飾り物。松、竹、梅、鶴、龜又は高砂の翁なご作りて蓬萊の形を寫したるもの。

しまだひ

縞鯛(名) 鯛の一種。黒鯛に似て青白き縞のあるもの。

しまじり

始末(名) 「一」始と末と。●本末。「二」結局。●片付。(俗)

しまじり

島津島(名) 「一」島に住む島。「二」鶴の一名。

しまじり

島津島(枕) 鶴の枕詞。

しまじり

島津田(名) 島に作れる田。(催馬樂)

しまね

島根(名) 島に同じ。(雅)

しまながし

島流(名) 昔の刑罰の名。●島流し。●流罪。

しまん

自慢(名) 我事を誇る事。△(動)―自慢す。

しまふ

仕舞(自動四段) 「一」物事の終はる。「二」化粧する。

しまふ

仕舞(他動四段) 「一」物事を爲し終へる。「二」

散亂せめやうに片付くる。「三」失策する。

しまぐに (自動四段) しまきの風が吹く。

しまくに 島に成りたる國。

しまかき (名) 強く吹き巻く風。○萬代「しまき吹く響の洋の舟渡り心まごふも誰によりてか」

しまし (副) しばしに同じ。(古)

しまひめ 島姫(名) 島を司る女神。

しまもり 島守(名) 島を守る人。

しますり 島摺(名) 島の形を摺りたる衣類の模様。洲濱形の一名。○「島摺の直垂」

しけ 四華(名) 佛の示現なごの時に降る四種の花。一に曼陀羅華、二に摩訶曼陀羅華、三に曼珠沙華、四に摩訶曼珠沙華。(佛教)

しけ 濕氣(名) 「一」濕ひ。●しっけ。「二」雨天の續く事。「三」海にて漁獵の無き事。

しけい 死刑(名) 罪人を殺す刑罰。

しけい 自啓(名) 自ら己を默示する事。(基督教)

しけい 結糸(名) 質の悪しき糸。

しげいさ 淑景舎(名) 禁中六舎の一つ。一名は桐壺。

しげいさ 滋藤(名) 弓の一種。五分程づゝ間を置きて滋く藤にて巻きたるもの。

しげぬく 繁實(他動四段) しげぬくに同じ。(萬代)

しげる 繁。茂(自動四段) 草木など一所に集まりて生ふる。

しげん 試験(名) 試み。●ためし。△(動)―試験す。

じけん 事件(名) 事。●事柄。

じげん 慈眼(名) 佛の衆生を見る慈悲の眼。(佛教)

じげん 示現(名) 神佛が姿を見する事。△(動)―示現す。

しげやま 茂山(名) 草木の茂りたる山。

しげき 茂木(名) 茂りたる木。

しげき 刺戟。刺激(名) 「一」針などにて刺す事。「二」刺す。如く心を突き動かして勵ます事。△(動)―刺戟す。

しげめゆい 滋目結(名) 鹿の子染の如く繁く絞る事。又は其布。

しげし 繁(形。形状言ク活) 多く深く集まりてある。●度重なる。

しげしげ 繁々(副) 間なく。●幾度も〜。

しふ 紙布(名) 紙にて織りたる布。

しふ 詩賦(名) 詩と賦と。

しぶ 澁(名) 澁柿を搾りて取りたる液。板又は紙など

しぶ 塗りて腐蝕等の豫防を爲す。四分(名) 四等の官。即ち長官、次官、判官、主典。

しぶ 又はのみ、すけ、じょう、さくわん。

しぶ 使部(名) 官廳の小使。

じふ 自負(名) 自慢。△(動)―自負す。

しぶいろ 澁色(名) 澁に似たる色。茶色の黒みが、りたるもの。

しぶいち 四分一(名) 銅と銀との合金。灰色にて種々の器具に用ひらる。

しぶごし (形。形状言ク活) 負け惜しみが強くある。●横着である。(俗)

しぶがちゃ 澁茶(名) 澁き味の茶。

しぶりがら (副) いや〜。

しぶぬりあぼし 澁塗烏帽子(名) 武家にて用ふる烏帽子の一種。墨の上に柿澁を塗りたるもの。

しぶる 澁(自動四段) 「一」心の進み兼ねる。「二」物事の進み兼ねる。

しぶかはら 澁皮(名) 「一」樹の薄皮。「二」栗の實の薄皮。

しぶかき 澁柿(名) 味の澁き柿の實。

しぶかみ 澁紙(名) 澁を引きたる紙。包紙、敷紙など

に用ふ。

じぶつ

事物(名) 物事。

しぶん

詩文(名) 漢詩と文章と。

じぶん

自分(名) おのれ。●われ。

じぶん

時分(名) 時節。●時刻。

しほうちほ

澁團扇(名) 澁を塗りたる團扇。

しぶのてし

四部弟子(名) 四部衆に同じ。

しぶく

(自動四段) 「一」しぶきのかゝる。「二」妨げられて進みかゝる。○清輔「霜枯の背間にしぶく釣舟や心もゆかぬ我身なるらん」

じぶく

時服(名) 其時の衣服。

しぶき

(名) 霧の如く散り來る水氣。

しぶし

澁(形。形狀言々活) 「一」柿澁の如き味の感じ。「二」物の停滯する有様。●心の進まぬ有様。「三」はでならずして質素の處に味のある有様。

しぶし

澁々(副) 心の進まぬ事を強ひて務むる有様。●厭はしげに。●いやそうに。(又)澁々に。

しぶし

四部衆(名) 四種の佛弟子。即ち優婆塞、優婆夷、比丘、比丘尼。(佛敎)

しぶし

尻籠(名) 矢を盛る器。箆の一名。

しこ

醜(形) 「一」恐ろしき有様。○記「黄泉津醜女」 「二」憎むべき有様。○萬葉「醜時鳥」 「三」卑しむべき有様。○「醜名」……(又)「醜」。(又)「醜」。

しこ

死期(名) 死に際。●最期。●今は。死後(名) 死にたる後。

しこ

事故(名) 譚のある事。耳語(名) さいやき。●耳うち。△(動)「耳語す。銀。鏗(名) 兜の名所。鉢の後ろより首筋の處に垂れ掛かりたる草摺の如きもの。

しこ

仕事(名) 「一」すべて務むべき業。「二」特に裁縫。自己流(名) おのれ一人の流義。(自動四段) 類るの轉。(萬葉) 齒骨(名) 齒莖の骨。譚。諷(他動上二段) 譚言する。(古) 醜名(名) 人を卑しめて本名の外に他より付けて呼ぶ名。……鼻の赤き人を鼻赤など稱ふるの類。

しこ

(他動四段) よき様に成す。●爲慣らす。

しごむ 仕込(他動四段) 「一」こしらへ置く。「二」買ひ

入る。「三」教育する。

じこん 自今(副) 今より後。

しこう 伺候(名) 貴人の御前にさむらふ事。△(動) 伺候す。

しかう 四更(名) 時刻の名。丑の刻。すなはち午前二時頃。

しかう 嗜好(名) 好み。●たしなみ。

しごふ 四劫(名) 天地開闢より消滅まで四期の變化。一に成劫、二に住劫、三に壞劫、四に空劫。

(佛敎)

しがう 謚號(名) おくりな。

しがう 試毫(名) 書初。●試筆。

じこう 時候(名) 時節。●氣候。

じかう 時好(名) 其時の世人の好み。

じかう 事項(名) 事件。

じかう 侍講(名) 主君の御前にて書物を講義する役。又は其人。

又は其人。

じがう 寺號(名) 寺の名。

じがう 次號(名) 次ぎの番號。又は其番號のもの。

しかう 而(副) しかしてに同じ。

しごめ 醜御楯(名) 敵を恐れしむべき君の御楯。○萬葉「今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ我は」

至極(副) 極めて。●極上。(又)―至極に。△(形)至極の。

じこく 自國(名) わが生れたる國。

じく 時刻(名) 時間。●刻限。

じく 醜草(名) 草を憎み卑しみて呼ぶ詞。○萬葉「忘れ草わが下紐に付けたれど醜の醜草なほ戀にけり」

じく 至極(自動サ變) 極度に至る。●きはまる。(名) 布一幅をしごきて帯の代りに用ふるもの。

じく 醜女(名) 「一」顔の醜き女。「二」黄泉の國に居るさいふ恐ろしき女。鬼女の類。

じく 厭ふべき。●いやな。○記「吾はいなしこめしこめき穢なき國に到りてありけり」

しこみつゑ 仕込杖(名) 及物を中に仕入れたる杖。

しごせん 子午線(名) 地理學上の詞。之を算する地に屬する經度の稱。

じゑい 自衛(名) 自ら我身を養生する事。

しへたぐ 虐(他動下二段) 人を壓制してむごい目に合はする。

しゑん 私怨(名) 一箇人の怨。

しゑや (感) よしやと云ふ場合の時に残念の意を帯びて發する聲。○萬葉「靈幸ふ神も我をば打つてこそしるや命の惜しけくもなし」

して 仕手(名) 能樂にて其曲の主たる技を演ずる役。又は其役者。

して 爲手(名) する人。

して (副) しかして。●そして。●さて。

して (後) 「一」在りて。●居て。○萬葉「鴨ぞ鳴くなる山陰にして」「二」にて。○源氏「少將と二人していさほしがるほどに」「三」を以て。○源氏「さるべき人して傳へ奏せさせ給ひければ」

しで 幣(名) 神を祭る時紳、注連などに垂らすもの。木綿又は紙を切りて作る。●御幣。

しで 死出(名) 死出の山。

しでい 子弟(名) 子と弟と。

しでい 師弟(名) 師と弟子と。

してばしら 仕手柱(名) 能舞臺にて橋掛より舞臺へ入る角の處にある柱。常に仕手の技を演ずる標準となるところ。

しでたなざ (名) しでのたなさに同じ。

してん 四天(名) 四天王。(佛教)

じてん 辭典(名) 辭書。

じてん 自傳(名) 自身に書く我傳記。

してんわう 四天王(名) 「一」四種の天部。即ち多聞天、持國天、增長天、廣目天。法華經を守るもの。(佛教) 「二」武術技藝などにて名を得たる四人の優等者。○「輿光の四天王」「和歌の四天王」

しでうり (他動四段) 砧にて布を打つ。○一説には繁く問なく打つの意。一説には布を砧に垂らして打つの意。○後拾遺「さよふけて衣しうつ聲聞けば急がぬ人も寢られざりけり」

しでのたなざ (名) 時鳥の異名。○垂の田長の意にて田植時を教ふるの意なるべし。

しでのたま 死出の山(名) 亡者の冥途に行く時越ゆる山。

してき 四敵(名) 四方の敵。

しあひひ

仕合、爲合(名) 武術などの勝負を較ぶるも
の。

じあい

慈愛(名) 恵み深き事。●なまき厚き事。●慈
しみ。△(形)―慈愛なる。△(又)―慈愛の。

しあん

思案(名) 考へ。●物思ひ。△(動)―思案す。
字餘(名) 和歌にいふ詞。短歌の文字の三十

じあまり

一字より餘計にある事。
四明後日(名) 明後日の翌日。

しあざつて

仔細(名) 譯。●理由。

しあつ

死罪(名) 死刑に行ふべき罪。

じあつ

自裁(名) 自殺。△(動)―自裁す。

じあつ

自在(名) 自由。△(形)―自在なる。(副)―自
在に。

じあつ

仔細に(副) くはしく。

じあつ

自在鉤(名) 自在に上げ下げの出来るやう
に仕掛けたる一種の鉤。

じあつ

(自動四段) 後へ寄る。●退く。
(自動四段) しまるに同じ。
自殺(名) 自分に命を捨つる事。△(動)―自殺
す。
資産(名) 財産。

じざん

自讃(名) 自ら褒むる事。△(動)―自讃す。
自讃歌(名) 自慢の和歌。

じざんか

詩作(名) 詩を作る事。

じざく

自作(名) 手作。●手製。△(動)―自作す。
字指(名) 字突き。

じざし

四季(名) 春夏秋冬。
式(名) 「一」儀式。●法式。●た。●きまり。「二」
延喜式(書名)の略。「三」筆算にて運算の順
序を示したるもの。

じあ

職(名) 「一」官廳の名。……皇后職、修理職、大膳
職の類。「二」特には皇后職。

じあ

識(名) 「一」物を識る事。●知識。●學識。「二」
見識。

じあ

私記(名) 一箇人の記録。

じあ

指揮(名) さしづ。●命令。△(動)―指揮す。
鳴鯛(名) 鳥の名。鵜に似て嘴長く沼澤などに立
ちて魚類を啄み食ふもの。

じあ

仕儀(名) 事の次第。
磁器(名) 陶器の一種。薬を掛けて焼きたる土器。
●焼物。●瀬戸焼。

じあ

食(名) 食物。

じあ

じや 時機(名) 適當の時。●場合。

じや 辭儀(名) 「一」禮儀。「二」特には頭を垂れて會釋する事。

じや 時宜(名) 適當の場合。

じや 敷居(名) 戸障子の上下にありて溝を作りたる横木。

じや 清座(名) 地に敷く座。(紀)

じや 食籠(名) 食物を盛るための器。丸く大きくして上に蓋あるもの。

しや 仕切(名) 「一」物の境目を付くる事。●隔て。「二」仕拂。

しや 尻切(名) しきれに同じ。

しや 類(副) かされんく。●絶句間なく。●しきりて。△(形)しきりなる。(又)しきりの。(副)しきりに。

しや 矢の一種。白羽と黒羽とを接ぎ合はせて中黒、中白、爪黒、爪白などにはきたるもの。○夫木しきりばのやさしきものは菖蒲草今日引き初むる眞弓なりけり」

しや 仕切(他動四段) 「一」境目を立つる。「二」仕拂ふ。

しや 類(自動四段) 引き續きくする。●數重なる。

しや 色界(名) 三界の一つ。女色して満たされたる想像の世界。(佛教)

しや 敷皮(名) 敷き物にする獸皮。

しや 式神・職神(名) しきじんに同じ。

しや 死去(名) 死ぬる事。△(動)死す。

しや 四に圓教。(佛教) 一に三藏教、二に通教、三に別教、四に圓教。

しや 試業(名) 學業の試験。

しや 事業(名) 仕事。●務め。

しや 色欲(名) 色情。

しや 式壁(名) 支關先の板張の所。

しや 式代(名) 「一」辭儀。●禮。「二」お世辭。●追從。○盛衰「雲の上人御前に侍らひてめでたき御事を式代申して」

しや 敷立(他動下二段) 柱を作り建つる。○新古今「宮柱下つ岩根に敷き立て、露もくもりぬ日の御影かな」

しや 敷妙(枕) 袖衣、床、枕、家などの枕詞。

しまれ

尻切(名) 草履の一種。革にて作

りたる雪踏の類。昔し道の濕りたる時に履きたるもの。

(圖)



しまなつ

式内(名) 式社を見よ。

しまなみ

類浪(名) 重なりて立つ浪。

しまのはねがき

鳴羽掻(名) 鳴の曉に羽を掻く事。

しまのかみ

式神(名) しきじんに同じ。

しまのびやビュウぶ

四季の屏風(名) 一雙十二枚折の屏風に四季十二箇月の話をかきたるもの。古

へ祝の席に建てたるもの。

しまや

醜屋(名) 卑しき家。(萬葉)

しまへ

紙逆(名) 君父を弑する事。

しまもね

鳴焼(名) 料理の名。茄子に油を塗り味噌を付けて焼きたるもの。

しまもね

重時(名) 稻の種を一度蒔きたる上に又蒔く事。(記)

しまむら

式外(名) 式社を見よ。

しまむら

敷蒲團(名) 「一」敷きて寝る蒲團。「二」敷きてすわる蒲團。●座蒲團。

しまむら

敷舞臺(名) 座敷の内に作り設けたる能舞

しまむら

臺。

しまぶしヤシヨウ

臺。

式部省(名) 官廳の名。國家の典章儀

式の事を掌るところ。官吏は卿、輔(大、小) 丞(大、小) 録(大、小) あり。●のりのつかさ。

志岐傳。數手(名) 雅樂の曲名。

しまで

職田(名) 中古の制。官職に就き納言以上に

しまでん

賜はりたる田地。地は畿内にて二分を畿外にて一分を給したるもの。

しまさん

敷金(名) 借屋の保證金として先づ家主に預

しまキョウ

け置く金。

しまキョウ

子宮(名) 婦人の體內にありて胎兒の生育す

しまキョウ

るところ。●子壺。

しまキョウ

至急(名) 大なる急ぎ。△(形)―至急の。

しまキョウ

(副)―至急に。

しまみ

櫛(名) 木の名。佛前に供ふるもの。

しまみ

闕(名) 敷居。

しまし

色紙(名) 「一」赤、黄、青、綠、紫などの色にて染

めたる紙。古へ和歌など書くに用ひたるもの。轉じては白色の染めざる紙の事をも云

ふ。「二」和歌を書くための方形の紙。短冊

の一種。「三」衣類の破れに當つる繕き切れ。

しんじょう 職事(名) 「一」實務に服する官。「二」藏人頭。

しんじょう 式神。職神(名) 陰陽師の使役する神。又は咒

呪する人に使はれて他人に禍を興ふる神。

しんじょう 式社(名) 延喜式の神名帳に載せられたる式

社。官祭に預かりたるもの。……式社を式

内の社といひ。其他のものを式外の社とい

ふ。

しんじょう 敷島の(枕) 大和一國にも全國にもかゝる

枕詞。

しんじょう 敷物(名) 和歌の道。歌道。

しんじょう 身に敷くもの。

しんじょう 式目(名) 法制の簡條書き。

しんじょう 「一」主君。主人。「二」おもなるもの。

●主眼。●主點。「三」神。基督教

しんじょう 眼目。●主眼。●主點。「三」神。基督教

「一」くび。「二」かしら。●おもなるもの。

しんじょう 「三」犯罪の主謀者。

詩歌を數ふる詞。○「一首の和歌」

しんじょう 「一」赤き色の繪の具。「二」赤き色。

しんじょう 「一」秤り目の名。兩の二十四分の一。

「二」徳川時代貨幣の名。兩の十六分の一。

しんじょう 守(名) かみ。●國司。

しんじょう 酒(名) さけ。○諺曲「いかに辨慶。靜にしゆを勸

め候へ」

しんじょう 種(名) 種類。

しんじょう 壽(名) 「一」命永き事。「二」祝。●こまぶき。「三」

年齢。

しんじょう 儒(名) 儒道。●儒者。

しんじょう 從(名) 位階の順序を示す詞。正の次に位するもの。

○「從四位」從五位」

しんじょう 首位(名) 最も上の位。

しんじょう 棕櫚(名) 木の名。熱帶産にして葉は大なる團扇

の如くにて多くの裂目を有す。幹に生する

赤色の毛は取りて種々の用に供せらるゝも

の。

しんじょう 酒樓(名) 料理屋。

しんじょう 鐘樓(名) 鐘撞き堂。

しんじょう 棕櫚竹(名) 竹の一種。莖に穴なく葉は棕

櫚に似たるもの。

しんじょう 壽老人(名) 七福神の一つ。頭に頭巾を

被り手に巻物を持ち鹿を連れたる圖を講む

くもの。

しんじょう 襦袢(名) 着物の下に着る短き衣。

しんじょう 襦袢(名) 着物の下に着る短き衣。

しほろう 首謀(名) 首として悪事を巧みたる人。

じゆぼく 入木(名) 書法の名。晋の王羲之の書きたるもの。は力強くして其筆木に三寸突き入りたり。さいふ話より起る。

しゆど 衆徒(名) 奈良の東大寺、興福寺などに置きたる僧兵の稱。僧にして武道を習ひ寺を護衛するもの。

しちどう 種痘(名) うゑばうさう。

じゆたう 儒道(名) 孔子の教を祖とする道。

しちやちよう 主張(名) わが説を守りて言ひ立つる事。△(動)―主張す。

しちやちよう 手杖。柱杖(名) 禪僧の用ふる一種の杖。

しちやちよう 首丁頭巾。出長頭巾(名) 出家の出陣する時被ぶる頭巾。目のみ出づるもの。

しちちん 縵珍(名) 織物の名。緞子の類にて細密なる模様を織り出だしたるもの。

しりり 修理(名) 「一」修覆。△(動)―修理す。「二」修理職の略。

しりりやりヨウ 首領(名) 頭立つ人。●長。

じゆりやりヨウ 受領(名) 「一」受取る事。△(動)―受領す。「二」古、地方官の總稱。

しりりけん 手裏銀(名) 投げ付けて敵を打つ小さき刀。又は其術。

しりりしき 修理職(名) 官廳の名。内裏宮殿の修理を掌るまゝころ。官吏は大夫(櫓)、亮、進、屬、算師あり。

しるるゐ 種類(名) 品物のそれ／＼の類。●品類。

しゆか 首夏(名) 初の夏。陰暦の四月。

じゆか 儒家(名) 儒者の家。

じゆかい 授戒(名) 佛教信者に戒を授くる式。△(動)―授戒す。

じゆかい 受戒(名) 佛門に入りて戒を受くる事。△(動)―受戒す。

しゆかく 主客(名) 「一」主人と客と。「二」おもなるものと附屬物と。

しゆかく 酒客(名) 飲酒家。

じゆがく 儒學(名) 儒道の學問。

じゆえう 需要。需用(名) 必要ありて其物の製作を待つ事。……供給に對していふ。

しゆた 首陀(名) 天竺四性の一つ。農。

じゆたい 入内(名) 皇后、中宮、女御に立つべき人の初めて内裏に入る事。又は其式。△(動)―入内

す。

しゆだん

手段(名) 方法。●手立。

しゆれん

手練(名) 手にての熟練。

しゆそ

咒阻(名) 人をのらふ事。△(動)―咒阻す。

じゆつ

術(名) 「一」すべ。●方法。●手段。「二」わざ。●技藝。「三」仙人などの行ふ神變不思議の術。

しゆつば

出馬(名) 馬に乗りて出づる事。△(動)―出馬す。

しゆぼん

出版(名) 版にして世に弘むる事。△(動)―出版す。

しゆぼん

出奔(名) 家を出で、行方を知らせぬ事。△(動)―出奔す。

しゆちやう

出張(名) でばる事。△(動)―出張す。

しゆつちん

出陣(名) 軍に出づる事。△(動)―出陣す。

しゆつり

出離(名) 世間の俗事を離れて専ら佛道に入る事。△(動)―出離す。(佛教)

しゆつたい

出来(名) しゆつらいに同じ。△(動)―出来す。

しゆつたつ

出立(名) 旅立の●ぎだつ。△(動)―出立す。

しゆつそ

出訴(名) 争ひを訴へ出づる事。△(動)―出訴す。

す。

じゆつなし

術無(形。形状言ク活) 苦し。●せつなし。

しゆつらい

出来(名) てくる事。●仕上る事。△(動)―出来す。

しゆつなふつ

出納(名) 「一」官名。藏人所に属して一切政務の時雑事の取次を爲す役。「二」大臣などの家にも此くの如き役目を行ふ下吏の稱へ。

しゆつくり

出火(名) 火事を出だす事。△(動)―出火す。

しゆつげ

出家(名) 「一」家を出で、僧となる事。△(動)―出家す。「二」僧。

しゆつざん

出産(名) 子を産む事。△(動)―出産す。

しゆつぎょ

出御(名) 天皇の御出。△(動)―出御す。

しゆつし

出仕(名) 勤務に出づる事。△(動)―出仕す。

しゆつしゃん

出生(名) 子の生るゝ事。

しゆつせ

出世(名) 「一」世間を出で、佛門に入る事。佛教。「二」世間に出で、社會上の位置を高める事。

しゆつせい

出精(名) 骨折。●勉強。△(動)―出精す。

しゆつせん

出船(名) ふなで。△(動)―出船す。

しゅつせけん 出世間(名) 俗世間を出離して佛門に入る

夢。(佛教)

しゅつせき 出席(名) 其席に出づる事。△(動)―出席す。

しゅつす 卒(自動サ變) 四位、五位の人の死ぬるを云ふ。

しゅら 修羅(名) 「一」六道の一つ。常に闘争殺戮のみを

事として苦痛絶えざる世界。(佛教) 「二」闘

争。●戦争。「三」戦争の事を仕組みたる能

樂又は芝居の稱へ。

じゅらい 入來(名) 客の入り來る事。●來訪。

じゅらだう 修羅道(名) 修羅の世界。(佛教)

じゅらん 酒亂(名) 酒狂。

じゅらのう 修羅能(名) 戦争の事を作りたる能樂。

じゅらく 入洛(名) 京都に入る事。△(動)―入洛す。

じゅん 旬(名) 月の十日づつを三つに分ちたる其一つ。

即ち上旬(一日より十日まで)、中旬(十一日

より廿日まで)、下旬(廿一日より月末まで)

しゅん 儀式として天皇の政事に臨ませ給ふ時日

の稱へ。年中行事歌合に曰く「旬さ申すは

天皇の政に臨み給ふ義なり。是は四月一日

の旬の事にて侍り。夏冬の季の改まる始に

御酒を賜ひ政を聞きしめすなり。旬にばさ

まゝの義あり内裏新らしく造られて始め

て南殿に出てさせおはしますを新所の旬と

申す。位に即かせ給ひて政に臨み給ふを萬

機の旬と申すにや。此四月の旬には内侍弱

を持ちて上達部に給へば跪きて受取る作法

なご有るにや」

じゅん 順(名) 「一」正しき事。●順當。……逆の對。「二」

順序。

じゅんばん 順番(名) 順序を逐うて代り々にする番。

●順次。△(副)―順番に。

じゅんに 順に(副) 順々に。●次々に。

しゅんかん 瞬間(名) 瞬く間。●極めて短き時間。△(形)

―瞬間の。(副)―瞬間に。

しゅんやまうりゅう 春楊柳(名) 雅樂の曲名。

じゅんれい 巡禮(名) 「一」社寺を拜み廻る事。又は其人。

「二」特に西國三十三番の觀音など信仰し

て拜み廻る人。

じゅんわなん 淳和院(名) 古へ源氏の子弟を教育した

る學校。恒貞親王の創め給ひしもの。

じゅんなん 殉難(名) 國難の爲めに命を捨つる事。△

(動)―殉難す。

しゅんあ、うでん

春鶯囀(名) 雅樂の曲名。

じゅんのまひ

巡舞(名) 宴席などにて主客順々に舞ふ事。

じゅんくわん

循環(名) 輪の如く廻りて際限の無き事。△(動)―循環す。

しゅんけい

春慶(名) 春慶塗の略。

じゅんけい

閏刑(名) 罪人が病者、有爵者、士分などの場合に本刑に代へて行ふ刑罰。

しゅんけいぬり

春慶塗(名) 薄く木地を現はして塗りたる漆器。和泉の春慶が創めたるもの。

しゅんぶん

春分(名) 二十四氣の一つ。春になりて晝夜平分する時。現今の曆にては三月二十一二日の頃にあり。

しゅんぷう

春風(名) 春吹く風。

じゅんぷう

順風(名) 追風。

じゅんか

巡幸(名) 天皇の諸國を巡り給ふ事。△(動)―巡幸す。

じゅんか

巡行(名) 歩き廻る事。△(動)―巡行す。

じゅんえん

順縁(名) 情に隨ひて佛縁を結ぶを順縁といひ情に違ひて佛縁を結ぶを逆縁といふ。た

まへば其佛を始より拜むつもりにて來たる

しゅんでいらん

春庭樂(名) 雅樂の曲名。

しゅんでいく

春庭花(名) 春庭樂の舞の名。

じゅんていくわんおん

準胝觀音(名) 觀音の一體。如

幻三昧等の三昧に入りて人道三十三障を破

し憍

慢を

降伏

し佛

性を

あら

はし

たる

姿。

じゅんさい

〔佛教〕(圖) 葦菜(名) 水草の名。若葉は極めて滑らかなる卷葉にて夏の頃食用となるもの。

しゅんき

春季(名) 〔一〕春の末の月。〔二〕春の時節。

じゅんけ

殉教者(名) 教のために死する人。(基督教)



じゆんきん 純金(名) 交り物の無き黄金。

じゆんぎん 純銀(名) 交り物の無き銀。

しんきく 春菊(名) 野菜の名。葉花香氣共に菊に似たるもの。冬春の頃浸し物などに作りて賞味す。

じゆんぎやく 順逆(名) 〔一〕順と逆と。〔二〕順縁と逆縁と。(佛敎)

しゆんめ 駿馬(名) よき馬。●良馬。

じゆんし 殉死(名) 主君の供して死ぬる事。△(動)―殉死す。

しゆんじやまう 春情(名) 色情。

しゆんしよく 春色(名) 春の景色。

しゆんじちう 春秋(名) 〔一〕春と秋と。〔二〕一年。〔三〕年輪。

じゆんび 準備(名) 用意。△(動)―準備す。

じゆんびつ 潤筆(名) 書畫などの謝禮として贈る金。

じゆんず 准(自動サ變) なぞらふる。●疑する。●ならふ。

じゆんする 純粹(名) 交り物の無き事。△(形)―純粹なる。(又)―純粹の。(副)―純粹に。

しゆう 雌雄(名) 〔一〕鳥の雄と雌と。〔二〕強弱。●勝

しゆう 主(名) 主君。●主人。敗。

しゆう 宗(名) 佛敎の流派。○「眞言宗」禪宗」

しゆう 衆(名) 多くの人。

しゆう 私有(名) 一箇人の所有。

しゆう 州(名) 國。

しゆう 洲(名) 地球上の大陸を五大分したるもの。稱。……亞細亞洲、歐羅巴洲の類。

しゆうふつ 集(名) 歌集、詩集、文集の略。

しゆう 執(名) 執心。●妄執。(佛敎)

じゆう 銃(名) 鐵砲。

じゆう 從(名) 〔一〕主に歸するもの。〔二〕犯罪の共謀者。を受けざる事。△(形)―自由なる。(又)―自由の。(副)―自由に。

じゆう 十。拾(數) さを。

じゆうわ 周圍(名) 物の外郭。●まはり。

しゆうわ 拾遺(名) 〔一〕洩れたる事を拾ひ補ふ事。〔二〕侍從の異名。

じゆうい 獸醫(名) 獸類の醫者。

じゆうい 十一月(名) 年の第十一番目の月。

じしゅふくくわめんくわんおん 十一面觀音(名) 觀音の

一體。顔十一ありて前の三面は慈悲、左の三面は忿怒、右の三面は牙を上様にし善を見ては喜び悪を見ては嘲り笑ふ貌を示し。正面は不笑不嗔にして善惡不二をあらはしたるもの。



さて頂上の一面は過去正法明如来の姿なりとす。(佛教)(圖) 秀逸(名) 詩歌文章などの特別に勝れたる事。

じしゅふろくらくらん 十六羅漢(名) 羅漢中より選びたる優等十六人。即ち跋羅駄闍尊者、迦諾迦

伐蹉尊者、諾迦跋釐駄尊者、蘇頌陀尊者、諾

炬羅尊者、跋陀羅尊者、迦哩尊者、弗多羅尊者、成博迦尊者、半諾迦尊者、羅帖羅尊者、那伽摩那尊者、因揭陀尊者、伐那婆斯尊者、阿氏多尊者、注茶半託迦尊者。

しゅうは 宗派(名) 宗旨の流派。

じしゅふくわあばん 十八番(名) 得意なる技能。◎俳優市川團十郎の家にて秘術とする藝十八種ある故に起れる詞。

じしゅふはつてん 十八天(名) 十八種の天上界。即ち梵衆天、梵輔天、大梵天、少光天、無量光天、光音天、少淨天、無量淨天、偏淨天、福生天、福愛天、廣果天、無想天、無煩天、無熱天、善見天、善現天、色究竟天。(佛教)

じしゅふばん 十番(名) 馬乘袴の一種。襦を高く裾を濶く作りたるもの。

じしゅふにいんえん 十二因縁(名) 一に無明二に行、三に識、四に名色、五に交、六に觸、七に受、八に愛、九に取、十に有、十一に生、十二に老死。(佛教)

じしゅふにりつ 十二律(名) 律管にて定むる十二種の音楽の調子。即ち壹越、斷金、平調、勝絶、下

無、雙調、鳧鏡、黃鐘、鸞鏡、盤漆、神仙、上無。

ジジュニ
ふににぐわ
ううぶつ

十二光佛(名) 一に無量光

佛、二に無邊光佛、三に無礙光佛、四に無對

光佛、五に熾五光佛、六に清淨光佛、七に歡

喜光佛、八に智慧光佛、九に不斷光佛、十に

難思光佛、十一に無思光佛、十二に超日月光

佛。(佛教)

ジジュニ
ふににぐわ
ううぶつ

十二月(名) 年の第十二番目の月。

ジジュニ
ふににぐわ
ううぶつ

十二天(名) 十二種の天上界。即ち日

天、月天、帝釋天、伊舍那天、焰魔天、羅刹天、

水天、風天、火天、地天、多聞天、大梵天。(佛

教)

シシユウにニユウ
ふ

收入(名) 金錢など取り入るゝ事。

ジジュニ
ふにに

十二支(名) 年月日の代りに用ふる十二

種の名稱。すなはち子、丑、寅、卯、辰、巳、午、

未、申、酉、戌、亥。

ジジュニ
ふにに
うのみぞ

十二章の御衣(名) 袞龍御

衣に同じ。

ジジュニ
ふにに
じんしや

十二神將(名) 薬師を守る武

將。一に毘羯羅大將、二に招杜羅大將、三に

眞達羅大將、四に摩虎羅大將、五に波夷羅大

ジジュニ
ふにに
ひとへ

將、六に因達羅大將、七に珊底羅大將、八に
類儺羅大將、九に安底羅大將、十に迷企羅大
將、十一に伐拆羅大將、十二に宮毘羅大將。
(佛教)

十二一重(名)

中古以來維新前まで

用ひられたる貴婦人裝束の名。袖の上に單

衣、打衣、五衣、表衣、庚衣と順々に重ね着

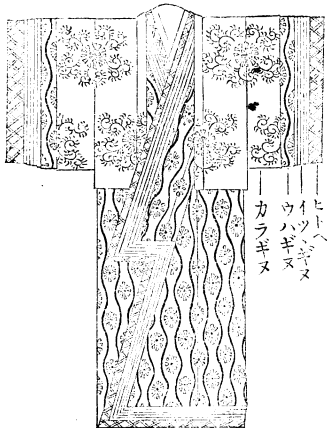
て袴袴を着け裳を結びたる服装。十二一重

さは五衣を多くして十枚も二十枚も重ね着

る事ありしよりの稱にて十二と數を限りた

る意にはあらず。……なほいつきぬを参考

せよ。(圖一、二、三)



二



三



シシユウホ 秋暮(名) 秋の夕暮。

ジツエフツカハオウ 什寶(名) 寶物。

シシユフハオウシヤ 襲芳舎(名) 禁中六舎の一つ。一名は雷の壺。

シシユウゴ 舅(名) 夫又は妻の父。

シシユウゴ 囚徒(名) めしうご。

シシユウゴク 宿徳(名) 徳を積みたる人。

シシユウゴメ 姑(名) 夫又は妻の母。

シシユウヂン 袖珍(名) 袂に入れて携帯せらるゝ程の小本。

シシユフツチャク 執着(名) 心を深く染むる事。●執心。

ジウレリヨフツ 銃獵(名) 銃にてする鳥獸の獵。

ジシユウリン 蹂躪(名) 踏みにじる事。△(動)―蹂躪す。

ジユウワウ 縦横(名) 縦と横。△(形)―縦横の(副)縦横に。

ジシユフツワウ 十王(名) 冥府に居る十人の王。一に秦

廣王、二に初江王、三に宋帝王、四に五官王、

五に閻魔王、六に變成王、七に太山王、八に

平等王、九に都市王、十に五道轉輪王。(佛

教)

シシユウカイダウ 秋海棠(名) 草の名。葉は心臟形に

て秋の頃海棠に似たる花咲くもの。

シシユ うたん

愁歎(名) 憂ひ歎く事。△(動)―愁歎す。

シシユ うれい

秋冷(名) 秋の冷氣。

シシユ ふねん

執念(名) 人に取り付く程の思。

シシユ ふりねん

十念(名) 十返唱ふる念佛。(佛敎)

シシユ ふりねし

執念(形。形状言ク活) 執念深し。

シシユ ふりのう

十能(名) 炭火を入れて持ち運ぶ具。

シシユ うく

秀句(名) 〔一〕秀逸の句。〔二〕上手に出来たるしやれ。地口の類。●しやれ。○徒然、文保に三井寺焼かれし時、坊主にあひて御坊

なば寺法師とこそ申しつれど、寺なければ、今よりは法師とこそ申さめさいはれけり。いみじき秀句なりけり。

シシユ ふくぬの

十九布(名) 弓袋などにする布。十九たばにて織りたるもの。

シシユ ふぐつ

十月(名) 年の第十番目の月。

シシユ ふくつん

習慣(名) ならはし。●仕来り。●辯。

シシユ うぐわく

收穫(名) 穀物などを取り入るゝ事。又は取り入れたる高。△(動)―收穫す。

シシユ うん

従軍(名) 軍に出づる事。△(動)―従軍す。

シシユ ふや

十夜(名) 浄土宗にて陰曆十月六日より十

日間念佛して行ふ佛事。

じゅうまん

充滿(名) 満つる事。△(動)―充滿す。

じしゅ ぶつまんおとど

十萬億土(名) 極樂にありて佛の住む所。(佛敎)

ししゅ うげん

祝言(名) 〔一〕祝の言葉。〔二〕其日の能樂の終に奏する祝言の謠。〔三〕婚禮。

ししゅ うふ

醜婦(名) 容貌のみにくき女。

ししゅ うぶん

秋分(名) 二十四氣の一つ。秋にありて晝夜平分する時。現今の曆にては九月二十一日の頃にあり。

ししゅ うぶん

醜聞(名) 聞き苦しき評判。●不品行の噂。十分(名) 不足の無き事。●満足なる事。△(形)―十分なる。(又)―十分の。(副)―十分に。

ししゅ うふう

秋風(名) あきかぜ。

ししゅ うふうらぐ

秋風樂(名) 雅樂の曲名。

じゅうふく

戒服(名) 〔一〕軍服。〔二〕洋服。

ししゅ ぶつがぶつ

習合(名) 神道一派。佛法を混合して説くもの。

ししゅ ぶつがぶつてん

集合點(名) 多くの線の一處に出合ふ處。

しやうごうし

囚獄司(名) 官廳の名。刑部省に屬して専ら獄屋に關する事を掌るもの。官吏は正、佑、令、吏あり。●ひこやのつち、ま。

じしよふごち

十五夜(名) (一)陰曆十五日の夜。(二)特には八月十五日の夜。

しやうえん

終焉(名) 死に際。●死期。●今は。從弟(名) 己れより年下のい。

じゆうてい

十弟子(名) 釋迦の高弟十人。即ち摩訶迦葉、阿難陀、舍利弗、目捷連、阿那律、須菩提、富樓那、迦旃延、優婆離、羅睺羅。

じしよふあく

十惡(名) 十種の罪惡。即ち殺生、偷盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見。(佛敎)

しやうごうく

終歲(名) 一年中。

しやうごうく

秀才(名) (一)すぐれたる才學。(二)進士の異名。(三)文章得業生の異名。

じしよふちんたくし

十三代集(名) 十三部の勅撰和歌集。すなはち新勅撰、續後撰、續古今、續給遺、新後選、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今。

じしよふさんや

十三夜(名) 陰曆九月十三日の夜。此

じしよふちんぶづ

夜月を賞するの風俗あり。十三佛(名) 一に不動、二に釋迦、三に文珠、四に普賢、五に地藏、六に彌勒、七に藥師、八に觀音、九に勢至、十に阿彌陀、十一に阿闍、十二に大日、十三に虚空藏(佛敎)

じしよふちんぎやぎやう

十三經(名) 支那にて十三部の經書。即ち五經に公羊傳、穀梁傳、周禮、儀禮、論語、孝經、孟子、爾雅の八經を加へたるもの。

ししよき

秋季(名) (一)秋の末の月。(二)秋の時節。祝儀(名) (一)祝の儀式。●祝ひ。(二)祝ひの印に贈る進物。

ししよき

衆議判(名) 多くの人が集まりて判定する事。歌合などに云ふ。●各評。(徒然)

ししよき

宗教(名) 人間に安心立命を得しむる神佛の敎。

ししよき

蹴鞠(名) 蹴る一種の遊戲。

ししよき

就眠(名) 眠に就く事。△(動)就眠す。宗旨(名) (一)宗教の趣旨。(二)宗教●宗門。

ししよき

祝詞(名) 祝言。習字(名) 手習。

ししよき

ジシュふッジ

十字(名) 「一」十の字。●十文字。「二」餅の

異名。◎昔し支那にて晋の何曾といひし人蒸餅を食するに當たり其上に小刀目を十文字に入れて食ひよきやうにしたる故事によりて云ふ。○東鑑「十字を賜ふ」同「十字を供す」

ジシュふッしちし

十七史(名) 十七種の支那歴史。即ち

史記、前漢書、後漢書、三國史、晉書、宋書、南齊書、梁書、陳書、後魏書、北齊書、周書、隋書、南史、北史、唐書、五代史。

ジシュふッじか

十字架(名) 「一」古へ西洋にて罪人を磔にするため十の字形に木を組合はせたるもの。「二」特には基督の所刑せられし十字架。基督教にては常に之を記號に用ひて尊信するもの。(基督教)

シシュうじがく

修辭學(名) 文章演説の方法を研究する學科。

シシュウシヤシヨウ

愁傷(名) 悲しみ傷む事。△(動)―愁傷す。

シシュウシヤシヨウ

周章(名) あわつる事。●うろたへる事。△(動)―周章す。

しゅうじつ

終日(名) 其日一日。

しゅうしん

終身(名) 身を終はるまで。●一生涯。

シシュウしん

修身(名) 「一」身の行ひを修むる事。「二」道徳を教ふる學科の名。●修身學。

シシュふッしん

執心(名) 「一」死後まで此世に心を殘す事。(佛教)「二」熱心。

ジシュウじやく

柔弱(名) かよわくて力無き事。●懦弱。

しゅうじゆう

主從(名) 主人と從者と。●君臣。

ジシュふッもつ

什物(名) 道具。

ジシュふッもんじ

十文字(名) 十の字の如く交叉したる形。△(形)―十文字の。(副)―十文字に。○「腹十文字に掻き切つて」

ジシュふッもんじやり

十文字鎗(名) 鎗の一種。穂先を十文字に作りたるもの。

ジシュふッもんせん

十文錢(名) 寛永四年に鑄たる錢。小錢十箇の價を有したるもの。今は通用せず。

ジシュふッもじ

十文字(名) じふもんじに同じ。

シシュウせい

秋晴(名) 秋の晴天。

シシュウせい

修正(名) 改め直す事。△(動)―修正す。

しんしゅうせん

周旋(名) 世話する事。△(動)―周旋す。

じしゅふふぜん

十善(名) 〔一〕十悪を犯さぬ事。一に不殺生、二に不偷盜、三に不邪淫、四に不妄語、

五に不兩舌、六に不惡口、七に不綺語、八に

不貪欲、九に不瞋恚、十に不邪見。(佛敎)

〔二〕天子の位。◎前世に十善を得たる果報

にて天子に生るゝとの佛説より云ふ。

しんしゅうする

秋水(名) 刀の異名。

しんしゅうするらむ

拾翠樂(名) 雅樂の曲名。

しんしゅうのり

主禱(名) 基督の弟子に教へし祈。(基督敎)

しゆく

宿(名) 旅籠屋のある土地。

じゆく

塾(名) 學生の寄宿所。

じゆくろ

熟路(名) 馴れたる路。

しゆくば

宿場(名) 宿驛のある場所。

しゆくばつ

祝髮(名) 僧となるため頭の髪を剃り落す事。△(動)―祝髮す。

しゆくばう

宿坊(名) 參詣者の宿泊のために設け置く寺中の坊。

しゆくばう

宿望(名) 宿志。

しゆくごう

祝禱(名) 集會の終に牧師のする祈禱。(基督

しゆくちよ

淑女(名) 女徳を備へたる婦人。

しゆくちやく

宿直(名) 宿りて番する事。●泊り番。△(動)―宿直す。

しゆくわい

首魁(名) 頭立つ人。

しゆくたい

宿題(名) 兼ねてより出だし置く題。

しゆくれん

熟練(名) 經驗ありて上手なる事。△(形)―熟練なる。(副)―熟練に(動)―熟練す。

しゆくつき

宿繼(名) 宿にて取り次ぎて順次に次の宿へ送る事。

しゆくらん

熟覽(名) よくく見る事。△(動)―熟覽す。

しゆくん

主君(名) 主人。●君。

じゆくごう

准后(名) 〔一〕女官にして皇子、皇女を生みたるものに賜はる尊稱。〔二〕准三后。

しゆくぶん

祝文(名) 祝を述ぶる文章。

しゆくふく

祝福(名) 神の恩寵あらん事を願ふ祈。(基督敎)

しゆくごふ

宿業(名) 前世よりの罪業。(佛敎)

しゆくえ

宿衣(名) 衣冠の一名。(禁秘抄)

しゆくあひ

宿衛(名) 護衛の爲め禁中に宿直する事。

しゆくゆう

祝融(名) 〔一〕支那の火の神。〔二〕火事。●

出火。

しゆくし

祝詞(名) 祝ひを述ぶる言語。又は文章。

しゆくし

宿志(名) 兼れてより立てたる志。

しゆくじつ

祝日(名) 祝ふべき日。

しゆくじゆ

宿儒(名) 老年の大儒者。

しゆくす

祝(他動サ變) 祝ふ。

しゆくす

宿(自動サ變) 宿る。

しゆくす

熟(自動サ變) 〔一〕物事の出来上がる。〔二〕老練する。

しゆくすゐ

宿醉(名) 前日の酒の酔。●二日酔。

しゆくげ

頌偈(名) 偈に同じ

しゆくげい

主計(名) 會計を掌る役。

しゆくけん

主權(名) 主たる權力。

しゆくげんた_下う

修驗道(名) 佛教の一流派。神佛二道を混合したる一種の教。此道に入るものを修驗者といひ。出で、修行のため諸國の山々を遍歴するものを山伏といふ。宇多天皇の

しゆくげんじや

修驗者(名) 修驗道を見よ。

しゆくぶ

鷲峰(名) 靈鷲山に同じ。(諸曲)

しゆくふく

修覆(名) 損じたる所を直す事。△(動)―修覆

しゆくご

守護(名) 〔一〕守る事。又は其人。△(動)―守護す。〔二〕鎌倉時代。警備の爲め諸國に配置したる役人。

しゆくこん

種根(名) 種姓。●生れつき。(盛衰)

しゆくこん

入魂(名) 交際の親しき事。●懇意。△(形)―入魂の。(副)―入魂に。

しゆくかう

趣向(名) 仕組。●考案。△(動)―趣向す。首肯(名) 合點。●承知。△(動)―首肯す。

しゆくか_{ゴウ}

衆合(名) 地獄の一つ。兩山の間狭みつぶされ巖にて打ち碎かるゝなどの苦を受くるさころ。(佛教)

しゆくか_{ゴウ}

酒胡子(名) 雅樂の曲名。

しゆくごし_ゴ

守護職(名) 守護の職。

しゆくご

集會(名) しふくわい。(雅)

しゆくえん

酒宴(名) 人と共に酒を飲みて楽しむ事。●さかもり。

しゆくてん

主典(名) 〔一〕官名。さくわん。〔二〕特に使

しゆくでん

のさくわん。

しゆくでん_{つくり}

主殿(名) 寢殿の一名。主殿造(名) 寢殿造に同じ。

しゆざ 首座(名) 上の席。●正座。

しゆざく 主宰(名) 萬事を引受けて司る事。又は其人。
△(動)―主宰す。

しゆざく 主祭(名) 希臘教の教職の名。新教派の長老に
當たる。(基督教)

しゆざく 首罪(名) 多くの犯罪者中にて其首たる人。

しゆざく 衆罪(名) 多くの罪惡。(佛教)

しゆざく 准三后(名) 三后だけの祿を賜はる待遇。
攝政、關白などの特に賜はるもの。

しゆざく 朱鞘(名) 朱塗の刀の鞘。

しゆざく 手記(名) 手づから筆記する事。△(動)―手記す。

しゆざく 酒氣(名) 酒の氣。

しゆざく 主義(名) 其人の守り行ふ説。

しゆざく 入御(名) 天皇の内に入り給ふ事。△(動)―入
御す。

しゆざく 酒興(名) 酒を飲みたる時の愉快。

しゆざく 酒狂(名) 酒に酔ひて狂ふ事。

しゆけきやう 主教(名) 舊教の教職の名。(基督教)

しゆけきやう 修行(名) 「一」修め行ふ事。「二」研究す
る事。……△(動)―修行す。

しゆけふ 修業(名) 業を修め學ぶ事。△(動)―修業

しゆきやう 入興(名) 心が興に入る事。△(動)―入興す。

しゆぎやきやう 孺形(名) あまがつに同じ。

しゆげふ 授業(名) 學業を教へ授くる事。△(動)―
授業す。

しゆげふ 受業(名) 學業の教を受くる事。△(動)―
受業す。

しゆ 須臾 しばらく。●暫時。(形)―須臾の。(副)―
須臾に。

しゆみ 須彌(名) 須彌山の略。

しゆみ 塵尾(名) 僧の持つ具。拂子。

しゆみ 趣味(名) 面白み。●言はれぬ味。

しゆみやみやう 壽命(名) いのち。

しゆめ 殊妙(名) すぐれたる事。●絶妙。△(形)
―殊妙なる。(副)―殊妙に。

しゆみだん 須彌壇(名) 佛を祭る座。●佛壇。

しゆみのし 須彌四州(名) 須彌山の四方にある
國。一に東弗婆提。二に南閻浮提。三に西瞿
耶尼。四に北鬱單越。(佛教)

しゆみざ 須彌座(名) 「一」佛を祭る座。「二」兜の八幡座。

しゆみせん 須彌山(名) 想像の高山の名。世界の中心に

ありて高さ三百三十六萬里。日月も此山を廻りては此山の陰に隠れて休むといふこと。 (佛教)

しゆじ

朱字(名)

印刷にいふ詞。押す時字の赤く表はるもの。……地赤くて文字の白く表はるものを白字といふ。

しゆしやう

殊勝(名)

すぐれたる事。●感賞すべき事。△(形)―殊勝なる。(副)―殊勝に。

しゆしやんしヨウ

主上(名)

しゆじやうに同じ。

しゆしやんシヨウ

首相(名)

總理大臣の異名。

しゆしやんシヨウ

首唱(名)

最初にいひ出す事。△(動)―首唱す。

しゆじやんシヨウ

主上(名)

今上陛下。

しゆじやんシヨウ

衆生(名)

佛の眼より見る世間一般の動物。成佛し得べきもの。

しゆじやんシヨウ

種姓(名)

身分。●生れ。

しゆじ

主日(名)

日曜日。(基督教)

しゆじ

取捨(名)

取りて用ふる事と捨て、用ひざる事と。△(動)―取捨す。

しゆじ

儒者(名)

儒道を深く究めたる人。

しゆじ

佞儒(名)

身長の極めて低き人。●一寸法師。

しゆじゆ

種種(名)

色々。●數々。△(形)―種々の。(副)―種々に。

じゆじゆつ

咒術(名)

まじなひ。

しゆび

首尾(名)

「一」はじめと終り。 「二」都合。

しゆびん

渡瓶(名)

小便を取る爲め室内に置く陶製の器。

しゆもつ

腫物(名)

皮膚に凸起して膿汁を含む病の總稱。●できもの。

じゆもん

咒文(名)

まじなひに唱ふる文句。

しゆもく

撞木(名)

鉦を打つ丁字形の槌。

じゆもく

樹木(名)

木。

じゆもくづゑ

撞木杖(名)

頭を撞木の形に造りたる杖。

しゆせいし

酒清司(名)

雅樂の曲名。

しゆぜん

主膳(名)

主膳監の略。

じゆせん

受洗(名)

洗禮を受くる事。△(動)―受洗す。(基督教)

じゆぜん

受禪(名)

皇位の譲りを受くる事。△(動)―受禪す。

しゆぜんかん

主膳監(名)

古へ東宮の御膳を司りたる役所。

しゆせんし

鑄錢司(名)

官廳の名。錢貨を鑄造すること。

ろ。

じゅせんし

鑄錢司(名)

しゆせんしに同じ。

しゆす

縐子(名)

絹布の一種。極めて滑かに又極めて光

澤あるもの。

しゆす

修(他動サ變)

修むる。●行ふ。

じゆす

誦(他動サ變)

誦して讀む。

じゆす

數珠(名)

すゞに同じ。

じゆす

入水(名)

身投げ。△(動)→入水す。

しめ

熊(名)

鳥の名。背は灰色、腹は黄色にして嘴太

きもの。

しめ

注連(名)

神前又は新年の儀式として張り渡す

繩。藁の足を付けて作り紙の幣を垂らす。

しめ

標(名)

出入を禁する爲めに設けたる目印。

しめ

締。べ(名)

●合計。「二」締め括りたるものを數ふる詞。

「三」物の封じ目に記するべの字。

しめはやす

(他動四段)

野をしめて木を生やす。催馬

樂)

しめる

濕(自動四段)

「二」水氣を帯ぶる。●じこく

する。「二」火の消ゆる。

しめる

(自動四段)

しめやかになる。●陰氣になる。

しめかざり

注連飾(名)

新年に家の内外に飾り付くる

注連繩。

しめだいこ

締太鼓(名)

太鼓の一種。鼓の如く胴を皮

二枚の間に挟み調べにて締めて打つもの。

しめだか

締高。べ高(名)

總計。●合計。

しめなは

注連繩(名)

注連の繩。●注連。

しめらに

(副)

すがらにに同じ。終日又は終夜の終の

字の意。○萬葉「此夜すがらにしも寐すに

今日もしめらに戀ひつゝぞ居る」

紙面(名)

手紙。

しめん

四面(名)

四方。●周圍。

しめのうちびと

(名) 神事を司る人。

しめくくる

締括(他動四段)

「二」結び束ぬる。「二」取

締る。

しめやか

靜かなる有様。●しつさり。●ひっそり。

●しんく。●しつぱり。(形)→しめやか

なる。(副)→しめやかに。

しめやぐ

(自動四段)

しめやかになる。(落窪)

しめぎ

榨木(名)

油を絞る機械。油桶の上に大なる横

木を渡し兩端に楔くわを仕掛けて壓するもの。

しめきる

締切(他動四段)

「二」入口を鎖して物の入ら

ぬやうにする。「二」兼ねて定めたる期限内よりて物事の纏めを付くる。

しめし

(名)

赤兒の大小便を拭ひ取る布切れ。

しめし

(示(名))

「一」見する事。「二」教ふる事。

しめじ

(名)

菌の一種。鼠色にて松茸よりも小さく柔きもの。食用とす。

しめじめ

(副)

「一」しめやかに。「二」しめる有様。…(又)しめじめと。

しめす

(示(他動四段))

「一」見する。●顯はす。「二」見

しめすへん

(示偏(名))

漢字の偏の名。神、社、福などの左の部分。

しみ

(衣魚(名))

虫の名。衣類書籍の間などに生ずる銀色のもの。

しみ

(染(名))

物に汁などの染みて付きたる跡。

しみ

(名)

土などの氷る事。

じみ

(名)

衣服の色合、模様などのぼでやかならぬを云ふ。

しみに

(副)

しみゝに同じ。○堀川「水はよしあたりもしみに吹き過ぐる風さへさゆる玉の井の里」

しみづ

(清水(名))

清き流。●泉。

しみらに

(副)

しみみに同じ。(万葉)

しみん

(四民(名))

すべての人民。士、農、工、商。

しみさび

(自動上二段)

茂りて神さぶる。○萬葉「春山さしみさび立てり」

しみみに

(副)

繁く。○萬葉「家人は道もしみゝに通へども我待つ友が使こぬかも」同「見まくほり我待ち戀ひし秋萩は枝もしみゝに花さきにけり」

しみじみ

(副)

静にゆつくりと。●心にしむほごに。(又)しみじみと。

しし

(獅子(名))

「一」獸の名。熱帯國の産にて獸類中尤も猛烈なるもの。爪極めて鋭く牡には美麗なる鬃あり。「二」伎樂の曲名。「三」獅子舞の略。「四」獅子丸の略。

しし

(名)

「一」肉を賞味する獸類の總稱。「二」特に猪。「三」特に鹿。

しし

(肉(名))

にく。

しし

(刺史(名))

守の異名。

しし

(名)

父に同じ。(万葉東歌)

しし

(感)

「一」物を追ふ聲。警蹕などに用ふ。「二」制

しめし

止する聲。

しじ 四時(名) 四季。

じじ 時事(名) 世の中の出来事。

しじいでん (名) 紫宸殿の音便。

しじに (副) 繁く。○萬葉「五百枝さししに生ひたる櫻の木」

ししちほん 四七品(名) 法華經二十八軸を云ふ。(佛教)

しじぬく 繁貫(他動四段) 繁く貫を通す。……多く織に云ふ。○萬葉「大船に真織しぬき」

しじる 縮(自動下二段) ちぢる。

ししわう 獅子王(名) 獅子の美稱。◎動物の王と言ひならはしたる故。

ししがり 獸狩(名) 獸獵。

しじかむ (自動四段) ちかむに同じ。

ししがき 鹿垣(名) 鹿の來襲を防ぐために設くる逆茂木。

ししがしら 獅子頭(名) 獅子の頭に似せて造りたるも獅子舞の時之を被る。

ししよ 四書(名) 四種の支那經書。即ち大學、中庸、論語、孟子。

じしよ 辭書(名) 言語の解を示したる書。●字引。●辭典。

じじよ 自序(名) 著者自ら書く本の序文。

しししう 刺衝(名) 刺撃。△(動)―刺衝す。

ししやしヨウ 師匠(名) 學藝を教ふる人。●教師。

ししやしヨウ 死傷(名) 「一」死する事と傷つく事と。「二」死人と負傷人と。

ししやしヨウ 四生(名) 生物の生れ方四種。すなはち胎生、卵生、濕生、化生。(佛教)

じししう 自稱(名) 自ら名づくる事。△(動)―自稱す。

じしやしヨウ 自性(名) 自分の本性。(佛教)

じしやしヨウ 時正(名) 春分、夏至、秋分、冬至の日。

じしやしヨウ 事情(名) 譯柄。●次第。

じしよ 辭職(名) 辭して職務を退く事。△(動)―辭職す。

ししそんぞん 子子孫孫(名) 代々の子孫。

じじつ 時日(名) 時間と日數と。

じじつ 事實(名) 實際有りたる事柄。

しじら (名) 織物の名。縮。

ししん 指針(名) 「一」方角を示す針。「二」特には磁石の針。

ししん 始審(名) 始めての審判。

しじむ 縮(自動四段) ちぢむ。

しじむ 縮(他動下二段) ちぢむる。

しじん 詩人(名) 詩を専門として作る人。

しじん 四神(名) 京都の四方を鎮護する四つの神。東

しじん 青龍、南朱雀、西白虎、北玄武。

ししん 侍臣(名) 近臣。

ししん 自身(名) 自分の身。

じじん 自刃(名) 刃物にて自殺する事。△(動)―自刃

す。

じしんばん 自身番(名) 徳川時代江戸町役人の詰所に

出で、番をする事。

ししむら (名) 肉のむらがり。●肉。

ししんけい 視神經(名) 眼底にありて視覺を掌る神

經。

ししんでん 紫宸殿(名) 大内裡の正殿。大禮は此殿に

於て行はる。●南殿。

ししのみ 獅子座(名) 「一」佛の座。○拾玉「位山うき

よにこそは下るこも獅子の座に乗る身こも

なりなん」(二)特には文殊菩薩の座。

ししゃ 使者(名) 使の人。

じし。く 磁石(名) 「一」鐵の一種。常に北極に向ひ又よ

く鐵を吸引する性を有するもの。(二)磁石

製の針を他の小針の上に載せて北極を指さ

しめ之によりて方角を測る器械。

しじま (名) 佛家にてする無言の行。その時間の終は

る時は鉦を打ちて合圖す。

ししまひ 獅子舞(名) 獅子の猛り狂ふ様に擬して演ず

る舞曲の總名。

ししまる 獅子丸(名) 古代琵琶の名器。唐土より渡來

する海中にて龍神に奪はれしと言ひ傳ふる

もの。

しじまる 蹙(自動四段) 縮まるに同じ。

しじまふッ (自動四段) 進み兼ねる。●はらばふ。(雅)

ししふんじん 獅子奮迅(句) 獅子の猛り狂ふが如く烈

しき有様。

ししこらかす (他動四段) 病をこじらす。●こじくら

す。(雅)

じしゅ 自首(名) 罪惡を悔いて自ら訴へ出づる事。△

(動)―自首す。

じじゆん 耳順(名) 六十歳の齡。●還曆。

ししじゅう 四州(名) 須彌の四州を見よ。(佛教)

しし^{シニ}ふ^フ 詩集(名) 詩を集めたる書物。

しじ^{シユ}ふ^フ 四十(敷) 十の四倍。●よそ。

じし^シう 時宗(名) 佛教の宗派。諸國を遍歴して念佛を

勤めあるくを主と爲し建治の頃僧一遍の創めたるもの。

じじ^シう 侍従(名) 〔一〕官名。天皇の御側近く仕ふる役。

〔二〕薰物の一稱。

しじ^{シユ}ふ^フは^ハて 相撲の手の變化四十八

種。

しじ^シふ^フから 四十雀(名) 小鳥の名。背鼠色にて頭

と翅と黒く腹白きもの。秋の頃群をなして里に來る。其聲喧し。

しじ^{シユ}ふ^フく^クに^ニち 人の死後四十九日

目。又は其日に營む佛事。

しし^シの^ノば^バな 四種花(名) 四華に同じ。

しじ^シぐ^グ 私塾(名) 學藝を教ふる私立の塾。

じし^シが^ガう 十種香(名) 〔一〕十種の名香。即ち梅檀、

沈水、蘇合、薰陸、鬱金、白膠、青木、零陵、甘松、雞舌。〔二〕是等の香を焚き遊ぶ遊戯。

しじ^シみ 蜆(名) 貝の名。形は蛤に似て小さく色は黒に

白點を帶ぶるもの。

しし^シもの 鹿自物(副) 鹿の如く。(古)

しし^シび^ビと 夫人(名) 魚の料理入。

しし^シび^ビし^シほ^ホ 鮪(名) 魚の名。形鱈に似て大きく肉赤く味又美

なるもの。●まぐろ。

しび^ビ 鴟尾(名) 屋根の裝飾に置く瓦。鯪瓦、鬼瓦の類。

じひ^ヒ 侍婢(名) 腰元。

じひ^ヒ 慈悲(名) 慈悲。●憐れみ。

しび^ビど 死人(名) 死にたる人。

しび^ビり 痺(名) しびれに同じ。

しび^ビる 痺(自動下二段) 皮膚の感覚が無くなる。●麻痺する。

しび^ビヤ^ヤヒ^ヒウ 四病(名) 和歌の病辭。一に岸樹病、二に

風癩病、三に浪船病、四に落花病。(喜撰式)

しび^ビれ 痺(名) 〔一〕痺るゝ事。●麻痺。〔二〕特には長

坐の折足の痺るゝ事。

しび^ビれ^レぐ^グすり 痺藥(名) すべての感覚を失はしむる藥

品。●癩醉藥。

しひ^ヒつ 試筆(名) 書初。

じひ^ヒつ 自筆(名) 自分の書きたる書讀。

しび^ビら 襷(名) 男は袴の上に、女は裳の上に重ね着る

短き裳。●上裳。

じびん

自髪(名) 自ら髪を結ふ事。△(形)―自髪の。

じびき

字引(名) 字書。●辞典。

しも

霜(名) 露の寒氣に觸れて氷りたるもの。

しも

下(名) かみうへの反對。●した。●げ。●以下。

しも

(助辞) 「二」口調さ意味さを強むる爲めのみに置く。○金葉「今はしも穗に出てぬらん東路

のいはたの小野の篠の小薄」「二」却りての意を含めるもの。○古今「青柳の糸よりかくる春しもぞ亂れて花のほころびにける」

「三」その意を含めるもの。○馬内侍集「君しもあれ道のゆき、を定むらん過ぎぬる人はいつ忘れつゝ」

しもばれ

霜腫(名) しもやけに同じ。

しもばしら

霜柱(名) 霜のため持ち上げられたる土に

氷砂糖の如く白く凝り付きてあらはれたる氷。

しもべ

下部(名) 「二」召使のもの。●下女下男。「二」

信者のみづから神に對して云ふ詞。(基督教)

しもむ

笞(名) 古代の刑罰の具。罪人を打つためのも

しもぞ

楮(名) 木の本より繁く生ひ出でたる若枝。

しもづくゑ

楮机(名) 木の若枝を組み合はせて作れる机。神事などに用ふるもの。(圖)

しもどゆふ

楮結(枕) 葛城の枕詞。薪にする楮を葛にて結び束ぬるの意。

しもをんな

下女(名) げぢよ。●下婢。

しもわらは

下童(名) 下仕の童子。

しもがる

霜枯(自動下二段) 霜に逢ひて草の枯るい。

しもがかり

下掛(名) 能樂にて金春、金剛、喜多の三流を云ふ。……徳川時代三流の太夫は京都に住まざりし故の名。……上掛を参考せよ。

しもがれ

霜枯(名) 霜枯るゝ事。

しもよ

霜夜(名) 霜の降る夜。

しもよけ

霜除(名) 草木などの霜枯を防ぐため藁などにて被ふ事。

しもづかへ

下仕(名) 下々に使はるゝ奉公人。

しもつやみ

下暗(名) 陰曆にて月の下旬の暗夜。

しもつき

霜月(名) 十一月の異名。

しもむ

下無(名) 雅樂の調子の名。



しものく 下句(名) 和歌の末の二句。

じもく 耳目(名) (一)耳と目と。(二)聞く事と見る事と。

しもくち 霜種(名) しもやけに同じ。

しもぐもり 霜曇(名) 霜の降りたる時水蒸氣のために空の曇る事。

しもやけ 霜焼(名) 寒氣のため手足の赤く紫に腫れて痒くなるもの。●しもくち。●しもばれ。

しもやしき 下屋敷(名) 大名の別荘。●別邸。……上屋敷を参考せよ。

しもふり 霜降(名) 霜の降りたる如く斑に付きたる白點。

しもふりづき 霜降月(名) 陰曆十一月の異名。

しもどりづき 霜籠月(名) 陰曆十一月の異名。

しもぢま 下様(名) 下等社會の者共。

しもみぐさ 霜見草(名) 寒菊の異名。

しもじも 下下(名) 下様の人々。

しもびと 下人(名) げにん。●下男下女。

しせく 四姓(名) 「名」我國にて昔し勢力ありし四つの家門。即ち源、平、藤原、橘。(二)天竺にて古

へ國民を分ちたる四大階級。即ち婆羅門、

刹帝利、毘舍、首陀。

四聲(名) 平、上、去、入。……韻を見よ。

二星(名) 二つの星。牽牛織女。

辞世(名) 死際に作る詩歌。

自製(名) 手製。

時勢(名) 時世の有様。

時世(名) ときよ。●時代。

私生兒(名) 父の分明ならぬ生兒。●ていなし。

使節(名) 君命を受けて他國へ行く使。

師説(名) 師匠の説。

時節(名) 「一」時候。「二」時代。

詩箋(名) 漢詩を書く用紙。半紙半枚程のものにて書などかきたるもの。

自然(名) 人の力を用ひずしておのづから然る事。●天然。

自然(副) もしも。●第一。○謡曲「自然鎌倉に御上りあらば御尋あれ」

慈善(名) 人を憐み慈しむ事。

自然に(副) おのづから。●天然に。

死(自動サシ) 死ぬる。

しせん 自然に(副) おのづから。●天然に。

しぜん 自然(副) もしも。●第一。○謡曲「自然鎌倉に御上りあらば御尋あれ」

じぜん 慈善(名) 人を憐み慈しむ事。

しぜんに 自然に(副) おのづから。●天然に。

しす 死(自動サシ) 死ぬる。

しす

弑(他動サ變)

しいすに同じ。

じす

辭(他動サ變)

〔一〕辭退する。〔二〕別れを告ぐる。

しすゐ

雌蕊(名)

植物學上の詞。花の中心にありて雄

蕊と共に實を結ぶに必用なる機關。

じすゐ

自炊(名)

自ら食事を調ふる事。△(動)―自炊

す。



しす